孤狼の牙

峰隆一郎

徳間文庫

徳間文庫

峰　隆一郎　作品

柳生十兵衛
柳生十兵衛《龍尾の剣》
柳生十兵衛《逆風の太刀》
柳生十兵衛《剣術猿飛》
柳生十兵衛《兵法八重垣》
柳生十兵衛《月影の剣》
柳生十兵衛《無刀取り、四十八人斬り》
柳生十兵衛《斬馬剣》
柳生十兵衛《極意転(まろばし)》
孤狼の牙

カバーイラスト＝鴇田　幹
カバーデザイン＝秋山法子
カバー印刷＝近代美術㈱

孤狼の牙

峰隆一郎

徳間文庫

み
7-10
¥495
孤狼の牙
峰隆一郎
徳間文庫

9784198900632
ISBN4-19-890063-9
C0193 ¥495E (1)
1920193004953
定価：本体 495円＋税

大山参詣で賑う相州田名村の久所(くぞ)に流れついた浪人・飽浦(あくら)十輔はそこで意外な名を聞いた。

磯辺の酉造(とりぞう)。二年前、飽浦が世話になっていた女を惨殺した下手人と噂された男だった。地元に賭場を持ち、界隈を仕切る九沢一家の伊三郎が酉造の首に賞金を懸けているという。偶然、賞金目当ての浪人と酉造の立会いを見た飽浦は酉造の「見切り」の妙技に驚く。その飽浦に、酉造が話があるという……。傑作時代小説集。

徳間文庫

孤狼の牙

峰　隆一郎(みねりゅういちろう)
1931年
長崎県生まれ

徳間文庫

孤狼の牙

峰 隆一郎

徳間書店

孤狼の牙

峰 隆一郎

徳間文庫

徳間文庫

孤狼の牙

峰 隆一郎

徳間書店

目次

流れ灌頂（ながれかんじょう） 5
窮鳥を討つ 59
右京ヶ原 99
血風・先斗町（ぽんとちょう） 133
木母寺（もくぼじ）にて斬る 169
点鬼簿 197
八辻ヶ原 227
駒ヶ原 249
解説　前島不二雄 277

流れ灌頂

流れ灌頂とは、無縁の亡者や水死人の手向けとするものである。川のほとりに六本の卒塔婆を立て、それを柱として白布を掛け、樒の葉を供える。側に柄杓を備えておき、通りがかりの人に川の水を白布に注いでもらう。布が濡れている間は、冥土の死者の苦しみが救われるという。

1

飽浦十輔が、追っていた男をはじめて目にしたのは、七月一日、大山開山の日であった。夏の灼けつく太陽が、相模川の河原の砂利を炒りあげていた。陽炎が土堤の夏草を燃やし、

青い炎をあげているかに見えた。川は碧い水をたたえ、緩やかに流れていた。

男の姿は水辺にあった。痩軀である。影が薄れて見えた。背に疲労が滲んでいた。男は木柄杓を手に、水を掬い、流れ灌頂の白布に注いでいた。どこか気怠い動きである。白布が水びたしになると、安堵の色を刷き、柄杓を足もとに置く、そして、三間ほど離れた岩に腰を降す。草履を脱ぎ、足を脹脛まで流れに浸し、石地蔵のように動きを止めた。この岩は半畳ほどの一枚岩で、樹陰になっており、水に足を浸して坐るには格好であった。

この男は、雨でも降らぬ限り河原に来て、ひがな一日、流れ灌頂に水を掛け、流れに足を浸しているという。齢三十六と聞いた。

相模野の空は雲の破片もなく、彼方に峰を連ねて居坐る大山丹沢を、くっきりと浮かび上らせていた。視界の隅に、岸を離れたばかりの渡し舟が入って来た。十数人の客を乗せていた。久所の渡しである。この渡しは大山道を繋いでいた。

此岸は相州高座郡田名村、彼岸は愛甲郡角田村である。舟の乗客はほとんどが大山詣の善男善女であった。

大山は雨降山とも称う。端正な山容がそびえていた。降雨信仰である。阿夫利神社は山頂の石尊社を本宮とした。天平勝宝七年（七五五）に良弁僧正が開き、神社仏閣を造立したと伝えられる。不動堂は二カ所あり、子安の鳥居より二十八丁を前不動とし、また次の二十八丁を奥不動とする。それよりなお二十八丁の険路を登って山頂の奥院石尊社に至る。大山詣は四季を

通じて足音が絶えないが、夏期は特に賑わい、江戸をはじめ諸国の道俗が群集した。奥院への参詣は、七月一日の大山開きから二十日間だけ許された。夏期が賑わう所以である。

大山道の道筋には不動明王の道標があった。武州甲州の参詣者は、杉山峠を越え、武相境の両国橋で足を停め、境川の流れで身を清めた。それより橋本宿を経て相模野を通り、下九沢から田名へ出た。久所は田名村の一角にあった。

鮑浦十輔も、その道順をたどって、久所に流れ着いたのであった。久所は大山参詣の人たちで賑わい、多くの店も繁盛していた。雨が降れば川が増水し、数日は舟止めになり、久所は人があふれる。渡し場の川沿いには六軒の遊女屋もあり、花街を形成して遊客を集めていた。

人の集まる所には金が落ちる。金の匂いを嗅ぎつけて博徒が巣食う。久所に賭場を持ち、界隈を縄張りとしているのは九沢の伊三郎であった。二十数人の子分をかかえ、いっちょ前の貸元面を下げていた。

餓狼と化した浪人どもが、餌を求めて集ってくる。九沢の伊三郎が用心棒を求めている、という噂があった。その匂いを嗅ぎつけて狼どもが集る。十輔もその一人であった。

たしかに九沢一家は用心棒を求めてはいたが、一つ条件が付いていた。

「磯辺の酉造を斬っておくんなせえ。そしたら、賞金二両と共に、九沢一家の剣術指南としてお迎えいたしやす」

伊三郎はそう言った。十輔は意外な名を聞いた。磯辺の酉造は、二年間探し求めていた男だ

ったのだ。

十輔は土堤の叢に坐して、半畳の岩に坐した磯辺の酉造の動かぬ背を凝視していた。斬らねばならぬ男である。だが、気力が充実して来ぬ。どこか胸裡に躊躇があった。それで同行の比企伝兵衛に譲った。比企はここ一カ月ばかり、道中を共にして来た男である。この久所に十輔を誘ったのも比企であった。渠は闊達な男で小野派一刀流をよくした。

その比企が、三日前、酉造に挑み、果てた。そのとき、十輔は遊女屋を素見していた。だから立ち合いは見ていぬ。いま酉造が水を注いだ流れ灌頂は、比企伝兵衛のものであるはずだ。

——比企ともあろう男が、博徒づれの男に破れたのか！

その以前にも、酉造は二人の浪人を斬っていると耳にした。それほどの技量が酉造にあるとも思えぬ。たかが博徒剣法だ。だが、その侮りが因で果てたのかもしれぬ。

——比企のためにも、酉造を斬らねばならぬ。

ならぬと思いながら気が乗らぬ。剣を抜くには気迫が要る。その気迫が充ちて来ぬ。十輔にはもともと気迫が足りぬ気質があった。五年前まで、一万八千石仁正寺藩に微禄を食んでいた。武器預役であったが、藩庫から鉄砲三丁が消失した。それを己れひとり責を負うて禄を返上した。禄に未練はなく、浪人暮しが己れに似合い、気楽でもあった。

酉造が岩を立って、流れ灌頂の乾いた白布に水を掛ける。夏の陽はたちまちにしてびしょ濡れの布を干上げるのだ。

十輔が他の浪人たちほど飢えなかったのは女につきがあったからだ。女に貢がれる容姿があった。甲州・韮崎宿で髪結女と知り合った。お実と言った。そのお実に二年余を食わせてもらった。女の気分さえ変らなければ、飢えることはなかった。お実の顔色をうかがいながらも、十輔には気楽な暮しであった。

そのお実が凌辱の上絞殺されたのだ。賭場から帰った十輔は、お実の無残な様を見た。己れの安逸な暮しが破壊された怒りに動かされ、下手人を探し求め、そこに流れ博徒、磯辺の酉造の名が耳に入った。酉造がお実に髪を結わせているのを見たという者がいた。それから二年間、酉造を探して歩いた。だが、酉造を草の根分けても探し出し、叩き斬ろうという執念があったわけではない。出会えば斬る、くらいの気持で流れ歩いたに過ぎぬ。その酉造が久所にいた。それを知ったとき、奇妙な戸惑いがあった。その胸裡は十輔にも不可思議であった。

酉造は、白布を水びたしにし、岩へもどりがけに、ちらと十輔に貌を向けたが、そのまま背を向け岩に坐した。

——酉造を斬るにしても、未だ時が熟さぬ。

己れに言い聞かせ、立とうとした時、微風が頬を撫でた。生ぬるく湿気を含んだ風であった。その風に棘があった。棘が頬に刺さった。殺気であった。

首を回すと、土堤にうっそりと浪人が立っていた。尾羽打ち枯らした身形である。十輔と同類である。険相であった。殺気は十輔に向けられたものではなかった。浪人は酉造を睨んでい

た。齢三十ほどか、伊三郎が放った刺客であろう。

浪人には、博徒が持つあのまがまがしい双眸があった。すでに破落戸と化しているのか。双眸の炯りは二両への執念か。たしかに浪人に二両は大金である。

――あの男に、酉造は斬れまい。

十輔は、浪人と比企伝兵衛を比べていた。比企のほうが技量は勝っていた。十輔は腰を据え直した。みものであった。

男は、殺気で己れの体軀を包み込み、土堤を駆け降りた。酉造の背がピクッと動いた。殺気を感知したのだ。二十間余の間があった。酉造は流れから足を引き上げ、手拭いで拭い草履を履くと、浪人を迎える姿勢をとった。動きに余裕が見られた。男は、砂利を踏んで歩み寄り、三間の間をとった。

「おれは房州浪人、迫田又蔵だ。磯辺の酉造とはおまえか」

凛とした声を放った。酉造は頤を引いて頷いた。腰に長脇差はない。代りに匕首を呑んでいた。左手を懐中に入れた。左利であった。左利が匕首を使うには、衽を左前に着なければならぬ道理である。左前は死装束と忌み嫌われる。それを承知の左前であろう。その故に、酉造には左前の異名もあった。

浪人は、間を二間につめると、刀の鯉口を切った。それに合わせ、酉造は匕首を抜いた。

「酉造、おまえに遺恨はないが、おれは飢えすぎた」

浪人は、爪先で砂利を蹴り、一間半につめると、刀柄に手を掛け、腰を落して抜き放った。一歩を踏み出せば、切尖三寸に肉を充分に食い込ませ得る距離であった。

十輔は眉を顰めた。酉造には構えがなかった。両腕を下げ、ただ佇立していた。これが構えであるとすれば、奇妙と言うしかない。おそらく、浪人には隙だらけに見えているはずである。一閃で、酉造は肩から胸乳まで斬り裂かれよう。

跳躍するには、足腰に力を溜めねばならぬ。それには膝と腰を曲げ、背を低く構えるのが常であった。なのに、酉造は体軀を伸ばしきっていた。いわゆる自然体であった。

――酉造は死ぬ気か！

一閃を躱すとすれば、のけぞるより他にない。それには足の踵に重心を掛けるべきが、酉造の重心は爪先にあった。

――あいつに、二両と用心棒の座を奪われたか！

呻いた。無造作に斬れる。木偶のように斬れるはずだ。浪人の刀は青眼のまま動かぬ。浪人の胸裡に躊躇が生じた。そこに罠を予想したとしても無理なかった。三人の浪人が酉造の匕首に果てたのを聞いているはずであった。

殺気が凝固した。

十輔は手甲で汗を拭った。酉造と浪人の影は砂利に落ちて貼りついていた。浪人のためらいが焦立たしく思えた。一振りで確かに酉造は斃れるはずである。疑惑が疑惑を呼んで己れを縛

ることになる。

一段と暑さが増して感じられた。浪人は肩を喘がせた。汗が顔を伝い流れる。首を振った。忍耐がとぎれた。

刀の切尖が震えるのを見た。弧を描き、同時に跳んでいた。

一閃！

刀刃が光をはねて煌った。刃が空気を斬り裂き、酉造が袈裟掛けに斬られるのを見た。鮮血が噴出するのを見た。と思った次の刹那、十輔は予想もせぬ形を見た。

肩を裂かれ、のけぞり倒れるはずの酉造が、浪人と抱き合うように体を接していたのだ。奇怪であった。貌をこわばらせ、ひきつらせているのは浪人であった。

浪人は動かぬ。動けぬのだ。酉造の鋭い匕首の刃が浪人の首筋にピタリと押しつけられていた。どちらかが動けば、首筋から血を噴く。

意外な結末であった。十輔は丁丁発止の斬り合いを予想していた。それが一瞬のうちに決着していた。十輔は呆けていた。

——見切りか！

唸った。酉造がのけぞったと見えたのは、体を展いた形であった。重心は爪先にかけたままである。これほどのすさまじい見切りがあろうとは！　見切りは剣の極意である。博徒づれが、見切りをこれほどまでに極めていようとは、奇怪でさえあった。

十輔は真貫流を学んだ。自負があった。浪人の剣が己れに劣るとしても、一閃にはそれなりの迅速さがあった。

——比企もこの見切りに破れたか。

納得するものがあった。おそらく、比企には躊躇はなかったろう。

いまや、浪人の命は酉造の掌中にあった。わずかに手首を蠢動させるだけで、血飛沫が上がる。浪人の貌は紫色に膨れ上っていた。手から刀が落ち、砂利に乾いた音をたてた。

「き、斬れ！」

浪人が金切り声をあげた。声色が変っていた。酉造の唇が動いた。

「いや、助けてくれ、死にたくない、たのむ」

酉造の薄い唇が動くのを、十輔は見ていた。声は伝わらぬ。酉造は、匕首を浪人の首から放すと、懐中の鞘に収めた。同時に浪人の体は前に傾ぎ、膝をつき、両掌をついた。

2

十輔は、遠い目つきで盃を舐った。

久所には、めし屋を兼ねた居酒屋が三軒ある。その一軒、『一膳』と暖簾に染め抜いた店の片隅に、ひとり坐していた。

今宵は久所泊りらしき大山詣の男たち四人に、土地者が五人ほど席を占めて飲んでいた。

二十七、八とみえる、田舎では渋皮の剝けた女が、軒下の提灯に火を入れた。女は酌婦であった。傍の男が女の豊かな尻を撫で、卑猥な言葉を吐いた。それを女は軽く受け流した。

十輔も女の尻を見ていた。女に飢えていた。もう何カ月女の肌に触れぬか、指を折り、途中でやめた。女どころではない。いまは己れの金で酒を飲めるのがせいいっぱいだ。

お実の体を思い出した。この女ほど肉付きはよくなかったが、十輔の淫指にお実は喘ぎ悶え声を発した。それほど巨きくないお実の尻が好きで、よく尻から抱いた。また、お実のよがり声は、耳に快かった。情が昂まるとお実は、十輔の男根を銜えすすった。

酌女が、銚子を運んで来て、流し目をくれた。媚びていた。その双眸は濡れていた。女は月役の前後に欲情するという。この女の月役も近いのであろうか。

酒を口に含んで、比企伝兵衛を思い出した。比企と道連れになったのは、八王子宿であった。十輔が酒を飲んでいたとき、浪人が銚子を転がし、喧嘩を売った。表へ誘い出され、刀を抜くと、浪人は囁きかけてきた。おれは逃げるから追いかけて来い、と。十輔は逃げる浪人を追った。企んだ飲み逃げである。この浪人が比企であった。

十輔がいま飲んでいる酒代も、策を弄して得たものである。土地の油商常盤屋の十六になる娘おさとを、二人の浪人に悪戯させ、十輔が好機に娘を助け出し、常盤屋から二分をせしめた。餓狼と化した浪人に姑息も卑怯もない。武士の矜持とやらも捨てていた。金はあるところから

いただく。禄を離れて五年、浪人の垢は襞にまで染み込ませていた。

酒が咽を通り胃の腑に落ちる。だが、酉造の見切りを見たせいか、酔いが回らぬ。

――酉造はおれが斬る！

斬れぬとは思わぬ。あの見切りを崩せれば何とかなる。だが、体軀の奥底から湧いてくるものが何もない。切羽詰らねば何も出来ぬ人がいる。十輔もその類であった。

暖簾を分けて男がとび込んで来た。旅姿の百姓である。大山詣であろう。

「追われています。助けて……」

おののいてはいるが、どこか図太さの見える男だ。酌女が男を奥へ誘った。と同時に、二人の博徒が顔をのぞかせた。九沢一家の男たちだ。まがまがしい目つきで店内を見回した。

「いま百姓が逃げ込んで来たべ」

飲んでいる男たちは、言い合わせたように首を振った。十輔にも見覚えがあった。毛虫を思わせる眉の太い男が、馴れ馴れしく十輔の前に歩み寄ると、銚子を手摑みにして、口に当てた。咽がごくりと鳴った。十輔はその頤を張った。手が痺れた。男はのけぞり腰掛けに足を絡ませひっくり返った。そいつの衿を摑んで表に引っぱり出すと、掌を、ぐいと男たちの前に突き出した。

「無礼の詫料を出せ」

こいつらは、十輔が用心棒志願に来た浪人だと知っていた。蔑みと甘えがあった。

「酉造を斬るまでは、九沢一家とは関りはない。詫料を出さぬと叩っ斬る！」

浪人は事に応じて金にするこつを身につけなければ生きていけぬ。強請、集りも仕事のうちであった。呑み代をせしめて店にもどった。酌女に新しく酒を運ばせる。今夜の呑み代は充分。大山詣が出て来て頭を下げた。

九沢一家は、今年になってから、大山詣の人々から、道普請、橋普請の名目で通行料をとっていた。道も橋も普請の話はなかった。これが一家の実入りになっているようだ。評判がよかろうはずはない。百姓はその通行料を払わずに逃げて来たのだ。

「河原で、酉造さんと斬り合ったのは、お武家さんじゃないようだね」

酌女が向い合って坐った。お沢と言った。二年前、江戸から流れて来たという。媚態があった。淫相である。衿元から胸乳の膨みが覗けて見えた。股間が疼いた。

「おまえも飲まないか、金はいまの奴らからせしめた」

「見ていましたよ」

女は笑った。笑うと化粧の裏に素顔が見えた。そこには相州まで流れて来た理由が貼りついていた。

「その酉造の話を聞かしてくれないか」

「酉造さんのことなら『加久平』のお京さんがくわしいよ。一緒に住んでいるからね、夫婦みたいなものさ」

『加久平』はこの『一膳』と似た居酒屋で、お京はその酌女である。お京は源氏名で本名はおきよ、『加久平』の亭主の遠縁に当たるとか。地女であった。

「酉造さんが帰って来たのは、正月、田名八幡の的祭のあとだったから、八日か九日だったかね」

この村では、毎年正月六日に、八幡宮で的祭が行われる。田名村十一村落から、輪番で子供の射手を出し弓を射させる。この神事は歩射による年占いの一種で、その年の作物の豊凶を占うものだという。酉造はその祭りを避けて帰って来たのであろう。

「なんでも、十一年前に草鞋を履いたんだって。橋本宿に平野屋さんという貸元がいなさって、酉造さんも伊三郎親分も身内だったんだよ」

酒が入ると、お沢の口は回りはじめた。

十一年前、平野屋一家の内で、諍いがあり、酉造は哥貴分を斬って草鞋を履いた。そして、十一年ぶりに相州に還って来た酉造は、『加久平』で酒を呑んでいて崩れるように倒れた。そこに酉造を幼いころから知っているお京がいなければお陀仏だったかもしれぬ。旅の疲れが一気に出たのであろう。お京は酉造を介抱し、橋本から馬医者を呼んで診させたが、馬医者は脈をとって首を振った。文字通り脈がなかった。それをお京が不寝の看病をして生き返らせた。その後、酉造はお京の家で寝起きしている。

伊三郎と酉造は、昔は兄弟分であった。なのに帰って来た酉造を伊三郎は世話しようとはせ

ぬ。面倒を見てやって当然であろう。そこにはそれなりの確執があるのであろうが。

「二月ころだったかね、酉造さんが九沢一家の若い者四、五人を敲きのめしたのさ。わたしも見ていたよ。胸がすーっとしたよ。伊三郎は、久所村落の商人から場所代をとってたんだけど、酉造さんが怖ろしいのか、一家の連中は金を取りに来なくなったよ。端金じゃないからね、久所の商人たちは大助かりさ。酉造さんは礼金も受け取らないしさ。だから、久所で酉造さんを悪く言う者はいやしないよ」

そのために、伊三郎は酉造を斬ろうとするのか。たしかに伊三郎にとって酉造は邪魔者には違いない。

――それにしては、二両の賞金は少なすぎはしないか、十両は出してもいいはずだ。

伊三郎に掛け合おう、と考えた。賞金十両なら、少しは気分も乗るかもしれぬ。

お沢は、いつの間にか十輔の横に来て、肩を寄せ、手を十輔の腿に置いていた。女が匂った。白粉と体臭の混った匂いだ。

「お武家さんの名前を聞かせて下さいな」

「飽浦十輔、流れ浪人さ」

「しばらくは、久所にいるんですか」

「流れ暮しだから、あてはない」

その夜、十輔は誘われてお沢の家に泊った。お沢の目つきから、そうなる予感はあった。住

いは、村落はずれのしもた屋であった。

翌日も、酉造は川原の岩に石地蔵そのままに坐していた。動くときは流れ灌頂に水を注ぐときだけ。村人たちはそれを見て通る。十輔も酉造の堅い背を見ながら、土堤を歩いた。九沢一家の家は村落から一町ほど離れた川沿いにある。陽は昨日と同じに灼けていた。

裏へ回り柴垣の崩れを踏み越え、荒れた庭をつっ切り、濡れ縁に腰を据えた。家の構えは大きい。古い百姓家を買いとって改造したものらしい。庭には青木が丸い赤い実をびっしりとつけていた。背後を伊三郎の子分が、何人か十輔に一瞥をくれて通った。子分の数は年々増えていると聞いた。どうせ雑魚の集りだろうが、中には食いつめ浪人が髷を結い直して、伊三郎に盃をもらった者もいるとか。

青木の赤い実を見ながら、十輔は昨夜のお沢の乳首を思い出していた。乳首を舐り吸い歯を立ててやると、お沢は声をあげてしがみついて来た。あんた一人くらいわたしが食わせてあげる、とお沢は言った。これで、当分は食うに困らぬ。女に養われるのは馴れている。女の機嫌がいい間は、空腹に世間を呪うこともない。

気配に振り向くと、伊三郎が色白で肉付きのいい体軀で立っていた。

「飽浦さん、酉造を斬ってくれねえんなら、用はねえはずだぜ」

「急くなよ、酉造を斬るには、いま少し時がいる」

「そうですかい」

「それに、賞金が二両では安すぎはしないか。十両は出していいな」
「ようござんす。十両出しやしょう」
「いやにあっさり承知したな」
双眸の奥に何か動くものがあった。伊三郎は一朱銀を投げてよこした。十輔はそれを拾って袂に入れた。物乞いも心は痛まぬ。
「ところで、昨日、迫田又蔵とかいう浪人が酉造にやられたのを見た」
伊三郎の表情が、わずかに動いた。
「勝負にならぬ」
「飽浦さんなら勝負になるとおっしゃるんで」
「あの見切りは尋常でないな。酉造はどこであの技を身につけたのかな、博徒剣法ではない」
「百姓剣法でさ」
「なに、百姓剣法だと？」
それ以上は、伊三郎も喋らなかった。
「伊三郎、いや親分は昔、酉造とは兄弟分だったそうじゃないか」
「おれは、酉造がうらぶれて帰えって来たとき、客分として迎えようと言ったんだ。それをあいつは蹴りやがった。よそへ行きゃァとにかく、久所にいられちゃ邪魔なんだ」
「親分は、浪人どもが酉造には及ばねえ、斬れねえと知って、刺客として立ててるんじゃないのか」

「なに？」
目が炯った。
「浪人は、痩せても枯れても剣術が商売じゃねえのかい。それが酉造一人を斬れねえ。酉造も斬れねえで、用心棒として役に立つわけはあるめえ。おれは、腕の立つ用心棒を探してるんだ。飽浦さんだって同じだぜ、話は酉造を斬ってからだ」
伊三郎は立った。そして、怒ったように去って行った。何か胸裡で屈折していると見えた。無駄ではなかった。一朱にはなったのだ。
酉造は磯辺村の生まれだという。磯辺村は相模川を二里ほど下ったところにある。
「百姓剣法か」
十輔は呟いた。この相州では、名主が剣客を雇って、村の若者たちに剣術を習わせる慣習があった、という話を聞いたことがある。酉造の見切りはそれなのか。
十輔は土堤に立って酉造を見た。先刻と同じ姿で坐していた。その酉造を見ながら河原へ降りた。砂利を踏んで酉造に歩み寄る。酉造の広い背はびくともせぬ。すでに刺客でない事を読み取っているのだ。十輔は流れ灌頂に歩み寄ると、柄杓を手にして水を掬った。いわば比企伝兵衛の墓である。雨が降れば流され消える。この流れ灌頂は酉造が、南光寺の和尚に頼んで設けさせたものだと聞いた。白布に水を注ぐ。白布はもとの白さを失いかけていた。

布を水びたしにしておいて、首を西造に向けた。肉の削げた体つきである。顴骨が突き出、頬の肉は抉ったように削げ落ち、眼窩は窪んで、空虚な双眸を川面に向けていた。十一年の旅が、西造をこのような姿にしたのか。丸く肥えた伊三郎とは逆であった。

「そのご浪人のお仲間でござんすね」

視線は川面に向けたまま、西造から声をかけて来た。

「仲間というほどではない。流れていて知り合った男だ」

「左様で」

「この比企伝兵衛を斬って、昨日の迫田某を何故斬らなかった？」

「技量の違いでござんす。比企さんは、斬らなきゃ、あっしが斬られておりやした。斬らずにすめば、斬りたかありやせん」

西造は貌を向けた。双眸の光りは意外に優しい。

「飽浦さん、とかおっしゃいましたね」

「どうして、おれの名を？」

「お京から聞きやした。お沢さんとは仲がいいようで」

「何故、毎日、その岩に坐っている？」

「ここしか、あっしの坐る場所はござんせん」

嗤った。その目には、人なつっこさがあった。

「お京の家が、おまえの住いであろうが。お京はおまえに惚れていると聞いたが」

「飽浦さん、女ほどあてにならねえものはござんせん。寝起きはさせてもらっていやすが、いつ気が変るか……」

小さく笑い声をたてた。咽の奥で笑った。昨夜のお沢を思い出した。腕の中で柔肌を押しつけ悶え狂ったお沢、心の通い合える男が欲しかった、と歓喜の中で泣いた。金のために体を売るのは虚しい。夜毎のように変る男に抱かれながら、胸の中は干涸びているとも言った。それは、お京も西造を得るまでは同じ思いだったに違いない。だが、そんな女心も、突然変る時がくる。

「お実という女を知っているか？」

「いいや」

「一年前、韮崎の宿で髪を結ったろう」

「へえ、よくご存知で」

「その髪結女がお実だ。お実は、おれの女だった」

十輔は、西造の貌を見た。面容に変化は見られなかった。

「そのお実さんが、どうにかしなすったんで？」

十輔は落胆した。お実殺しは西造ではなかったようだ。西造は、お実の最後の客であったに過ぎないのだ。いま、抜き打ちに斬れば斬れる。いや、斬れそうな気がするだけかもしれぬ。

斬れる斬れないは別にしても、十輔には、刀を抜く気迫がなかった。お実殺しの下手人であろうと、同じであろう。情女の仇を討つ気はなかった。

「殺された」

ぽつりと言った。

「左様でござんしたか」

「おまえが殺したのではないのか」

「あっしには、女を殺すいわれがござんせん」

お実は姦殺された。股を菱形に曲げ股間をむき出しにしたお実の姿が、ちらと浮かんで消えた。それを口にする気はなかった。

「どうして、伊三郎の世話にならぬ？　おまえの弟分であろうが」

「世話になれば、渡世の義理がつきまといやす」

「そういうものか」

十輔は帯を解き下帯ひとつになると、水に入った。河原に立っているのは暑すぎたのだ。汗を洗い流すと、冷たい水が肌に染みた。

3

お沢が、仰臥した十輔の体を跨いで、一物を誘い込んだ。茶臼であった。お沢が羞恥を刷いた貌で白い臼を回す。下から突き上げる。双眸が濡れていた。目と子壺は直結しているという。壺も濡れあふれていた。

腰の動きが早くなった。乳房が揺れる。乳房を揺さぶるための動きでもあるようだ。お沢はすでに双眸を閉じ、白い頤を見せて呻吟していた。悲鳴を発した。十輔はあばれる尻を引き寄せた。

気をやったらしく、お沢はうつ伏せ、体の重みを十輔にかけた。

「いつまでも、わたしのそばにいておくれ」

お沢の家に身を寄せて五日を過ぎていた。十輔の脳裡に、とき折りお実の裸身が浮かんだが、お沢の体とは重なり合わない。お実はすでに過去の女に過ぎないのだ。

お沢は十輔がはじけるまで蠢動を続け、はじけたあとは、水で絞った手拭いで、念入りに股間を拭いあげた。

「お京さんがこぼしていたよ、酉造さんが抱いてくれないんだって。ひとつ家に暮しながら、一度も肌を合わせたことがないんだってよ」

「酒造は腎虚か」
「そうでもないらしいんだけど」
「おまえは、夫婦のように暮している、と言ったではないか」
「知らなかったんだよ。お京さんから聞くまでは。男と女だから、そうなって当り前だろ、だから、わたしはそう思ってたのよ」
お沢は拭い終えると、一物を口に銜えた。そうするのがお沢の癖であった。
——酒造が女を抱かぬとは！
意外であった。博徒が好むのは、酒、女、博奕と決まっている。賭場へ行っている様子はない。酒も飲んでないと以前お沢に聞いた。その上に女も抱いていないとは。何か意図があるのか。そこに酒造の意志を悟った。
萎えた一物はお沢の口の中で膨みつつあった。手指が二個の睾丸を弄んでいた。
翌日、十輔は、相模川を二里下った。磯辺村があった。村の古老を尋ねた。
田畑持ち百姓だった酒造の父重吉は、病身で過労のため死んだ。酒造が八歳のときだという。母のお牧には流れ者の男がいた。重吉が死ぬ前から、お牧は男と乳くり合っていた。それでお牧と男が重吉を殺したのではないかという噂もあった。お牧は重吉が死ぬと、田畑を叩き売って男と欠落した。酒造だけが残された。その酒造を拾ってくれたのが寺の住職だった。その住職は三年前に他界していた。

磯辺村の名主も剣客を雇って、道場を建て村の若者たちに学ばせていた。その剣客は、二階堂流の小林源三郎といった。名主が江戸から連れて来たのだという。酒造は毎日、道場を覗いていた。剣術だけに興味を示した。十三歳のとき、名主に頼んで入門、小林の内弟子になった。
小林は酒造に稽古をつけようとはしなかった。ただ道場の隅に坐らせた。三年目に入って、酒造にだけ、奇妙な稽古をはじめた。つまり、松毬に木綿糸をつけ、それを酒造に向けて振った。酒造は松毬に打たれ黙って立っていた。双眸を閉じることは許されなかった。また躱すこともならなかった。松毬の動きだけをただ見つめていた。
次は青柿であり、いが栗だった。これに紐をつけて振りまわす。舞い踊る柿や栗を見つめた。酒造が倒れると井戸の水を浴びせた。酒造は眼を引き攣らせて耐えた。五年目ころから躱すことを自然に覚えた。体をのけぞらせて躱すのではなく、爪先に重心をおき、足を擦って躱す。柿や栗が分銅に代り、そして真剣になった。
奇妙な稽古であった。十年間、酒造は一度も竹刀はもちろん、木刀も刀も持たせられなかった。二階堂流は小太刀の中条流の末流である。小太刀の極意は見切りにあった。小林は、その見切りだけを酒造に叩き込んだのだ。十年後、小林の門弟で、酒造と立ち合い、竹刀を酒造の体に触れ得るものは一人もいなかった。酒造は扇子を一本持たされ、それで相手の手首を打った。
酒造が二十三歳になったとき、すでに小林も酒造に及ばなかった。そのとき酒造は平野屋の

身内になっていた。小林はそれを聞いて激怒し破門した。酉造は己れの生きる道として博徒を選んだ。それしかこの男には道がなかったのである。百姓仕事が嫌いで博徒になるのとはわけが違った。いかに剣に秀れようと剣で生きられる時代ではなかった。古老の話によると、酉造は野良仕事のできる体軀ではなかったという。父親ゆずりの虚弱な体質であった。医師の診断では心の臓が弱いという。

酉造が流れに足を浸しているのは暑さしのぎではなかった。夏期は足を冷やさぬと胸がむかつくのだ。

——酉造が見切りを極めた理由も判った。

十輔はそう思った。生き延びるための見切りだったのだ。幼い酉造が井戸水を浴びる姿がちらついた。父に死なれ、母に捨てられ、その上体まで弱くて、酉造は生きて来たのだ。十一年間の旅がどのような旅であったか、十輔には思いも及ばぬ事であった。

雨が降った。一日中降り続き、翌日はけろりと晴れ上ったが、久所の渡しは二日間舟止めになった。相模川の水嵩が増したのだ。土堤へ出てみると、酉造の岩は流れに没し、流れ灌頂はあとかたもなく流れ去っていた。流れ灌頂は新しく設けられることはない。新しい流れ灌頂は新しい死者のために設けられる。酉造の姿もなかった。酉造はお京の家で、水盥にでも足を浸しているのであろう。

そんな折、事件が起った。

「油屋のおさとちゃんが勾引されたんだって」

お沢が言った。十輔は苦笑した。人の災難を笑うつもりはない。十輔もおさとを種に二分を稼いだ。勾引犯と狙いが同じだったのがおかしかったのだ。この村落で勾引を考えたとき、まず、目につくのはおさとであろう。常盤屋には金がある。おさとは十六歳、可愛い盛りだ。勾引にも条件が要る。おさとはその条件にぴたり嵌っていた。

「勾引したのは浪人だそうだよ」

お沢の言葉を聞いたとき、十輔は比企伝兵衛を思い出していた。伝兵衛ならやりかねない。だが、伝兵衛は亡者となっている、と考えたとき、迫田又蔵とか言った浪人を思い出した。浪人はおさとの身代金として十両を要求していると聞いた。十両とは少ないようだが、浪人には何年かは食っていける大金であった。

村は騒然となった。名主の家に組頭、年寄、長百姓、百姓代、三役人などが集った。名主と常盤屋の要請であった。

勾引は大罪である。もちろん、常盤屋は十両が五十両でも出すのに躊躇はない。金を積んでおさとを無事に取りもどしたい。だが、十両と引換えに浪人が素直におさとを渡すとは考えにくい。捕まれば浪人の首はない。十両を受け取ったとき、浪人は金を運んだ者とおさとを殺害して逃げるであろう、というのが、村役人たちの考えであった。あるいは、おさとを連れ去り、叩き売ることも考えられた。おさとは器量よしであった。

誰に金を持たせるか、おさとを取りもどせる男がいるとすれば、それは酉造しかない。村の長老たちの意見は同じだった。名主も同意見であった。だが問題はそれを酉造が引き受けるかどうかにあった。

「引き受けるには、みかえりが要るべ」

年寄が言った。

「金なら、いくらでも出す。おさとを助けてくれ」

常盤屋が手をついた。

「あの男は金では動かんべえよ」

「なら、十一年前、酉造は人を斬って草鞋を履いた。その罪を八州様に取りなすべ」

「だが、それは破落戸同士の喧嘩だ。それに十一年も経っとる、八州も問題にしていねえべ」

「どうだべ、宗門人別帳は、酉造はたしか無宿になっているだ。これからも酉造は村の役に立つはずだ。人別に入れちゃどうだべ」

「それがいかんべ」

衆議一決した。

名主と常盤屋が酉造の前に両手をついた。酉造は頷いた。

「村のおためでございましたら、引き受けさせていただきやす」

その噂は半刻のうちに、村中に広がった。十輔の耳にも入った。

――酉造の目当ては宗門人別帳であったか。

何か酉造の企みが、十輔には判って来たような気になった。たしかに酉造は無宿であった。お京の家に住んでいても、無宿人には違いない。村に居つくには人別帳に名がなければ、追い出される。岩の上にしか坐るところがねえ、と酉造が言った言葉もそれを指していた。酉造は、村で人別帳をさし出すのを、河原の岩の上でじっと待っていた。酉造は渡り歩くのに疲れきって還って来た。最も欲しかったのは人別帳だ。そのためにお京も抱かなかった。浮草でいられるのは若いうちだけだ。酉造は大地に根を張りたくて、企んだ。浪人を斬るのにも常に受け身であり、しかも斬ったあとは、流れ灌頂を設け、それを葬うように、流れ灌頂のそばにいて、水を注ぎつづけた。それが村人たちにどう映ったかは知れている。

勾引犯が迫田又蔵だとすれば、勾引も企んだことになる。あの河原で、酉造は迫田の首に匕首を押しつけ、何かを喋っていた。迫田に勾引を示唆したと考えても無理ではなかろう。迫田は賞金二両をあてにして酉造に挑み破れた。勾引が金になると知れば、やりかねない。十輔は、迫田又蔵ならやりかねない、と考えた。酉造は、刺客の中にそういう浪人を探していた。そして、酉造になら、おさとを救出できる技量と胆力がある、と十輔も思った。

宗門人別帳は、切支丹宗門警戒のため、毎年、各町村民の宗旨を糺し、寺院証を印し、なお一家族人名生齢等を詳細に記載し、戸主村役人連印により帳簿を作り、年々三月に支配役所に進達することになっていた。この宗門人別帳が戸籍であった。

村人たちは、酉造に期待した。噂し囁き合った。酉造が浪人を斃せるかどうか、酉造の腕を信ずるものもあれば、浪人に無手にされればいかに酉造でもと、危惧する者も多かった。浪人が迫田であれば、まず酉造に匕首を捨てさせるであろう。それは知れていた。

——酉造が無手でも、迫田は斬れまい。

十輔は、酉造が迫田をどう斃すかに興味があった。技量の違いは明白である。だが、浪人だって、それなりの技は持ち合わせている。勾引は重罪である。捕えられれば死罪はまぬかれぬ。それだけに焼糞になっていよう。兇暴である。その浪人を無手で、果して斃し得るのか。浪人が迫田であるとしよう。すれば酉造に恨みもある。恨みや怒りは剣の動きを荒々しくし、予想以上の力を発揮させることがある。あるいは酉造が破れるかもしれぬ。そこが十輔の興味の焦点になっていた。

酉造は、十両を包んだ袱紗と匕首を懐中に呑んで、無造作に家を出た。村人が見送ったのは、村落はずれまでだった。酉造に一人の村人が従いた。成り行きの結果を村人に告げるためであった。

十輔は酉造に先行した。

4

浪人は、塩田村落の古い社にひそんでいた。塩田村落は、田名村の東方の一角にあり、当麻村と接していた。久所から二十八町余の距離があった。相模川の支流八瀬川を挟んで、左右に村落が川沿いに並んでいた。田名村では最も古い村落だという。村落の背後の丘の斜面に古い社はあった。道に面して鳥居があり、三十数段の石段を昇った所が社の境内である。その奥に古く朽ちかけた社堂が建っていた。

十輔は、石段を避け、藪の斜面を上り、境内を見渡せる位置に腰を据えた。

境内には浪人が、檻の中の熊の体に歩き回っていた。迫田又蔵に違いなかった。血走った双眸を剝き、険相を更に険悪にしていた。

十輔には他人事であった。迫田が果てようと酉造が斃れようと関りのないことである。高みの見物であった。

朽ちた社の扉は観音開きに展かれ、そこに縛られ猿轡をかまされたおさとが転がされていた。その裾は乱れ、白い下肢を露わに見せていた。脚は膝を折り立たせ、展かれ、女陰を晒していた。娘十六歳はすでに女になり得る年齢である。道具も揃っている。迫田は、うろつきながら、おさとの股間を覗き込み、手をのばし、指で女陰を刺す。おさとの体が蠢動した。すで

に、迫田はおさとを凌辱しているのかもしれぬ。凌辱できるだけ胆がすわっていれば、酉造を斃せるかもしれぬ。

おさとの股間を晒したのは、淫気のせいばかりではなかろう。酉造の気勢を削ぐ作戦であるはずだ。酉造がおさとの姿に動転すれば、一気に斬れる。

——だが、徒労であろう。

酉造が、これくらいの淫景に動転するほどやわな男だとは思えぬ。

迫田は、おさとの両膝頭を摑むと、それを限度まで押し展いた。そして、女陰に髭面を押しつけた。己れの猛り立った気分を鎮めるための行為であろう。舐っている様子のその背がピクッと痙攣を見せた。振り向き構えをとった。

酉造が石段を一歩一歩確かめるように登って来た。酉造の姿を見て、迫田は目を剝いた。

「酉造！」

呻いた。

「やはり、おまえだったか、いや、おまえが来るであろうことは予期していた」

「迫田さん、おさとの身代金だ」

酉造は袱紗包みを放った。十枚の小判が迫田の足もとで鳴った。

「おさとを返しておくんなせえ！」

「おまえが来たのなら、ただでは返すわけにはいかん。村人に言ってやろうか、勾引をおれにそそのかしたのは酉造だ、ってことを」

「誰も聞きやしやせんよ、さあ、おさとを」

「ならねえ！」

「身代金は払った」

「これを見ろ！」

迫田は体を開いた。酉造の目におさとの女陰が丸見えになった。目をそむけず、女陰をまともに見た。酉造はかすかに唇を歪曲めて嗤った。

「きれいな、まんこだ」

酉造の貌に変化はなかった。迫田は刀を抜き放つと、切尖を女陰に向けた。

「酉造、懐中の匕首を投げろ！　妙なまねしやがると、このまま貫くぞ」

迫田は酉造の匕首に怖れを抱いている。匕首があっては勝負にならぬ。それは自認していた。酉造にも、はじめからそれくらいのことは予期できたはずだ。左手で匕首を懐中から鞘ごと摑み出すと、迫田の足もとに放った。だが、迫田は、それだけでは、安心ならなかった。匕首は一振だけとは限らぬ。

「帯を解いて裸になってもらおうか」

逆らう気はなく、言われるまま、帯を解き単衣を脱いだ。腹に晒を巻いていて、その晒にもう一振の匕首を挟んでいた。

「その匕首も、こっちへ投げろ！」

酉造はその匕首も投げた。だが、迫田は用心深くなっていた。匕首が酉造にある限りかなわぬ。

「背を向けろ！」

酉造が背を向けると、背中にも匕首が挟んであった。要心のためであったのであろう。酉造は、言われぬ先に匕首を迫田の足もとに投げた。迫田は三振の匕首を拾うと、堂の奥に投げ込んだ。

振り向いた迫田は、黄色い牙を剝いて、うれしそうに笑った。哄笑であった。すでに河原での仇を取った気でいた。

「素手で、おれが斬れるか、愚者め！」

迫田は勝ち誇っていた。寸鉄をおびずというが、いまの酉造は言葉通りであった。だが、十輔は、それも酉造の企みのうちだ、と考えた。勝算がなくて、いかに村のためとは言え、ここへ来るはずがない。何物をも信じぬ男である。宗門人別帳も生きていればこそ価値もある。死んで村の守神になろうと思うほど酉造はうつけてはおらぬ。となれば、四振目の匕首をどこかに呑んでいるというのか。髪に太針を隠してでもいるのか、いや、酉造には刃物を必要とせぬ。三振の匕首を取り出してみせたのは、迫田に油断させるための謀略以外の何ものでもない。迫田は——罠に嵌り込んでいた。動かぬ生竹を斬るように酉造を斬れる気でいる。それが十輔にも見えた。

「おまえは、よいことを教えてくれた。娘は江戸に連れ行き叩き売る。この器量だ、四、五十両には売れよう」

肩をゆすって笑った。だが、まこと酉造に策があるのか。迫田の剣は何人も人を斬った覚えのある剣のはず。人を斬るのにも慣れていよう。一閃するのに臆しはせぬ。それなりの迅速さはある。

——酉造が果てたときは、おれが迫田を斬る！

おさとの生死は関りない、とすれば十輔には迫田を容易に斬れる。技量はとうに見抜いていた。おさとを救出できれば……、おさとを村に連れて帰ればどうなる？　村の恩人にもなれる。名主と常盤屋が四、五年は徒食させてくれよう。常盤屋に居酒屋を作らせ、お沢にやらせてもよい、と考え苦笑した。

迫田は、刀を下げ酉造に歩み寄り、剣を上段に振りかぶり、斧で薪を割るかのように、乾竹割に斬り下げた。刀刃が光をはね、同時に足もとの地面を切尖が削っていた。

躱したとも見えず、酉造は立っていた。十輔は酉造の顔面が二つに裂け血を噴くのを望んだ。だが、迫田は、唸り声をあげ、一歩下っていた。已れの腕に肉を裂いた手ごたえを覚えなかったのだ。

酉造は、左手に迫田の脇差を手にしていた。迫田の一閃は充分に迅かったのに、いつ抜いた

のか。

見切りをつめるという。二寸つめ得れば目録はとれる。一寸につめ得れば皆伝も容易であろう。酉造のつめには、隙間がなかった。晒木綿が裂けて見えた。驚異であり奇怪でさえあった。いかに見切りのみに十年間を費したとしても。酉造には、おさと救出は正念場であろう、失敗すれば元も子もない。そこに人としての虚弱さが見えてもよかろうに。

「阿呆！」

迫田はわめいた。酉造が手にした脇差は、刀刃が竹であった。

「脇差の中身はとうに金に換えたわ、竹光でおれの首を刎ねるか！」

まだ、迫田の侮りは消えておらぬ。三振の匕首を捨てさせた優越は、胸裡の隅に残っていた。容易に斬れるという錯覚があった。迫田は一歩を踏み出すと、袈裟掛けにくると見せ、剣を薙いだ。酉造の脾腹を裂いたかに見えた。だが、酉造にはそれくらいのまやかしは通じぬ。

酉造と迫田の体が抱きついて見えた。迫田は体を伸ばしたまま石になっていた。次の瞬間、酉造は迫田のそばをすり抜け、おさとの方へ歩み寄っていた。

視線をもどすと、迫田の首筋を脇差が柄元まで貫き通していた。立ったまま往生していた。見果てぬ夢であった。

――なるほど。

十輔は己れを納得させた。酉造は迫田の心まで読み取っていた。三振の匕首ははじめから捨

てるつもりであった。それを捨てることによって迫田は慢心する。酉造にははじめから匕首を使う気はなかった。だから、万が一にも失敗する思いはなかった。勾引にそれだけの腕の男を選んだ、とも言える。

――これが比企伝兵衛であったら？

この企みに使えぬと考え斬り捨てたのであろう。恐ろしい男であった。

酉造は、おさとの縛りを解いていた。

こわごわと覗いていた村人が、石段を転げるように駆け降り、何やら叫びながら、久所へ向って走っていた。知らせを聞いた村人たちは喊声をあげよう。

単衣を着、帯を締めた酉造は、足もとの十枚の小判を拾い懐中に収めると、足が萎えて立てぬおさとを背負っていた。

十輔は、居酒屋『加久平』で酒を舐っていた。久所の騒ぎは予想をはるかに越えていた。話題はすべて酉造にしぼられていた。酉造がどのように浪人を斬ったかを、手ぶり身ぶりで語る男もいた。

村名主は、村役付を並べ、酉造の目の前で人別帳に酉造の名を書き連ねたという。他の報酬は何一つ受け取らなかったとか。

お京が、酒客にからかわれ、晴れがましい顔で逃げまわっていた。村名主のすすめで、酉造はお京を女房に迎えることになった。いずれ、形だけでも夫婦の盃を交わす手はずになってい

る。だが、お京の微笑には寂しさがあった。男に抱いてもらえぬ寂しさであろう。酉造はすでにお京の情夫ではなくなった。お京が酉造の女なのだ。これまでは、村人たちも、お京の所にいる酉造とよんでいたが、これからは、酉造の女房お京と呼ぶに違いない。立場が逆転したのであった。

十輔は酔った。快い酔いではない。胸の底に澱があった。酉造の企みは成った。だが、これで終わったのであろうか？　酉造がお京を抱かなかった、というところに、もう一つ企みがあるような気がした。つまり、酉造にとって、お京はここまでに成る道具でしかなかったのではあるまいか。

——酉造はお京を捨てるかもしれぬ。

十輔には、酉造がこの『加久平』で飲んでいて倒れたのも企みであったような気がする。お京が十輔の前に立って、にこやかに笑いかけ、銚子をとって酌をした。

「お武家さんは、お沢さんの家にいなさるんだってね」

悪意はあるまい。だが十輔には、お沢の情人はあんたか、と言っているように聞えた。捨てたはずの武士の矜持とやらが疼いた。

家にもどり、手さぐりで闇の中を這い、行燈に灯りを入れた。障子を開け、縁側に腰を降した。月明りがあった。十輔の飼主であるお沢が帰って来たのは遅かった。かなり酔ってもいた。

「先に寝ていればいいのに」

お沢の帰りを待っているつもりはなかった。背中から抱きついて来たお沢は、十輔の首筋に唇を押しつけて来た。

「酉造さんのことで、村は大騒ぎだね」

お沢の手は、十輔の股間をまさぐった。一物は萎えていた。萎えたものを手が拝ぐ。その手を払いのけた。

「どうしてさ！」

十輔は応えぬ。飼われている男は、女が求めるときには抱いてやらねばならぬ。だが、いまの十輔にはその気がなかった。お沢は口をとがらせ、そのまま寝床に入り、たちまち寝息をたてはじめた。

翌々日、十輔は河原に足を向けた。そこには新しい流れ灌頂が設けられ、そばには墓守りのように酉造が座していた。迫田又蔵のものであった。

5

十輔は、水を掬い白布に注ぐ。白布を濡らして迫田の痛みが薄らぐとも思えぬが。酉造が貌を向けた。

「酉造、おれに何の用だ？」

十輔は酉造に呼び出されたのだ。今朝、お京が使いに来た。
「飽浦さん、おめえさんは、あっしの考えを一から十まで判っていなさる」
「さあ、それはどうかな」
「あっしに、飽浦さんの身柄を預からしていただきやせんか」
「なにっ？」
酉造の貌を見た。双眸はいきいきと炯っていた。昨日までと目つきも変っている。
「どういうことだ。おれに、おまえの身内になれ、というのか」
「そのようなことで。飽浦さんは、しばもぐりというのをご存知ですかい」
「知らんな」
「しばもぐりというのは、常に人間を見張っていて、人をつけまわす。いや、つけまわすのではなく送る、と言ったほうがいいかもしれやせん。夜道を歩くと必ず送って来やす。そして、家についたら〝ごくろうさん〟と声をかけてやると、もどっていくのだそうです」
「なんだ、けものか」
「狼でござんす。この相模野には、狼が多い。送って来ても、人を襲うことはござんせん。送ってくるのは、人の小便を舐めるためだそうで。小便には塩気がござんすからね」
「そのしばもぐりがどうした？」
「あっしは、ここ十二、三日ばかりは、しばもぐりにいつも見られているような気分でござんした」

「おれが、しばもぐりだというのだな」
「飽浦さんは、すべてあっしのことはお見通しのようで」
「それが、おれを身内にして、九沢一家と張り合うつもりか」
「あっしは、破落戸でございやす。今更堅気にはなれやせん、やくざの垢が染みついておりやす」
薄い唇がゆがんだ。
——そうか、酉造の企みは、田名村の人別帳に名を連ねるだけではなかった。考えてみれば道理であった。村に根を生やしても、糧を得る仕事はない。たとえ仕事を世話してもらったとしても、酉造にその体力はない。
「伊三郎と張り合うつもりはござんせん。伊三郎を斬りやす」
「む！」
「飽浦さんは、他の浪人とは違っておいでになる。深慮遠謀がおありになる。そういうお方に力になっていただきてえんで。あっしの右腕になっておくんなせえ」
意外であった。予想だにしない事であった。
——深慮遠謀か。優柔不断も考えようによっては深慮遠謀になるか！
嗤った。

「三日、考えさせてくれ」
「ようござんす」
十輔は振りむいた。土堤に黒い影が並んでいた。二十数人の人数である。異様であった。その黒い影の一つが斜面を降り、砂利を踏んで近づく。伊三郎と判った。
「おれは遠慮しよう」
「いや、そこにいておくんなせえ」
伊三郎が酉造に何の用か。伊三郎が手を挙げれば、二十数人の子分が取り巻き襲いかかるのか。
伊三郎は、酉造の背に声をかけた。
「哥貴！」
酉造が立ち上った。伊三郎は十輔を見た。
「そのお人はかまわねえ、おれの身内だ」
伊三郎は瞠目した。この男には思いも及ばなかった事に違いない。ただの尾羽打ち枯らした浪人に過ぎなかったのだから。伊三郎はためらいながら口を開いた。伊三郎の声を、十輔は背中に聞いた。
「酉造哥貴、大山詣の通行料は評判が悪い。止めさせてくれねえか」
十輔は、なにっ、と振り向きそうになる己れを制した。そういえば、伊三郎が通行料を取りはじめたのは、今年のはじめ頃からと聞いた。酉造が糸を引いていたのか！

「ならねえ！」
「だけど、村の反対が強い。昨日も名主の使いが来た。大山詣が、この久所の渡しを嫌いはじめ、別の道を取る者が多くなった、と。このままじゃ久所はさびれる一方だ」
「伊三郎！　おめえは堅気衆に媚びる気か、やくざは破落戸だ。世間に嫌われて生きてるんだ。堅気にいい顔見せたんじゃ博徒は生きちゃいけねえ。裏街道を歩くにゃ、それなりの覚悟が要る。そんな気持じゃ、九沢一家は潰れっちまうぜ」
伊三郎は黙った。
「やくざは、汚れて生きてるんだ。汚れなきゃ生きられねえ、それを、今更、足でも洗う気か！」
「判ったよ、哥貴、これは今月分だ」
伊三郎は、懐中から袱紗包みを酉造の手に渡すと、ふくれっ面で引き返していく。包みに、五、六枚の小判が入っている重さであった。
――伊三郎は、酉造と敵対しているように見えて、酉造に牛耳られていたのか。
酉造の企みは深いものだったのだ。酉造が邪魔で伊三郎が刺客をさし向ける、と村人たちに思わせておいて、用心棒志願の浪人たちを酉造の餌に与えていた。十輔も餌の一匹になるところであった。

いきなり伊三郎を斬って九沢一家を乗っ取らなかったのは、村の信望と人別を得るためだった。いま、酉造は十輔に手の内を見せた。酉造は十輔に顔を向けた。

「飽浦さん、いかがで？」

「みごとなもんだ」

「あっしは、飽浦さんに手の内をさらけ出して見せた。あっしの右腕になっておくんなさるでしょうね。あっしひとりで一家をつくるにはくたびれる。あっしの体のことも知っていなさるはずだ」

「三日だ」

そう言って十輔は背を向けた。酒が呑みたかった。居酒屋『一膳』に入った。お沢が銚子を運んで来た。

「機嫌が悪いようだね、今夜は早く帰るよ」

お沢は囁いた。

十輔に迷いがあった。もとは十輔も用心棒志願であった。伊三郎が受け入れてくれれば九沢一家の用心棒になっていたはずである。なのに、ここで躊躇する己れをいぶかった。

黙って酒を呑んだ。味が苦い。

酉造の身内になれば、お沢の機嫌をうかがわずともよく、飯の心配もせずともよい。何のためらいもあるまい。胸裡に武士の矜持の破片が残っているとでも言うのか。

——酉造は、どうやって伊三郎を斬るつもりか。

伊三郎を斬るには理由がなければならぬ。人別に入ったとは言え、村名主が持つ人別帳に名があるだけ。無宿でなくなったのは、田名村でだけだ。来年の三月に宗門人別帳が支配所に提出される。それまでは名主の手限りで抹殺されることもある。これまで四人の浪人を斬ったのは、それなりの理由があった。村人もそれを納得している。誰も咎めだてはしまい。だが、伊三郎を理由もなく斬って、ただで済むとは思えぬ。伊三郎は無宿ではない。人別はある。村人に嫌われているとは言っても限度があった。殺生をしたわけではないし、咎人でもない。

——酉造は伊三郎を斬れるのか。

酉造は伊三郎を斬ると言った。その言葉に嘘はあるまい。

6

翌日であった。

十輔は、畳に寝転んでいた。暑さは、まだまだ続きそうだ。下帯ひとつになっても暑い。生皮一枚剝ぎたいほどだ。たまらん、と吐き出すように言って、三和土へ降りると、柄桶を持って庭へ出た。猫の額ほどの庭ではあるが、水をかぶるには充分な広さがある。井戸の水を汲んで来て、肩からかぶった。肌の水分が体温を奪う。快い。息をついた。

そこへお沢が駆け込んで来た。
「あんた、大変だよ！」
十輔は庭から応えた。あわてふためいている。
「あんた、お京さんが、九沢一家に斬られたんだよ！」
「どういうことだ？」
「あんたも、ちょっと来ておくれよ」
お京の家まで一町足らず。単衣を肩にかけ、草履をつっ掛けて表へ出た。刀はお沢が持っていた。
お沢が店に入ると、『加久平』の亭主が来て、お京がまだ来ないが、どうしたのか、家までちょっと行って見て来てくれないか、という。それでお沢は、お京の家へ行った。陽が出るころには酉造は河原へ出ている。陽はすでに高かった。
声をかけて戸を開けると、生臭い血の匂いがしたという。上ってみると、居間にお京が血まみれになって死んでいた。お沢は金切り声をあげて外へとび出て人を呼んだ。近所の何人かが集り、一人が河原の酉造のもとへ走り、お沢は十輔のもとへ走って来た。女は何かあったとき己れに最も近い人の所へ走る。だからと言って十輔に何ができるわけでもなかった。
「切り口は？」
「そんなこと……そう言えば、左肩から斜めに……」

「袈裟掛けだな」
家の前を村人十数人が囲んでいた。十輔は人垣を掻き分け家の中へ入った。村の数人がお京を裸に剝いて、血を拭っていた。村に医者はおらぬ。血の気を喪った蒼白い肌が、妙になまめいて見えた。左肩からの傷は心の臓にまで届き、裂け目が無残であった。乳房は丸く張って揺れていた。
そのそばに奇怪な姿があった。酉造がお京の緋色の湯文字を頭からすっぽりかぶり、肩を震わせ慟哭していた。その様子は異様であった。お京がついさっきまで体につけていた湯文字である。誰もがそこに酉造の悲嘆の深さを見た。
「誰が殺ったべ」
「決まっとるべ、伊三郎だ」
「むげえことするもんだ」
村人たちは、はじめから、下手人は伊三郎だと決めてかかっていた。たしかに九沢一家より他には考えられぬ。浪人たちをさし向けても誰一人酉造を斬れぬ。返り討ちに遭うばかり、それでお京を殺った。そう考えて不自然はなかった。
村名主が駆けつけた。常盤屋がおさとを連れて現われた。勾引一件以来、口がきけなくなっていたおさとである。
お京、いや、おきよというべきであろう。白帷子を着せられ、布団に横たえられた。傷口は

晒で巻いてあった。衽は左前であった。酉造は、湯文字を頭からかぶったまま、吼えるような声をあげ、おきよの体にしがみついた。

お沢はそれを見て、ポロポロと涙を流していた。昨日、おきよは十輔に伝言を持って来た。そのときに言ったという。はじめて酉造が抱いてくれた、と。六カ月間、共に同じ屋根の下に住みながら、抱いてくれなかった酉造が抱いてくれたと、泣き悦んでいたと。

葬儀は、常盤屋が盛大に出してくれると言った。酉造は湯文字の中で、こっくり頷いた。

——酉造、芝居は止めろ！　おれには判っている。おきよを殺したのはお前だ。

伊三郎を斬る理由を作るために、おきよを殺さねばならなかった。これで、酉造が伊三郎を斬っても、村名主をはじめ村人たちは、当然の報いとするはずだ。

十輔は叫び出しそうな己れを押さえた。おきよが、酉造に抱かれたと言って悦びはしゃいでいた姿が目に見える。おきよは本気で酉造に惚れていた、頼ってもいた。

村人たちは、酉造の異様な姿を見て、伊三郎への憎しみをつのらせていた。異様であるだけに悲しみの効果は抜群であろう。

——いや、もしかすると、下手人は伊三郎の手の者、いかに酉造が冷酷であっても……。

十輔は思い直した。思い直したが釈然とせぬ。十輔は居ても用がない。お沢を残して家に引き上げた。いや、居酒屋へ向った。『一膳』の店は閑散としていた。

昨夜、河原で、伊三郎と酉造の話を聞かなければ、おきよ殺しは伊三郎だと思い込んだところだ。だが、酉造が湯文字をかぶって泣くさまは何だ。あれはただの顔隠しではないか。一石二鳥の行為ではないか。村人に悲しみの深さを見せるのと同時に、己れの表情をも隠せる。おきよの匂いに包まれながら、汗を流しているに違いない。

これも酉造の企みのうちか。おきよは酉造の生命の恩人である。村人はそう思い込んでいる。それだけに、悲しみの芝居を誰もが鵜呑みにしてしまう。

十輔は酒を一気にあおった。

——おれは、酉造を知りすぎた。

表が騒々しくなった。村人が久所の渡しへ走っていく。何の騒ぎであるかは判っていた。酉造が伊三郎を斬るのだ。まともには斬るまい。まず、先に殺気を発し、伊三郎に長脇差を抜かせてから斬るに違いない。

十輔は腰を据えて動かなかった。底が知れていた。手妻も底が知れるとたあいない。胸がむかついた。

「飽浦さん。博徒の生き方は厳しいもんでござんす、ただでは生きられねえ」

酉造のそんな声が聞えたような気がした。——酉造を斬る！

胸が熱くなり、何かが溜りはじめた。

数人が店に走り込んで来た。店の亭主が奥から出て来た。

「とっつぁん、見たぜよ」

男は興奮していた。

「伊三郎が、あっけなく斬られやがった。もちろん、先に抜いたのは伊三郎と子分たちだった」

男たちの話はこうだ。子分五人を連れた伊三郎が、何の用か知らぬが渡し場にいた。そこには、大山詣も何十人か舟待ちをしていた。村の人たちも、酉造について来た。酉造は伊三郎の目の前に立った。とたんに伊三郎は、さっ、と蒼ざめた。

「お、おれじゃねえ、おれじゃねえんだ哥貴」

伊三郎は、まともに酉造の殺気を受けた。その殺気に抗しきれず、己れを守るため長脇差を抜いた。それに合わせて五人の子分どもも抜いて囲む。酉造はただ黙していた。

「哥貴、止めてくれ」

そう叫びながら、長脇差を振りまわした。伊三郎は目を剝いてのけぞり、首筋から血飛沫をあげながら、朽木が倒れるように、ひっくり返り倒れた。鮮血が地面を染めた。

「子分どもは、金縛りにあったように動けなかったべ」

「酉造さんにかなう者は、相州でもいねえべな」

「無理なかんべな、おきよを殺されたんだ。酉造さんでなくとも……」

男たちは頷き合っていた。八州出役が調べに来ても、証人はいくらもいる。三十数人が現場を見ていた。先に手を出したのは、あくまでも伊三郎であった。それに博徒同士の斬り合いでもある。お上にとって、博徒や浪人は人ではなかった。犬猫同様のあつかいである。この地方へ八州出役が巡回してくるのは、八月下旬であった。酉造は無罪放免のはずであった。

「伊三郎が死ねば、村は変るべ」

「誰が九沢一家の跡目を継ぐんだべ」

「だったら、酉造さんになってもらったほうがよかんべ」

村人たちは頷いた。この男たちの会話は、そのまま田名村の意見でもあるはずだ。

十輔は、銚子を三和土に敲きつけた。銚子は砕け散った。男たちの視線が集った。

――おれは村を出ていく。

店を出ると、そのまま、何処ともなく姿を消した。お沢が必死に十輔の姿を探した。村のどこにも、十輔の姿はなかった。

三日後――

十輔の姿は土堤に立った。血走った双眸で河原の酉造を睨んでいた。胸裡は怒りで充足していた。

土堤を降り、砂利を踏んだ。酉造が振り向き、笑顔を作った。川べりには、三基の流れ灌頂が白々と並んでいた。言うまでもなく、迫田又蔵の流れ灌頂に、おきよと伊三郎のが加わったのだ。

「飽浦さん、待ってやしたよ、あっしは捨てられたのかと思ってやした」

十輔は殺気を発しなかった。三晩を野宿した十輔の相貌は変っていた。険相になっていた。

「酉造、緋の湯文字をかぶった芝居は、みごとだったな」

酉造は嗤った。

「飽浦さんには見透かされてると思ってやした」

十輔は、木柄杓を拾って流れの水を掬い、白布に掛けた。

「おきよまで殺すことはなかったろうに」

「あんたは、まだ若い。甘いんでござんすよ。やくざの生きざまがどのようなものか……」

「聞きたくはないな、おまえのせりふは」

「なるほど」

酉造は流れから足を上げると拭った。そして草履をつっかけはいた。十輔の胸裡を見たのだ。

「もう七人の子分が集っていやす。五人は伊三郎の身内だった奴、二人は浪人。そいつらが一家発足の準備をすすめていやす。飽浦さん、考え直していただきゃ、あっしも助かるんでござんすが。いまさら、武士でもありますめえ。あっしの右腕に……」

「断る！」

十輔の双眸は炯った。

「お沢さんのためにも……お沢さん、泣いていやしたぜ、もどってあげなせえ」

「くどいぞ、酉造！」

酉造には、まだ余裕が見られた。だが、十輔は切羽詰っていた。己れをそこへ追い込んだのだ。怒りが渦を巻いていた。この気分であれば剣も抜ける。未練のある生命でもない。といって酉造に破れる気はない。己れには真貫流がある。酉造にあるのは見切りの術だけであるはず。

「飽浦さん、生命は大事にするもんだ。これから楽できるという時に……」

「酉造、抜け、喋りが多すぎる」

十輔は、腰をひねって青眼に構えた。酉造は匕首を抜くと、例によって両手をだらりと下げた。見切るには、両手に構えをとっては邪魔になる。その故に下げる。

酉造の体力には限度がある。灼けた陽が照りつける。すぐに酉造の胸はむかつく。そして脈搏が早くなる。体から力が抜けるのを待てばいいのだ。

「飽浦さん、どうしなすった？　あっしが斬れるものなら。あんたを斬るには惜しい、今からでも遅くはない、刀を引いておくんなせえ」

十輔は黙した。

四半刻が過ぎた。いまは酉造も黙していた。自然体で立っていた。十輔は青眼のままであった。この作戦が不味かった、と気付いたのは半刻を過ぎてからであった。腕が痺れはじめた。刀の重さが十露盤に入ってなかった。肌を汗が伝い流れる。酉造は双眸を閉じていた。自信である。酉造はときどき汗を拭った。隙だらけである。隙だらけの中に隙を見ることはできぬ。

——飽浦十輔、破れたか！

酉造は巨岩の如く立って微動もせぬ。病いは嘘だったのか、すでに倒れていなければならぬ。

一刻に至った。陽もその位置を換えていた。酉造は己れの病いまで偽っていたのか。武士の矜持はとうに捨てたが、人としての矜持のために、酉造を斬る気になった、と思ったがそれも甘えであったのかもしれぬ。酉造は、十一年の旅の間に、人の心も捨てたのであろう。酉造にあるのは、生きるための執念であろう。執鬼と化していた。だから、おきよをも殺せた。おきよを殺しても痛む心はとうに捨てていた。

「飽浦さん、そろそろ片を付けやしょうかね」

爪先が砂利を蹴った。同時に、酉造は退った。勢いをつけて、突いてくるものと見た。十輔は青眼を下段にとり、酉造が匕首を構え突いてくるのを確かめ、距離を測り、下から斬り上げた。

「わっ！」

鵺の声をあげた。確かに腹から胸へ斬り上げた。酉造が虚空を摑んでのけぞるのを見た。だが、それは幻影でしかなく、己れの左胸には、匕首が柄をつっ立てていた。鵺の声をあげたのは十輔であったのだ。

——やはり、かなわなかったか！

十輔は、流れ灌頂が、四基並んでいるのを見た。四基目は、己れの流れ灌頂であった。

窮鳥を討つ

1

壱兵衛は、ちりっ、と毛が焦げるに似た匂いを嗅いだと思った。足をとめてあたりを見回した。それは匂いではなかった。生命を賭けた者が発する殺気であった。

その殺気は、右手の笹藪の向こうから放射されている。数歩をすすめて、五、六本並んだ栗の木を透かしてみると、二つの黒い影が対峙しているのが見えた。

白刃が光をはねて交錯し、鉄を叩き合う澄んだ音を発し、二つの影は入れ換った。

二人とも流れ浪人のみなりである。衣服は色褪せ、垢を染みつかせているのであろう。ただ

黒々として、影そのものに見えた。二羽の鴉に似て、文目がつかない。抜き合わせた刀刃が、木洩れ陽を映して、キラリと光った。

壱兵衛には、何年ぶりかで覚えた身の締る激しい殺気であった。巨木の切株を目の端にとらえると、歩み寄って腰を降ろし、芝居の幕開きを待つかのように首を据えた。

「早く、くたばりやがれ！」

一方が呶鳴った。

どちらも痩身である。月代は伸び髭も剃らず、頬の削げ具合も似ていた。

もう一方の浪人は、左手で右脇腹を押さえ、右手に刀を把り、貌には脂汗を泛かべていた。腹を裂かれたのか、と思ったが、押さえた手のあたりに血の色は見えなかった。

壱兵衛は、二人を見較べ文目をつけた。鞘の塗りが異っていた。腹痛と見える浪人が黒鞘で、もう一方が赤鞘であった。

「来い！」

黒鞘が、呻きに似た声を絞った。

「まだ、陽が沈むまでには間がある。拙者は急がぬ、ゆっくり苦しめ」

赤鞘が、猿に似た声で笑った。

技量は伯仲であった。

やがて、黒鞘は、腹痛に堪えきれないらしく、貌をゆがめて片膝をついた。切尖がふるえるのを見て、赤鞘は一歩をのいた。窮鼠猫を嚙むという。赤鞘はそれを知っていた。

――病んでいる。腸の病か！

声を発したのは壱兵衛であった。ただの腹痛ではなさそうだ。黒鞘の貌は赤黒く染まり、目は血走っていた。

壱兵衛は、腸（癌）に蝕まれて死んでいった者を何人か知っていた。黒鞘の顔色、脂汗を泛かべての苦悶も、それに似ていた。

「十両が手に入るのを、こうして待つ気分も悪くはないて」

赤鞘がうそぶいた。

「来い、何をぐずぐずしている！」

黒鞘は声を絞った。さきほどから、しきりに唸り声をあげていた。

「おのれでくたばれ、首だけは刎ねてやる」

赤鞘の削げた頬が弛んだ。いやしげな相である。浪人暮しも長くなれば、このような顔になるのであろうか。

赤鞘は〝十両〟と言った。賭け試合とも見えたが、この二人のふところに十両の金があるわけはない。とすれば、誰かが十両をくれるのか、さもなければ、黒鞘は十両の賞金首か。

黒鞘は痛みに堪えきれぬとみえ、両膝をつき、躰を折った。赤鞘は口辺に微笑を刷いて黒鞘を見据えていた。

「斬れ！」

苦しい息の下から、枯れた声が洩れた。すでに勝ちは赤鞘の掌中にあった。かれは壱兵衛を一瞥した。

勝負は決まって見えたが、壱兵衛はそこにどんでんを望んでいた。見物人としては、このままけりがついてしまっては物足りないのだ。

その壱兵衛の思いが通じたかのように、黒鞘は頭をもたげた。歯をぎりぎり鳴らしながら膝を立て、よろめき立った。

「やる気だな、その気力を褒めてやろう」

赤鞘は、剣を青眼に構え直し、一歩をつめた。黒鞘も剣の切尖をもたげた。死力をつくしているのが見えた。

双方の躰から、殺気がほとばしった。どちらかが斃れねばならぬ殺気であった。

赤鞘は、敵を一刀両断にすべく上段に振りかぶった。肉を裂き骨を断つ気迫があった。

壱兵衛は息を呑んだ。

「きえーっ！」

気合がほとばしり、上段からの一閃が、黒鞘の顔面を唐竹割りに裂き、それに応じて、黒鞘の刀刃は光って薙いでいた。

相討ち——と見えた。

二人とも血飛沫をあげて斃れるのを見た、と思った。だが、次の瞬間、赤鞘の剣は柄に両手首をつけて、宙空に飛んでいた。

赤鞘はおのれの両手首を喪ったとも覚えず、残った両腕を黒鞘の頭上に振り降ろしていた。そのあとに、両手首をつけた剣が乾いた音をたてて転がり落ちた。

瞠目した赤鞘は、奇怪なものを見たときに似て、喪ったおのれの左右の腕を交互に見ていた。

——直心自得流！

壱兵衛は思わず呟きを洩らした。黒鞘は、気力を使い果したとみえ、赤鞘の足もとに昏倒していた。

予期した通り、逆転があった。壱兵衛は満足気に頷いていた。

赤鞘は、首を回して壱兵衛を見た。そしてよろめく足で歩み寄ってくると、

「そこのご仁、剣を使われると見た。頼みがある」

「血止めをしようか」

「いや、手首を喪っては生きてはいけぬ。介錯をたのみたい」

血を止めれば生命までは落すまいが、五体揃っても糊口をしのぎにくい浪人暮し、両手首を喪っては死を望むしかなかった。

「承知した」

赤鞘は会釈し背を向けると、その場に端座した。壱兵衛は野差を抜いた。
「覚悟は、よろしいか」
「お頼み申す」
瞑目した赤鞘が、血のしたたる腕で腹を切る仕草を見せたとき、壱兵衛は一閃した。薄皮一枚残して首を刎ねた。赤鞘は手首のない腕におのれの首を抱いていた。

2

相州当麻村にある当麻宿は、東海道小田原宿から甲州街道八王子宿を結ぶ要路にあり、旅人の往来も多く、宿場は賑わっていた。もとは当麻山無量光寺の門前町として栄えた所である。八王子まで四里と二十丁の道程があった。この道を八王子街道と称していた。
この宿場の東方に小高い森が見える。その丘の上、谷ヶ原という所に小舎がぽつんとあった。もとは炭焼小舎であったのを、人が棲めるよう手入れして壱兵衛が住居としていた。
壱兵衛は、穴を掘り赤鞘の屍を葬って、おのれの小舎に向った。その壱兵衛のあとを、蘇生した黒鞘が呻きよろめきながら、ついてきていた。かれはそれを無視した。
黒鞘は小舎の戸口にたどりつくと、再び仆れ昏倒した。この男、名を笠原宗十郎といった。
壱兵衛は、宗十郎を抱きあげ、筵の上に横臥させ、再びよみがえったとき言った。

「わしは、おまえを追い出しはせぬ。だが、歩けるようになったら、この小舎を出て行ってもらう。おまえを養う貯えはない」
壱兵衛は、相模野の禽獣を捕り、それを売って身過ぎとしていた。
「わかっている」
宗十郎は苦しい息の下から言った。
小舎の半分は土間で、半分は板張りであった。横たわった宗十郎はおのれの右脇腹を手で擦っていた。そうすれば痛みも和らぐものとみえた。
壱兵衛は、むかし三人の師に剣を学んだ。その一人が直心自得流であった。その師は、江戸麹町にあった直心影流の道場に居候していた。
師は敵の機先を制し、小手をとる名手であった。師に竹刀で打たれると、四、五日は手首が利かなかった。小手打ちにこの流派の秘伝があった。宗十郎の技は、まさに師の技であった。
「もしや、その師とは、長谷川藤斎先生ではないのか」
宗十郎が喜色を泛かべて言うのに、壱兵衛は頷いていた。
直心自得流は長谷川流ともいう。藤斎は周防岩国の人で、壱兵衛が教えをうけて数年後、岩国へ還り、藩の武術師範になったと聞いていた。宗十郎は、岩国での藤斎の弟子であった。
「それでは、あんたはおれの執友ではないか」
師を同じくする者同士を執友という。

だが壱兵衛は宗十郎のなれなれしさが気にくわなかったのか、それには何も答えなかった。

――三日もすれば、この男は死ぬであろう。

腹痛が腸だとすれば、余命はいくらもないはずであった。壱兵衛が小舎に入れなければ、いずれは野垂れ死にする男である。筵の上で死なせてやるのは、壱兵衛の胸の中に巣食っている者への供養だと考えた。

戸口に人影がさした。齢二十五、六歳とみえる女であった。

「旦那さま」

女が壱兵衛を呼び、胸にかかえた包みをさし出した。包みの中は壱兵衛の洗濯物である。

女は暗い小舎の中を覗き込み、宗十郎のけものじみた目の燗りに、どきっとなり、あわてて首を引っ込めた。

「お俊、いわたばこを貰ってきてくれ」

女はこっくり頷いて去っていった。

「お俊というのか、あの女」

壱兵衛は宗十郎の目がゆらぐのを見逃さなかった。

冷飯を粥にして、壱兵衛もそれを食い、碗に盛って宗十郎にも食わせたが、半量ほどを食って嘔吐した。死を前にした病人は食せぬものだ。一杯の水を乞うてそれを飲んだ。

やがて、宗十郎は眠った。壱兵衛はその貌を覗き込んで首を傾げた。齢三十二、三とみえる

その男の貌に死相はなかった。頬の肉はすべて削げ落ち、顴骨が高く、眼窩はくぼんで墨を刷いたように黒かった。だが、燗燗とした眼光があった。この男が死ぬには、この光が失せなければならない。

夜中に、壱兵衛は悲鳴を聞いて目をさました。宗十郎がのたうちまわり、叫んでいた。芋虫がはねるのに似ていた。

「壱兵衛さん、たのむ、おれの首を刎ねてくれ！」

苦しまぎれの言葉であった。壱兵衛は湯を湧かして飲ませた。半刻（一時間）後に痛みも和らいだらしく眠りについた。

宗十郎は三日経っても死ななかった。それどころか、二日目には碗一杯の粥を食った。医師にも診立て違いはある。素人の壱兵衛が腸と感違いしても当然である。だが、蠟燭が燃えつきるときに似て、人は死ぬ前に小康を得るという。

お俊が百姓家から貰って来たいわたばこを煎じて飲ませてもいた。それが効いたのかもしれない。

死なければ、それでもよかった。宗十郎の死を望むいわれはない。回復すれば追い出すまでである。

「壱兵衛さん、おれの話を聞いてくれるか」

「聞いても、どうなるものでもあるまい」

「それでもいい」
壱兵衛は、背を向けて草鞋をつくる藁を打ちはじめた。
「おれは仇持ちだ」
壱兵衛の木槌を持った手が止まった。
「十年になる。つまらぬことで人を斬った」
木槌が藁を打ちはじめた。
「おれは、集堂伝八郎という者の妻に懸想した。由季という。伝八郎の親父は御納戸奉行をつとめていた。もちろん、おれの手が出る女ではないし、手を出そうとも思わなかった。だが、女に会いたさに、集堂の屋敷の周りをうろつき回った。何度か女の姿を見た。それが町の噂となった」
宗十郎は、そこで一息ついた。息切れがしたのだ。
「伝八郎がおれを呼び出し、詰問した。おれはつい、由季殿を臀から抱ければ、首を刎ねられても満足と答えていた。事実その通りではあったが、伝八郎は抜きうちに斬って来た。腕におぼえがあると、躰のほうが勝手に動いてしまうものだ。気がついたときは、伝八郎を斬っていた」
声をたてずに、宗十郎は口を開いて笑った。それは乾いた咳に似ていた。
「おれを討つために、由季と伝八郎の弟彦四郎が旅立った。だが、彦四郎にはおれを討てぬ。

それを彦四郎もわきまえているとみえ、おれに近づかず、刺客をさし向ける。先日の浪人で六人目だった」
壱兵衛は振りむいた。
「その彦四郎に討たれてやる気はないか」
「討たれてやってもよい。だが、壱兵衛さん、そいつは難しい。あんたもかなりの使い手らしいから判るだろうが、相手の殺気を覚えたとき、躰が勝手に動いて斬ってしまう。伝八郎を斬ったときのようにな」
壱兵衛は顔をそむけ、その顔を歪曲ませた。
剣技はまず躰で覚えるものだ。敵の動きと気合におのれの躰が反射し動く。だから、おのれの心とは裏腹に敵を斬ることもある。斬って悔むことになる。
そこに剣を使う者の無情の哀感があった。

3

当麻宿に二軒の旅籠がある。その一軒、相模屋の二階に、壱兵衛は寝転がっていた。そばには、お縞というこの旅籠の飯盛女が、膝を崩して坐り、団扇を使っていた。齢は二十五という。肉付きのいい女である。

壱兵衛は、この女を月に一度か二度は抱く。齢四十、女の要らない齢ではなかった。かれは相模屋の用心棒も兼ねていた。その代償としてお縞を抱けるのだ。この女の体に馴染んで四年になる。

お縞は、壱兵衛の頭をもたげると、その下におのれの膝をにじり寄せた。膝枕である。量感のある腿であった。

「壱兵衛さん、何考えているんだ。さっきから黙りこくってるでねえか」

「え、いや……」

おのれに還って手をのばすと、豊かな膝頭の隙間に潜らせた。むっと熱く蒸れていた。内腿の柔肉をまさぐりながら、七年前のことを顧っていた。

――躰が勝手に動いて相手を斬ってしまうか。

宗十郎が口にした言葉であった。

七年前まで、壱兵衛は、江戸北町奉行所の定回り同心であった。ある夜、酔った浪人が暴れている、と知らせをうけ駆けつけた。無精髭のうらぶれた浪人が、何やらわめきながら、刀を振りまわしていた。赤貧洗うがごとくという、むさ苦しい浪人であった。

あとで判ったことだが、この浪人は妻に逃げられていた。そのためにやけ酒を呑み、浮世を呪っての狼藉であったのであろう。女子供が逃げまどっていた。

壱兵衛は刀を抜き合わせた。十手で相手できる腕ではなかった。むかしはそれなりの武士と

思われる。振り回す剣は鋭かった。斬らねば、町人たちが怪我をする。壱兵衛は浪人を一刀のもとに斬っていた。

それは壱兵衛の役目のうちであった。浪人の名は、横井庄兵衛といった。庄兵衛には一人の息子がいた。祥之助といい、十四歳であった。その祥之助が父親の遺体を引き取った。

それから一カ月後、壱兵衛は市中の見回りをしていた。背後に人の走る足音を聞いた。ぺたぺたと土を叩く草履の音である。誰か走っているな……、思ったとき、おのれの首すじに針が刺さるに似た痛みを覚えた。殺気である。すさまじい殺気であった。

壱兵衛は振り向きざまに、腰をひねって、一閃を放ち、敵の肉を充分に斬り裂いていた。斬り裂いたところで敵を見た。横井祥之助であった。祥之助は、

「父横井庄兵衛のか……た……き……」

と呻いて、朽木が倒れるように音をたてて仆れた。

――斬りたくはなかった。だが、躱すひまはなかった。

躰が勝手に祥之助を斬っていたのだ。慙愧が胸の中を充した。

浪人の身でも祥之助は武士の袴持を持っていた。いや、母に去られ、父に死なれた祥之助は、浮世に身のおきどころがなかったのであろう。祥之助の心根は憐れであった。

半年後、壱兵衛は職を辞した。幸いかれには妻子がなかった。身の回りの世話をしてくれていた女中お俊を頼り、その故郷、相州当麻村に隠栖したのだ。

「ねえ、壱兵衛さん」
気がつくと、指がぬめっていた。お縞の目が濡れていた。お縞がおのれの膝を外し、壱兵衛の下肢にまわって、褄を左右にはねた。そして、勃えた一物を手にすると跨ってきた……。
あと始末をすまして、お縞は部屋を去ったが、すぐもどって来た。
「壱兵衛さん、お武家さんが、お目にかかりたいんだって」
誰とも聞かぬうちに、みなりのいい武士と、美しい武家女が入って来た。
「卒爾ながら、あなたが壱兵衛殿か」
武士は、壱兵衛の前に端座し、女はその斜め後に座した。この二人が何者であるかは、察しがついた。集堂彦四郎と嫂の由季である。
ふたりの相貌には、殺気に似た険しさが刷かれ、窶れが滲んでいた。
「拙者、岩国浪人……」
「聞いている」
「左様か。ならば話は早い」
彦四郎は、膝前に袱紗包みを置き、指尖で押した。包みには小判を重ねた形と重さが見えた。
「この金子、受け取っていただきたい」
「何のことかな」

「笠原宗十郎を討ってもらいたい」
彦四郎は壱兵衛の目を見据えた。
「貴殿になら、あの男も気を許そう。寝首を掻いてくれてもいい。手段は選ばぬ。ここに十両ある」
あの赤鞘が貰う筈であった金なのだ。浪人ならば、金でどうにでも動く。彦四郎はそう考えている。いや、この彦四郎は、金以外の手段を持たないのだ。
壱兵衛は嗤った。
「窮鳥ふところに入れば、という」
「押して、その窮鳥を殺して欲しい。宗十郎の首を持ち還らねば、集堂家の再興がならぬ」
「宗十郎は病んでいる。昏倒することもある。そなたの手で討ったらよかろう」
「それができれば苦労はせぬ」
彦四郎は、射るような目を伏せた。彫りの深い端正な貌で、精悍とも言えた。だが、たとえ宗十郎が病んでいても、遠く及ばない技量とみえた。
「いますぐとは言わぬ。気が向いたときに……それまで拙者らは、この相模屋に逗留する」
射る目は由季にもあった。思いつめた光の中に、どうにもならない焦りと翳りが揺れていた。
「気が向くかどうか」

「宗十郎の首をとっていただければ、更に三十両をさし上げる」
「なるほど」
三十両あれば、座して十年は食える。いや二十年は生きられる。金に心が揺らがぬほど悟っているわけではなかった。
集堂伝八郎が斬られて二年後に、父親が死んだという。いま集堂家は廃されている。家を再興するには宗十郎の首が要るのだ。仇討ちは集堂一門、三十数家の願いであった。
集堂家には伝八郎が側女に産ませた庶子がいた。十一歳だそうだ。宗十郎さえ討てれば彦四郎が果てようと、庶子をもって集堂家の再興はなるのだ。
「相討ちでもよい、宗十郎が討てれば」
と彦四郎は唇を噛んだ。
嫂弟は部屋を出て行った。
乾草の香りが匂った。由季が残していった匂いである。熟れた女が放つ匂いである。由季も二十八歳になっていた。部屋を出るときにちらりと見せた臀の形も、そこに影を残していた。
宗十郎が臀から抱きたいと空けた女である。百姓女の臼尻とは趣が異っていた。男に、裾をまくらせ、あらわにしたいと思わせる臀であった。座を立つときに、わずかにこぼれた皓い足首、丸みのあるなだらかな肩は、布におおわれた素肌の豊かさを思わせるに充分であった。

包みの十両を懐中にねじ込んで、壱兵衛は相模屋を出た。
三年坂を登る。急な坂である。この坂で転べば三年以内に死ぬ、という言い伝えがあった。村の者たちは要心してこの坂を登り下りした。
小舎は黄昏れた林の中に、ひっそりと埋もれていた。小舎の前は広場になっていて、周りを櫟林が囲んでいた。櫟は炭の原材になる。十年も伐られていない櫟は繁茂していた。
引き戸を開けると、暗い中に、けものに似た呻き声があった。宗十郎は筵に横臥し、入って来た壱兵衛を目で迎えた。
灯油に火を入れると、病み呆けた宗十郎の貌が、幽鬼のように泛かび上った。それでも、すでに気絶することはなくなっていた。おのれで飯を食い、煎じ汁をのんでいた。
「彦四郎と由季に会った」
とび上るかと思ったが、わずかに頷いただけであった。予想していたのだ。
壱兵衛は、背を向け、冷えた飯を掻き込んだ。
「それで、おれを斬る役を引き受けたのか」
壱兵衛は応えない。
彦四郎は、常に宗十郎を誰かに見張らせている。壱兵衛の小舎に逃げ込んだのも、とうに知っていた。いまも、林の中から誰かが見張っているかもしれない。

麦茶を飲んだ。

「彦四郎が十両くれた」

「おれの首代か。十両では安い」

首を刎ねれば三十両出すと言った、とは口にしなかった。

「おれの寝首を掻くのか」

壱兵衛は、土間に坐って藁草履を編みはじめた。宿場で藁草履や草鞋はよく売れる。雨の日になどよく編む。

宗十郎が、煎じ汁を飲むために土間に降りて来た。

「おれが壱兵衛さんなら、一両もらっても寝首を掻く」

宗十郎は壱兵衛の顔色をうかがった。

「だが、壱兵衛さんには出来ないな。まだ面の皮に武士の矜持が貼りついている」

宗十郎は、乾いた笑い声をたてた。そして筵の上にもどると、やがて、軽い寝息をたてはじめた。

壱兵衛は横井祥之助のあどけない顔を思い出していた。その顔に彦四郎の顔が重なった。集堂伝八郎が斬死したとき、彦四郎は祥之助と同じ年ごろであった。祥之助の心根とは異るとしても、仇討の旅に出なければならなかった。何人かの供はついていたであろうが。

十年を旅に過した。岩国にいれば、城下の娘たちに騒がれ、由季ほどの器量のいい妻を迎え

ているかもしれない彦四郎である。それが、すさんだ貌をしていた。

壱兵衛は、灯りを消して、板の間に体を横たえた。しじまの中に闇が流れる。遠くに鵺の鳴く声を聞き、哀しげに吼える狼の声を聞く。この相模野には禽獣が多い。人里には近づかぬが、狼が群れをなして棲んでいた。壱兵衛は、宗十郎が転げ込んで来て十日余、猟に出ていなかった。

ふところで、小判がかすかに音をたてた。そのとき、宗十郎がくぐもった声を洩らした。腹の痛みでめざめたのだ。

「壱兵衛さん」

「なんだ？」

「十両の金があるな。おれの寝首を掻いてもいいが、その前に、女を抱かしてくれぬか」

女が抱ける躰かどうか。抱ける抱けぬはとにかく、女の肌に触れたいのであろう。

「男はおのれの死期を悟ったとき、女を抱きたくなるものだ、と聞いたことがある。いま、おれは無性に女が抱きたい」

壱兵衛は答えない。

「宿場の飯盛女でいい。何人かいたはずだ」

「考えておく」

どれほど眠ったであろうか、唸り声に目を醒した。脳がさめるまで、巨大な芋虫が転がり跳

ねるのを見ていた。宗十郎と見極めるまで一呼吸あった。
脇腹を押さえ、躰をねじ曲げ、唸り声をあげてのたうちまわる。苦しさのあまり洩らしたとみえ、尿が臭った。
しかし、それも四半刻（三十分）で治まっていた。

4

小舎の中で、お縞がけたたましい嬌声をあげていた。壱兵衛が相模屋の亭主に頼んで連れて来たものである。お縞は金を見るとあっさり頷いた。金で春をひさぐ女である。当り前と言えば言えた。そのお縞が、宗十郎に抱かれていた。
お縞の足抜けを警戒してか、三人の博徒が跟いてきていた。その三人は、広場の隅、櫟林に近いところに蹲まっていた。
壱兵衛は、この三人を見張る形で、小舎の前に坐り込んで藁を打っていた。小舎は宗十郎とお縞にあけ渡していた。なぜお縞を連れて来たかは壱兵衛にも判らない。おそらく十両がふところにあったせいであろう。宗十郎が転げ込まなければ、入ってこなかった金であった。
宗十郎とお縞が戯れ合う音を、背中で聞いていた。
博徒の一人が立ち上って壱兵衛に歩み寄って来た。男の目は、あの破落戸が持つまがまがし

い光を泛かしていた。
「壱兵衛さん、病人だと聞いていたが、なかなかのものじゃねえか」
男は、三十四、五か。殺気をむき出しにしていた。殺気は秘めるものである。秘めてのちにほとばしらせるもの。彦四郎に金を貰い、頼まれて来たのだ。彦四郎には、このような手段しかないのか。
無駄なことであった。宗十郎は破落戸の手におえるような男ではなかった。
「ちょっと見てくる」
男は小舎に向った。壱兵衛には、それを止める気はなかった。たとえ宗十郎がお縞の躰に重なり、精を洩らす瞬間であったとしても、男の長脇差は宗十郎の肌に触れ得ないであろう。
男が戸を開けた。そして二呼吸おいて、壱兵衛は男の悲鳴を聞いた。小舎をとび出してきた男は血のしたたるおのれの右手首を左手に摑んでいた。斬り落された右手は長脇差を握ったままであった。
「医者を、医者を……」
叫びながら男は走っていた。
一日おいて、お縞は姿を見せた。壱兵衛が呼んだわけではない。宗十郎と約束ができていたのだ。その日、お縞は、宗十郎を裸にして、躰を拭い、更に垢にまみれた衣服を洗った。
その翌日もお縞は来た。壱兵衛はお縞の声を聞いた。

「宗さん、あまり腹は痛まないらしいね、顔色もよくなってきたよ。わたしが口移しに飲ませた煎じ薬が効いたんだね」

お縞の言葉は嘘ではなかった。痛みが全く消えたわけではないのだろうが、目に見えて回復していた。

お縞が意外に澄んだ声で唄った。

一かけ、二かけ、三かけて、
四かけて、五かけて、六をかけ、
可愛い男を、乗せかけて、
下からもちゃげた、そのときァ
貧乏世帯も、苦にゃならぬ。

——はやりの換え唄であった。

三年坂を降りかかった壱兵衛に、旅姿の老爺が声をかけた。

「壱兵衛さまでございますか」

老爺を見た。齢六十ばかり、髪に白毛を交えていた。丁重に腰を折っていた。

「由季さまが、お目にかかりたいと申しておられます。ご足労願えますまいか」

坂を降りきったところに、水車小舎があった。由季はその裏にひっそりと立っていた。老爺は、気をきかして離れたところに立った。この老爺、由季が幼いころから従っていた下男だという。

「わしに何か」

「宗十郎を討つ術をお教え下さいませ」

「わしに策があると思ってか」

「はい、あなた様なら……」

由季の黒目がちな双眸は、まっすぐに壱兵衛をみつめていた。濡れているようにさえ見えた。思いつめているのであろう。

「彦四郎殿があれでは、終生、宗十郎を討つことはかないませぬ」

壱兵衛の躰に、由季の衿を押し広げ、乳房を摑み出したい衝動があった。男を狂わすたぐいの女である。相模屋の二階で嗅いだ乾草の匂いを再び嗅いだ。男を誘う香りであった。この十年、男を断っていたとは思えなかった。

すると、彦四郎と男と女になっているのか。彦四郎がこの女と十年の間、共に旅をしていて、何事もなかったと考えるのは道理に合わない。この色香は男の精を吸ったものである。

——この女を抱ければ、宗十郎と相討ちになってもよい。

宗十郎を斬る技がおのれにあるかどうかは判らない。だが、相討ちならば宗十郎を斃せる。壱兵衛はふとそう思って自嘲した。

「そなたは女の身だ。仇討など忘れてはどうかな」
「わたしは、躰は女でも、心は夜叉です」
「夜叉か」
「あなたが、わたしの躰をお需めなら、さし上げます」
由季は、壱兵衛の想いを見抜いていた。
「策は、ある。そなたのその躰を宗十郎の餌にすればよい」
壱兵衛は、由季の視線を躱すようにしながら答えた。
「それも考えなかったわけではございませぬ。でも、それで討てるものでしょうか」
「彦四郎殿には討てぬな」
「それでは……」
「宗十郎が、そなたの躰に精を洩らすとき、わしが宗十郎の右手を斬る。すれば、彦四郎殿にも討てよう」
由季の頬に赤味がさした。それならば仕損じはないであろう。
「まことに、ご助勢いただけるのですね」
壱兵衛は頷いていた。由季はこわばった表情を崩さぬまま、目で水車小舎に誘った。かれは首を振った。
邪念がないわけではない。この男の胸裡には、七年間も祥之助の面影が巣くっていた。彦四郎に仇討を成就させて、その面影が消えるとは思わないが、かれの心の疵が癒されるのではなかろうか。宗十郎を討たせるのは、由季のためではなかったのだ。

懐中の金のうちから、米味噌を買って小舎に向った。仇討の日を彦四郎と相談して、その日を知らせるよう由季には言っておいた。
壱兵衛は、米味噌を下げて、小舎を見ながら佇んでいた。小舎の中では予想もしなかった出来事がおこっていた。
女の悲鳴を聞いた。それはお縞のものではなかった。考えるまでもなく、お俊の声であった。宗十郎が、お俊を引きずり込んだものであろう。
脳が焼けるように熱くなった。お俊は十四歳のときに、この当麻村から江戸に女中奉公に来て、壱兵衛の世話をして来た。よく働く女であった。お俊は口には出さないが、壱兵衛を慕っていた。そのため、二十五歳になっても、まだ嫁にも行かない。それを知りながら、壱兵衛はお俊を抱いてやれなかった。
「うぬっ！」
壱兵衛は唸った。怒りが腹の底あたりから湧きはじめていた。飼犬に噛まれたのだ。緩慢な足どりで小舎に向った。戸は開け放たれていた。
暗い小舎の中に、素肌をさらして宗十郎を乗せたお俊の痛々しい姿があった。男の腰を挟んだ皓い腿があった。豊かに膨んだ乳房が、ふしくれだった男の掌にわし摑みにされていた。

宗十郎が、腰をひねっていた。繋り合った箇所が見えないのがまだ救いであった。

壱兵衛の気配を覚えて、宗十郎は首をねじ向けた。その貌は照れ笑いを泛かべていた。

精を洩らしたとみえ、宗十郎はお俊から放れた。その瞬間、お俊ははね起きると、前も合わせず、小舎をとび出し、壱兵衛のそばをすり抜け森の中に駆け去った。

壱兵衛は野差を抜いていた。宗十郎は刀を把ると、のそりと表へ出てきた、片頬をゆがめて笑い、刀を抜いた。

「壱兵衛さん、本気でおれを斬る気か」

壱兵衛は、間を二間にとって対峙した。殺気がおのれの躰から放射されるのを覚えていた。

宗十郎は青眼に構え、静止していた。

「たかが、百姓女ではないか。壱兵衛さん、怒るなよ。悪かった、詫びる」

気後れはない。だが、宗十郎に及ぶかどうかは判らない。

剣には相討ちということがある。敵を斬ろうと思うのは欲である。欲があれば隙が生じる。おのれが生きのびようと思わなければ、相討ちで敵を仆せる。剣技を弄するのは、技量に差があるときである。相討ちの心構えはおのれを捨てることであった。壱兵衛はおのれの憤怒も捨てていた。

「窮鳥は殺さぬはずではなかったのか」

宗十郎は、壱兵衛の相討ちの気迫を悟っていた。

「壱兵衛さん、剣を引いてくれ。あんたには恩がある。斬れぬ」

「十両のためだと言ったらどうする？」

宗十郎は一歩を退いた。それだけ壱兵衛は詰めた。

「十両が三十両でも、あんたは金のために人を斬れるひとではない」

宗十郎は二歩を下った。壱兵衛はそれだけ足を摺った。

「負けたよ、壱兵衛さんにはかなわぬ。あんたは命の恩人だ！　好きにしてくれ」

宗十郎は、すーっと切尖を下げると、刀を捨てた。そのとき、壱兵衛の殺気は、霧散していた。宗十郎は背を向けていた。この男は壱兵衛がおのれを斬れぬことを見透していたのだ。

5

壱兵衛は、踵をかえすと走っていた。走りながら、野差を鞘に収めた。三年坂を駆け降りた。

お俊の身が気がかりであった。二十五歳になっている。小娘ではないのだから、首吊りなどするはずがない。そうは思うものの、万一ということもある。

お俊はたしかに百姓女であった。二反の田畑はあったが、貧しかった。だからお俊は江戸に奉公へ出た。だが、百姓はほとんどが貧しい。貧しい女は、穢されたからと言って自害などし

ないものだ。

お俊の家は相模川の近くにあった。両親と兄がいる。家に駆け込んで、

「お俊！」

と叫んでみたが、何も応えない。両親と兄は野良に出ているのであろう。

——お俊は、どこへ行った。

家の裏へ回った。そこにはお俊の父親が、市場へ出すのか茄子を洗っていた。

「壱兵衛さん、どうしたんだべ？」

「お俊はもどって来なかったか」

「お俊が、何か悪いことでもしただか」

「そうではない」

壱兵衛は、うろたえているおのれをなだめた。

父親は、そんな壱兵衛を怪訝そうに見ていた。この父親も母親も、娘が嫁がないのは、壱兵衛のせいだと知っていて諦めていた。

「あれが、お俊だべ！」

父親は、川に向う道を指さした。その方向に黒い小さな影があった。壱兵衛は奔っていた。その影はお俊だった。走りながら名を呼んだ。

お俊が振りむいて、足を止めて待った。

「旦那さま……」

追いついた壱兵衛は、お俊の手首を摑んで引いていた。

「来い、お俊！」

お俊は、瞠目して壱兵衛を見ていた。これほど荒々しい壱兵衛を見たのははじめてだったのであろう。かれは、川へ向ってお俊を曳きずっていた。

「旦那さま、腕が、痛い……」

「かまわん！」

お俊の貌に怯えがあった。壱兵衛が怒っているように見えた。折檻されるのだと思った。曳きずられるまま川の中に入った。お俊は藻掻き「旦那さま、おゆるしを」と叫び、逃れようとした。

胸のあたりまで流れに浸ると、壱兵衛の手が裾前を掻き分け、股倉に手をさし入れて来た。指が壺の襞をかきわけ、侵入していた。

その指は、宗十郎の穢れを洗っていた。壱兵衛の気持が通じた。お俊の目が潤み、そして濡れ、涙が頬を伝った。

「旦那さま！」

洗い流したあとに、壱兵衛はおのれの勃えた一物を没入させていた。立ったままお俊の腰を引き寄せていた。お俊は壱兵衛の背中に腕を回し、しがみついて泣いていた。

雨が降っていた。

宗十郎は、板敷きの上に胡座をかき、ぼんやりと雨を見ていた。壱兵衛は、両足の親指に縄紐をかけて、草履を編んでいた。

「壱兵衛さん、この雨があがったら、ここを出て行こう。雑作をかけた」

腹の痛みはうせていた。腸の病ではなかったようだ。

「由季殿を抱け」

壱兵衛がぼそりと言った。

「なに、いま、何と言った？」

「由季殿を臀から抱け、と言ったのだ」

「まさか、それはならぬ」

「なぜだ？」

「あの女は、おれが手を出せば、おそらく舌を噛んで死のう」

宗十郎は、由季が夜叉になっていることを知らないのだ。いや、壱兵衛も由季がまこと夜叉になっているとは思っていなかった。

「死なぬ」

「それを請けあえるのか」

「彦四郎におまえを討たせるために、由季は体を投げ出す」

「ほう！」

何度か首を振った。納得できないようだ。

「それを、どうして壱兵衛さんが知っている？」

「わしがその策をすすめた」

「まことか」

「それにおまえが乗るか乗らぬかは勝手だ」

「乗らいでか！」

宗十郎の蒼ざめた貌に血の気が刷かれた。

「彦四郎に討たれてやれ」

「それは、ちと無理のようだな」

しばらく間をおいて、

「そうか、由季を抱けるか……」

宗十郎は、深い溜息を吐いた。十年間、かれは由季と顔を合わせていない。おそらく十年前の由季の貌を思い描いているのであろう。

篠突く雨になっていた。

「それで、いつだ？」

雨の激しい音で、声が届かなかった。
「壱兵衛さん、いつ由季がやってくる？」
「わからん」
宗十郎は、耳をそば立てた。
「むこうから、知らせてくることになっている」
「そうか」
壱兵衛は、横井祥之助を、胸の奥から引っぱり出した。彦四郎に宗十郎を討たせて、祥之助の供養になるかどうかは判らない。小舎の隅にある柳行李の中には、祥之助の髷が入っていた。その髷を寺に持って行き供養してもらおう、と思った。
雨は、その日の夕刻に上った。

翌朝、老爺が姿を見せた。由季が宗十郎の犠牲になると知ってか知らずか、老爺の姿は哀しげであった。
「本日でございます」
老爺は壱兵衛に向って一言言うと背を向けた。この老爺も主家の再興に希みをつないでいるのであろう。とぼとぼと歩いて消えた。
「そうか、今日か」

宗十郎はさすがに感慨深げである。恋慕して十年目にその女を抱ける、となれば宗十郎でなくても、胸が膨むものであろう。
宗十郎は双眸を空虚なものにした。その目に由季の裸身を写しているのであろうか。
脇差を抜いて、それを見やった。刀を腰に差したままでは、由季を抱けぬことを考えているのだ。無腰でいるわけにはいかない。彦四郎がどこから襲ってくるか判らない。むざむざと討たれてやる気はないとみえた。
一度外へ出て、広場をぶらつき、再び小舎に入った。落ちつかないのだ。
「まだか、由季は」
おのれに呟いた。ふと、壱兵衛を見た。
「壱兵衛さん、おれが由季を抱いているときに、首を刎ねる気か」
「それでも、おまえは満足のはずではないか」
宗十郎は、くくっ、と鳩の鳴く音に似せて笑った。
壱兵衛は、由季に、宗十郎の右腕を斬ると言ってある。彦四郎に討たせるには斬らねばならない。斬らねば、彦四郎は返り討ちにあい、由季は、穢され損になる。
——いや、この男、彦四郎を斬って、由季を連れ去る気か？
櫟林に人の気配があった。
「来たか！」

宗十郎は刀を戸口に立てかけて表へ出た。壱兵衛も外へ歩を運んだ。林から宗十郎が立つ位置まで、三十間余の隔りがあった。

林の中から一つの影が浮き出た。由季であった。由季を迎えて、宗十郎は五、六歩を前に出ると、彦四郎の姿を探しているのか、首を回した。彦四郎の気配はまだ林の中であった。

由季は、白地の手甲脚絆をつけ草鞋ばきで楚楚とした旅姿であった。その右手には彦四郎のものであろう脇差を下げて、一歩一歩を確めるような歩き方で近づいて来る。

美しい貌を険しいものにして脇差を抜くと鞘を投げた。まっすぐに刷かれた眉に悲壮が滲んでいた。心は夜叉であると言ったが、夜叉になりきれぬ玲瓏さであった。

三間の間をとって、由季は宗十郎の前に立った。脇差を腰に擬していた。

「由季殿、しばらくであった。十年は長すぎた……」

「言うな宗十郎、夫伝八郎の仇、覚悟！」

声が鈴に似て響いた。

由季は、一気に疾り、体ごとぶっつかった。宗十郎の脾腹を抉ったかに見えて、一瞬、脇差は宗十郎の手に奪われていた。

「あっ！」

と声をあげたとき、帯は裂かれ、由季の腰にからみつき、足もとに落ちた。

宗十郎は、由季を抱き寄せておいて、手の脇差を遠くへ投げた。その手で由季の衿を展いて、

豊かに稔った乳房を摑んでいた。

この狼藉ぶりを、壱兵衛は離れて見ていた。彦四郎の気配はまだ林の中であった。林の中から駆けるには間がありすぎる。不意を打つのでなければ効き目はない。

――これでは、宗十郎を討てぬ！

林の中の気配は老爺かもしれない、と思った。ならば彦四郎は、他のどこかにひそんでいなければならない、がその気配はなかった。

由季は前をはだけられていた。切断されたのは帯だけではなかった。女の躰には少くとも七本の紐が巻きついている。その紐がことごとく切られていた。快く脂ののった腹までも露わにしていた。下腹に濃い翳りがあった。そこを宗十郎の手がかき分けた。

「おのれ！」

由季は抗った。がいまとなってはそれも空しい。宗十郎は左手で、背中に回した由季の両手首を摑み引き寄せ、右手で股間をまさぐり、唸り声をあげていた。すでにけものと化していた。

足を払い、ねじ伏せると、うつ伏せにして裾を大きく捲りあげ、おのれを空けさせた臀を晒した。

その臀を宗十郎が抱き上げた。由季は四つに這っていた。貌をあげて、彦四郎がひそんでいるであろう林の中に目をやった。

「彦四郎殿、彦四郎殿！」
叫んだ。その叫びは彦四郎にも届いたはずである。なのに動き出す気配はなかった。
「彦四郎、臆したか！」
宗十郎が声を放った。
手がなめらかな臀を撫していた。あたりの景色の中に、その臀だけが皓く浮いて見えた。その臀を宗十郎の勃えたものが貫き通すのを、壱兵衛は見た。
「あーっ！」
由季の悲鳴が尾を引いた。
宗十郎が唸り声をあげて腰を使った。それを見て壱兵衛は野差の鯉口を切った。そのかすかな音を耳にした宗十郎は、おのれの脇差を抜いて、由季の首筋に擬した。
「壱兵衛さん、手出しは無用だ。あんたがそこから動けば、この女の首から血が吹く」
「宗十郎、未練がましいぞ」
「おれは死ぬ気はない。未練がましくてけっこう」
宗十郎は、由季を抱けば、壱兵衛が背後に迫る事は予想していた。死ぬ気があれば、壱兵衛の小舎に転げ込みはしなかった。
「彦四郎殿！」
由季はもう一度声をあげた。その声は濡れていた。心とは裏腹に、躰は悦びを覚えはじめて

いるとみえた。
宗十郎は腰を突き動かし唸った。由季には彦四郎がなぜ討って出ないのかわからなかった。臆したのか。由季は唇を噛んだ。夫の仇に思うがままに弄ばれる無念さが、再び叫ばせた。
「彦四郎殿！」
その哀しみに充ちた声を耳にしたとき、壱兵衛は、林の方に奇怪なものを見た。
炎が転げ出していた。いや奔っていた。炎は手に剣をかざして絶叫した。
「笠原宗十郎、兄伝八郎の仇！」
その声に、顔を上げた宗十郎は目を剝いた。驚愕の面容であった。
炎は彦四郎であった。彦四郎は笠をかぶり蓑を着ていた。それが炎を上げて燃えていた。頭から油をかぶったのだ。老爺が手伝ったのであろう。
由季がそれに気付いて、絹を裂く悲鳴をあげた。
由季にさえも知られなかった秘策であったのだ。
「うっ！」
と宗十郎が唸った。脇差を摑んだ手首が斬り落されていた。そばに壱兵衛が野差を抜いて立っていた。
宗十郎は、由季を蹴倒すと、左手に右手をつけたままの脇差を摑み、剣を振りかぶって迫る彦四郎に立ち向った。

彦四郎が、勢いにまかせて、叩きつける剣を、宗十郎が払った。剣が両手首をつけたまま、舞い上った。流石というべきであった。

直心自得流の秘技であった。

だが、次の瞬間、彦四郎はおのれを炎として、手首を喪った両腕で宗十郎に抱きついた。地獄であった。彦四郎にはこの炎地獄しか宗十郎を討つ術はなかったのだ。

由季が何やら叫んだ。

「放せーっ！」

宗十郎が、彦四郎の腕の中で藻掻いていた。

——彦四郎、みごとだ！

壱兵衛は、炎に歩み寄ると、宗十郎の首を刎ねた。由季が岩国へ持ち帰らねばならぬ首であった。燃えつきるのを待つわけにはいかなかったのだ。

二つの躰は重なって仆れた。彦四郎はすでにおのれの命を燃やしつくしていた。

老爺が、林の中から転げるように走り出てくると、炎の前に膝を折り、

「彦四郎さま！」

と悲嘆の声を絞った。

由季は、晒した肌を繕うことも忘れ、虚無な目で、燃えつきた彦四郎を見ていた。

翌日——。

八王子街道を、老爺ひとりが宗十郎の首を抱いて、西へ向って哀しげに歩き去っていった。

由季の姿は昨夜のうちに行方知れずとなっていた。

右京ヶ原

1

万延元年三月二日――

この日は晴れたり曇ったりの薄ら寒い日だった。旧暦の三月だから、いまでいえば四月である。木々も芽を吹く季節なのに、この年は妙に寒く、桜の花便りも聞かれない。早く暖くならないと、武家も町人も困るのだ。暖を取るための炭や薪は高くなっている。

多門伝七郎は、本所・亀沢町の住いを出た。袷（あわせ）の着流しで、腰には二刀がある。旗本小普請組、家禄（かろく）百二十石である。俗に言う貧乏旗本である。物価は上るのに家禄は上らない。百二十

石も、五十年前はそれなりの暮しができたはずなのに、いまでは食えないのだ。五十年間で物価は十倍ほどになっている。貧乏旗本泣き暮しという。

伝七郎は、いま二十八歳になるが、いまだ嫁をもらえないでいる。嫁をもらって赤貧に生きていく気がなかったのだ。嫁をもらえば子を生む、四、五人も子供がぽろぽろと生まれれば、これはすでに悲劇である。

五年前に父伝兵衛が死んだ。隠居して十余年だった。昨年母が風邪をこじらせて死んだ。姉は他家に嫁に行っている。いま、伝七郎は四十すぎの女中と二人で住んでいるのだ。

もっとも、伝七郎は十歳のころから刀剣が好きで、刀剣を勉強したし、父に連れられて旗本の家に遊びに行き、あるいは刀剣商に出入りしていい刀を見せてもらった。そのために刀剣の目ききもいくらかはできる。中心を抜かないで刀工の銘も当てられるようになった。中心とは刀柄の中に入っている刀の部分を言う。

刀が見えるということで、二千石、三千石の旗本の家にも出入りできるし、刀剣商にもいくらか顔が売れて来た。そうなると、刀剣の売買で利益もあるのだ。それで人並みの暮しは出来ている。

彼が刀剣を好きになったのは、四歳ころから剣術をはじめたせいでもあろう。旗本の子は四歳から剣術道場に通うことになっている。もちろん、怠ける子供たちもいるが、伝七郎は比較的に性に合っていたのか、めきめきと上達した。直心影流である。師は藤川整斉といった。二

十一歳のときに印可を受けた。それ以後は刀剣売買が忙しくなって来た。といっても、毎日歩くわけではない。走り回るほどの仕事があるわけではない。

刀のよしあしは一目でわかる。伝七郎が値をつければ、刀剣商もだいたいその値で買ってくれるのだ。もちろん刀が好きでなければできない商売だ。刀もそのままで商品になるわけではない。刀を研ぎに出し、鞘や柄を新しく作って、店に並べられる。完全な刀などというのはめったにない。欠けていたり、錆が浮いていたり、それだけ値も削られる。

大身の旗本は多くの刀を持っている。そのすべての刀が毎日手入れされているわけではない。中には漆塗りの刀もある。手入れの面倒をはぶくために漆塗りにしてある。これなどはほぼ完全な形で残っている。これでも柄や鞘は造り直さなければならないのだ。

両国橋を渡る。橋の上を冷たい刺すような風が渡る。夏ならば涼しくていいが、冬は寒すぎる。すでに春になっていい季節なのに、しつっこく冬は続いていた。

「いつ、暖くなるんでござんしょうね」

が、町人たちの合い言葉になっていた。

橋を渡ると、そこは両国広小路だ。いつもは人がぞろぞろ歩いているのに、さすがに人の姿は少ない。九ツ半（午後一時）ころだった。広小路へ入ってすぐ右へ折れる。吉川町と柳原同朋町、その先に神田川に架る柳橋がある。橋を渡ると平右衛門町である。大川の河口に近いあたりで川にはびっしりと舟がもやい、岸辺には舟宿がずらりと並んでいる。舟は交通の第一で

あった。駕籠などより楽で早く目的地に着く。

また舟宿には座敷があり、客に酒ものませるし、出会いの場所でもあったのだ。その舟宿の一軒『いそ甚』に入る。この宿で女と待ち合わせているのだ。

伝七郎が店に入ると、女将が出て来て、

「肥前屋さんは、いま湯屋においでになりました」

「ならば、わしも一風呂浴びて来よう」

「はい、その間に部屋を暖めておきます」

舟宿も、まだ内風呂は許されていない。内風呂があるのは料理茶屋だけである。ここから最も近い風呂屋は福井町の『梅の湯』だった。お依も、梅の湯だろうな。

伝七郎がこれから出会いをする女は、表むきは、肥前屋お依となっている。

梅の湯に入り、脱衣場で帯を解きはじめる。湯屋の二階には一休みする座敷があり、刀架もあるのだ。昼下りとあって客もまばらであった。番台で手拭いと糠袋を借りる。

流しに降り、湯で体を洗い流しておいて、柘榴口をくぐる。そこは湯気がもうもうとしていて暗い。湯気を逃がさないように四方を囲ってあるのだ。湯舟の上のほうには、近ごろはやり出したランプが点いていた。そのランプの明りもぼんやりとしている。

湯舟の中にとっぷりと肩まで浸る。冷えきった体に、湯が染みていくようだ。手足をのばし、ふと手を股間に触れてみて苦笑した。一物が勃起していたのだ。

お依は板壁一つむこうの女湯で体を洗っているはずだ。それを思うと一物がむくむくと膨れ上る。

お依と知り合ったのは、昨年の夏だった。お依はぬかるみの道を歩いていて、鼻緒を切り、足首を捻って動けなくなっていた。そこに通り合わせたのが伝七郎だった。お供の女中がついていたが、駕籠を探せない。それで伝七郎はお依を背中におぶって、神田多町の陶器商肥前屋まで運んだ。

彼は、旗本から預った刀を刀剣商まで届ける途中だったのだ。その刀は供の女中にもたせていた。その場は名も名乗らずに、刀を受け取って去った。しばらくは背中に残ったお依の体の感触が忘れられなかったものだ。

そして、今年の初午の日に、また偶然、このお依と出会ったのだ。初午は、二月六日だった。稲荷社のお祭りである。その年の二月のはじめての午の日が初午と決められていて、江戸はもちろん、関八州、すべてお祭りをする。江戸には五千の稲荷社がある。大きな稲荷神社には参詣の人が多くつめかけるのだ。

伝七郎は、赤坂の豊川稲荷に参詣した。豊川稲荷は、大岡紀伊守の中屋敷の中にあった。むかし、ここは南町奉行、大岡越前守忠相の屋敷であったところだ。そのために豊川稲荷は有名になった。午の日には屋敷の門を開いて参詣の人を入れ、屋敷の人たちが総出で、甘酒などを参詣人に出すのが習しとなっている。

参詣をすませて出て来たところで、お依とばったり合ってしまった。お依は、昨夏、名も告げずに去った伝七郎に恨みごとを言った。参詣をすますまで待っていて下さい、と供の女中を付けておいて、お依は中へ入って行った。

お依は彼を茶屋へ誘い、そして舟宿の『いそ甚』に連れていったのだ。『いそ甚』では肥前屋で通った。二階の座敷に入り、そして酒が運ばれ、お依は体を投げ出して来たのである。伝七郎に拒む理由はない。それに彼は女の体には慢性的に飢えていた。

女はいつでも買えるという気はある。だが安い岡場所の女、それに柳原土堤に出る夜鷹などは買いたくない、となれば女にも金がかかるのだ。女を買うくらいなら、うまいものを食い、酒をのみたい。また金のかからない女を得ることができても、もともと祝言をあげる気はないのだから、女は去ってしまう。それで、いつも飢えていた。

武士は食わねど高楊枝、という。女に飢えていても足りているような顔をしていなければならないのだ。飢えた目で、女の体を舐めまわすような真似はしたくない。直参旗本という矜りがある。まさに武士とはせつなく、つらいものだ。

まさか、知り合った女に〝やらせろ〟と言うことはできない。昨夏も、さもしい男と見られるのがいやで、お依を肥前屋に送り届けると、黙って去った。少し待っていれば、肥前屋が礼金をくれたのだろうが、貧乏はしても旗本である。

湯舟を出て、糠袋で体を擦る。毎日というわけにはいかないが、わりに湯屋には行っている。

それほど垢がついているわけはない、と思ってみるが、やはり指で擦ってみると、垢はぼろぼろと落ちるのだ。

一物が屹立しているのが気になったが、幸い客は少なかった。

お依は二十六になっていた。抱いてしまってから、お依が千二百石の旗本、夏目半左衛門の奥方と知った。お依は外出するときには肥前屋で旗本の妻から商家の女に変るのだ。髪を結い直し、着るものも換える。そして屋敷にもどるときには、また肥前屋でもとにもどる。

この数十年、旗本が商家から妻を迎えることが多くなっている。千二百石と言っても旗本の内情は苦しい。つまり持参金つきの嫁というのが必要なのだ。もっとも直接、町家の娘を嫁にとることはできない。それでさる旗本の養女ということにして、嫁入りすることになる。

旗本としては、持参金だけでなく、時に応じて、妻の生家から金をもらえるのだ。

千二百石の旗本ともなれば、家来七、八人、家族と若党、上中下の女中、そして下男下女など合わせて、三十数人の世帯となる。金もかかるわけだ。家の中が潤ってくると旗本自身は、女に手を出す。半左衛門も例外ではなかった。屋敷の中に二人の妾がいるという。半左衛門とお依が夫婦らしかったのは、ほんの三年ほどだったという。

だが、それでたいていはうまくいく。お依の父、肥前屋総兵衛は、千二百石の旗本を婿にしているということだけで、鼻高々なのだ。半左衛門におやじどのと呼ばれると、うれしくなっていくらでも金を出す。

八年前に、お依は男の子を生んだ。これが夏目家の嫡子である。誕生祝いに、さまざまの祝いにまた金を出すことになる。叩き上げの総兵衛にとって、自分の孫が旗本の若殿さまなのだ。これはこたえられない。

2

伝七郎は『梅の湯』を出た。舟宿『いそ甚』にもどる。まだお依はもどっていなかった。女は男よりも洗うところが多いらしい。二階の座敷に入る。そこには炬燵が据えられ、火鉢には炭火が入っている。外の寒さに比べると、別世界のように暖いのだ。

「お酒をお運びします。肥前屋さんから、そう言いつかっておりますので」

女将は粋な女である。店や舟を切り盛りするには、気の強い女でなければならんのだろう。客が乗った舟が出るときには、その度に見送ることになるのだ。

伝七郎は立って障子を開けた。眼下に広い神田川が見え、その先に大川と江戸の海が見えていた。ちょうど向いは両国広小路になるわけだ。

千二百石の旗本なら、持参金つきの嫁が来ても、百二十石では、ただでも嫁は来ない。嫁で食うのではなく、嫁を食わせなければならないのだ。

この宿での飲み食い代、席料の請求書はみな肥前屋に行く。伝七郎にしても、こんなことは

めったにない。旗本の奥方と知ったときには遅かった。毒は美味なものである。毒を食ったと知ったときから、どうせ皿までと開き直っていた。

酒が運ばれてくる。そのあとから、お依が上気した顔で入って来た。湯に当たっただけではないようだ。

炬燵に向い合ってはいり、二人の盃に酌をして、あとはよろしくと言って去る。あとは二人っきりなのだ。呼ばなければ誰も入って来ない。

お依は、ふふっと笑い、伝七郎と視線を絡ませて酒をのんだ。お依の目はすでに潤んでいた。銚子を手にして酒を注ぐ。

「わたしは悪い女です」

「なんの、悪いのはわしも同じ」

「伝七郎さんに、ご迷惑をかけることになりはしないかと」

「それは、はじめから承知している。お依さんだって承知の上だろう」

「わたしはいいのです。どうなろうと。でも夏目だって同じことです。父から金をむしり取って、そのお金で、酒だ女だと」

「その腹いせで、わしを誘ったのかな」

「そんな、腹いせだなんて。わたしは、ずっと、昨年の夏から、あなたのことを思っていました。名も名乗らずにお帰りになってしまうんですもの、どんなにあなたのことを探したことか。

わたしをおぶって下さったときのあなたの広い肩、熱い背中」
「夏だったからな、汗の臭いがしたはずだが」
「そんなことはありません」
とお依はうつむいた。
河豚の刺身が運ばれて来た。そのあとは鍋である。この舟宿にも料理人はいるのだ。
「河豚か、わしらの口には入らぬものだ」
と薄い刺身を酢醤油につけて口に入れる。
「わたしがおいやではないのですか」
「お依さんがそんなことを言ってはいけないな、いい女だ。わしこそ運がよかったと思っている。明日はどうなろうと、今日いい思いができればいい」
安政の大獄があったのは二年前、尊皇攘夷という言葉があちこちで聞かれる。昨年、多くの学者が首を刎ねられた。どうしてそういうことになるのか、学のない伝七郎にはわからない。世の中は変ろうとしているようだ。伝七郎には関係のないこととは言えないが、流れていくものを止めようがない。もちろん徳川家のために一命を投げ出すなどという気もなかった。江戸はまだまだ平穏なのだ。もっとも明日は何が起るかわからない。明日のことより今日のことだ。うまい酒であった。居酒屋でのむような、水っぽい酒ではない。酒は居酒屋でのんでも安いものではないのだ。

「わたしはいやです。これっきり伝七郎さんと会えなくなるなんて」
この女も、はじめは旗本の奥方になりたかったはずである。親父の総兵衛にむりやりに夏目家に嫁にやらされたわけではない。三年間半左衛門の体に馴らされ、子供を生んだ。そのあと放り出されたのでは、体がもたないということだろう。
お互いに遊びである。夏目家を離縁して出て来るというのではない。半左衛門だって、お依を離縁すれば、金が入らなくなる。肥前屋総兵衛だって立派な婿を失いたくはない。だから、離縁さえされなければ、とお依を勝手にさせている。そう思って伝七郎も割りきっているのだ。
河豚鍋が運ばれて来た。新しく銚子も運ばれてくる。この座敷には次の間がある。そこには夜具が延べられているのだ。伝七郎もせっかちになる気はなかった。女に挑みかかるほど彼も若くはなかった。
鍋をつつきながら、お依は赤くなっていた。酒が回って来たのだろう。体を怠るそうにひねった。
お依が炬燵を出た。そして襖を開けて中に入る。次の間は暗くしてあり、行燈がつけられているようだ。出会いというのは、やはり暗いところがいい。秘めごとなのだから。帯を解くキュキュという音がしていた。その姿が見えるようだ。男に抱かれるために帯を解く。そのときの女の気持はどんなものだろうと考えてみる。
伝七郎だって女の体に飢えている。だからといってむさぼり食うみたいな真似はしたくなか

った。小身ながら旗本としての矜りもある、と思って苦笑する。矜りなどではない、痩せ我慢だ。

立って、襖を開ける。夜具が丸く膨んでいた。解いた帯も、脱いだ着物も、乱れ籠の中に収っていた。

夜具の膨みを眺めながら、両刀を鞘ごと抜きとって枕もとに置く、そして帯を解きはじめる。少しだが伝七郎も酔いが回っていた。襦袢姿になって、ついでに下帯も外す。一物はいきり立ってはいなかった。そのことに彼は満足した。だが夜具に入るとたちまち勃起してくるのを知っている。

夜具をまくって中に体を滑り込ませる。足のほうには湯たんぽが入っている。とたんにお依が抱きついて来た。うっと声をあげる。

彼女の柔い体を抱き寄せた。ほどよく肉がついていてしなやかだ。抱き寄せて唇に唇を当てると吸いついてくる。いきなり舌を絡め、せつなさそうに肌を押しつけてくる。

せっかちになるな、と自分に言い聞かせる。それほど、女に飢えているとは思われたくない。お依は鼻で荒い息を吐いていた。おそらく体は濡れているのだろう。

背中を撫で腰から尻の膨みを撫で、そして摑む。せつながって体をよじり、そして男の足を腿の間にたぐり寄せた。そして両腿で締めつけて来る。

長襦袢の衿を開いて、乳房をあらわにした。行燈の灯りに乳房が白く浮いて見えた。快い膨

みである。それを手に包み込んで揉みしだく。乳首は手の中ですでにしこっていた。

「あーっ」

と吐息が熱い。その胸のあたりから、女の香りが立ち上ってくる。湯を使って、それほどの時は経っていない。女の体の香りというのは甘いものだ。体を少しずり下げて、乳房に唇を触れ這わせる。白い脂ののった肌である。乳首は子供に吸わせたのか、わりに大きい。だが、それほど黒ずんではいない。その乳首を吸ってやる。

「あーっ、いいーっ」

と声をあげてのけ反った。乳首を吸いながら腰紐を解く、手を肌に這わせ、細腰のあたりを撫で摘んでやる。腹も尻も、蠟細工のようにすべらかだ。この蠟のような感触が女の脂というものだろう。

しきりに男の腿を締めつけ、そして腿の上にはざまを擦りつけるように腰を使っていた。お依は狂いたがっている。狂わせてやるべきだろう。ためらい勝ちに手を男の股間にのばしてくる。まだ羞恥心はあるのだ。指で一物に触れ、そしてそれを握りしめると、

「うれしい」

と声をあげた。一物が充実しているのがうれしいのか、一物を手にできたことがうれしいのか。尖端に指を這わせてくる。

乳首をしゃぶり、歯を当て甘く咬む。あーっと声をあげ、体をふるわせる。

「もう、こらえきれない」

と言いながら、歓びをかみしめているのだ。手を下腹部に当てた。そこにはざらりとした茂りがある。かなり太くよく縮れているが、その下のはざまにまでは及んでいない。手をはざまに当て、撫であげる。はざまの肉は柔く熱い。女の熱がそこにこもっているのだ。

腿が大きく開き、そして男の腿を挟みつける。そしてまた開いた。指を折ると、つるんと滑り込む。そこには露が湧いていた。指はなめらかに切れ込みに滑る。撫であげると肉の芽に触れた。アッ、と声をあげ、腰をふるわせる。

「あなたのが欲しい」

と声をうわずらせた。一物をしごくなどというようなはしたないことはしない。指は動かさなくても、腰を振ることによって肉の芽は揉みしだかれる。

二指を揃えて壺の中に没する。また声をあげ、腰をひねった。壺の中には多くの襞がある。その襞が指に絡みついてくる。半左衛門はまだ充分には使いこなしてはいないのだ。中途半端で、他の女に手を出した。

「伝七郎さんのを」

と言い、せつなげに腰をひねる。一物の尖端にも露が出ていた。そこに指が這う。

「いただかして」

と声をあげしきりに身を揉む。お依の体をうつ伏せにした。彼女は自分で尻をもたげ、這った。伝七郎はその尻に向う。そして指で壺をさぐりながら、そこに一物を没入させる。

「あーっ、いっぱい」

と声をあげ、腰を振る。その尻をしっかりと抱き寄せ、はざまを尻にぶっつけ、ぶっつけする。襞が一物にからみついてうねっている。お依は、両手で体を支えきれなくなり、肘をつき、それだけ尻は高く掲げられる。更にその肘も折って両肩で支えた。

彼には女のはざまが見えていた。そこに抜き差しすると、襞がめくれ返ってくるのが見える。

「いや、恥ずかしい」

と声をあげながら、白い尻を振る。

「これでは、いかない」

と言った。女によって異るが、まともでないと気をやれないという女は多い。彼が動きを止めると、お依はそのまま仰向けになり、腿を大きく開き、一物を手で誘う。

再び壺の中に一物が収まると、お依は狂った。一気に絶頂に達する。体に力がこもり、男の体にしっかり抱きつき、腰をゆすりしゃくりあげ、ついにはぐったりとなり、四肢をのばす。

彼がゆっくり腰を浮かし、そして押し込むと、またと声をあげてしがみついてくる。またいく、と声をあげ、体を震わせる。続けざまに気をやっている。襞はしきりに伸縮し、うねっていた。何度気をやったのかわからない。お依自身も数えきれないに違いない。続けざまだった。

はあ、と大きく溜息に似た声をあげ、そして失神した。もっとも失神は、ほんの一呼吸、二

呼吸の間だ。はっと気がつくと、
「恥ずかしい」
と声をあげてしがみついて来る。
「あたし、どうして、あなただと、こんなに乱れるの」
たしかに、こういうのを肌が合う、というのかもしれない。まだ襞はうねり続けていた。
「まだ、もちますか」
「そろそろだな」
伝七郎が体を放し、仰向けになると、お依は、一物を手にし起き上り、そこに顔を埋めて、蜜のような露を舐めとりはじめる。根元まで舐めとってから、尖端を咥え、一気に根元まで呑み込んだ。
お依は、男の足に跨がっていた。尻を男に向け、その尻をいじられるのが恥ずかしいのだ。そしてゆっくり頭を上げ下げする。根元を手に握っておいて、雁首のあたりに唇を当て、頭を上下させる。
「果てる」
と声をあげ、下から尻を持ち上げる。女の舌が小さな孔のあたりを這っている。そして思いきり、口の中に放出するのだ。
いつもがこれだった。お依を孕ませたくはないのだ。彼女もそれを心得ていて、咽をならして呑み込む。はじめのときは、白い腹の上に噴出させた。しぶきは乳房までもとんだのだ。いまは口で受けとめるのになれていた。
体の中に放出しないのは、出会いの最低の心得だろう。彼女は伝七郎の胸に顔を伏せて来た。掛布団を引き寄せ、お依の体に掛けてやる。
「わたし、伝七郎さんを放したくない。ずっとこのまま、こうしていたい」
女の願望である。もちろん、これで終ったわけではないのだ。しばらくすると、また手を一物にのばして来て、力の失せた一物をこねくり回す。
「わたしは、あなたとこうしているときだけが極楽。夜になると眠れないときもある。半左衛門は女を抱いている。月に一度くらいはわたしの寝間に来てもいいのに」
女の手は、腹のあたりを撫でていた。その手がのびて萎縮した一物を摘んでくる。

3

亀沢町の住いにもどると、女中のお福が、書状を手渡した。表には、多門伝七郎殿とあり、裏を返すと、夏目半左衛門とあった。その書状を開いてみると、
『明三月三日、明の六ツ半、右京ヶ原に来られたし』
と二行の文字があった。

夏目半左衛門の文字にドキリとなった。いよいよ、来るべきものが来た、という気がした。お依と伝七郎の密通を半左衛門が知らぬはずはない。果し状ではない。果し状ならば立合人の名が書いてなければならない。右京ヶ原に呼び出して斬り捨てようという気なのだ。

果し合いならば、目付役まで届け、その許可を得なければならない。勝手に斬り合いなどできるわけはない。

ふむ、と伝七郎は唸った。どういうことかを考えてみなければならない。また着流しのまま家を出た。外は北風が吹いていた。さっきまでは、この風も気にならなかったが、いまはいやに冷めたい。

「なるほど」

と呟いて苦笑する。夏目半左衛門は刀を抜けるような男ではない、とすると誰か腕の立つ者を頼んだのだろう。

半左衛門が伝七郎のことを調べたのかわからない。もちろん呼び出すには、それだけ調べてのことだろう。直心影流印可の腕であることは、もちろん知っての上と思われる。それだけの腕の者を揃えたことになる。

右京ヶ原は、本郷・真砂町の西に当る。以前は、高崎藩主、松平右京亮の中屋敷があったところで、屋敷はこわされ、再度建てられることはなかった。そのために原っぱとなり子供たちの遊び場になっていた。

東に加賀百万石の上屋敷があり、西に水戸家の上屋敷がある。右京ヶ原は、その二つの大きな屋敷の間に位置する。北には伝通院の森があった。

伝七郎は、両国橋を渡り、神田川沿いの柳原土堤を歩く。

「これも、自業自得か」

こうなることはわかっていたような気がした。相手は千二百石の旗本である。こちらは百二十石の貧乏旗本、夏目半左衛門としては、伝七郎に妻を寝とられたのでは、腹の虫が治まるまい。旗本の面目ということもある。

柳原土堤から八辻ヶ原に出て昌平橋を渡る。とりあえずは、右京ヶ原を見ておかなければなるまい、と出て来たのだ。斬るにしろ、斬られるにしろ、地形がわからなくては不利である。どう斬り合うかも考えなければならない。

お依と肌を重ねたのを悔んでいるわけではない。お依はお依でよい女だった。ちょいと股間のあたりがむず痒い。三度、お依の口の中に放出した。それを思い、目を細めた。落し穴ではない。予想できた穴だ。

いまさら悔むのなら、お依の誘いには乗っていない。うまいものを食い、うまい酒をのんで、いい女を抱いて、そのあとに来るものは死か、と思う。

伝七郎は、まだ人を斬ったことはなかった。何人の敵を相手にするのかもわからない。あるいは十人の男に囲まれて、斬り刻まれるのかもしれない。

昌平橋を渡って、川沿いにしばらく歩き、右に折れる。右京ヶ原の場所は知っていた。本郷というところは、旗本屋敷の多いところだ。もっとも、江戸の七割は武家地で残りの三割が町屋になっている。

本所だって同じだ。旗本と御家人の家の中に少しだけ町がある。

左に折れ右に折れて、まっすぐ行くと右京ヶ原にたどり着く。原っぱに踏み込んでみる。夏は夏草が生い茂り、秋から冬にかけてはすすきが原になる。すでに青い芽が吹くころだが、この寒さのために、芽を出すのをためらっている。むかしの庭木と思われる木はあった。松の葉、杉の葉などが青々としている。

右京ヶ原は、江戸とは思われぬほどの荒れ地だ。風が裾をめくって吹く。伝七郎は地形を眺めた。

明日はここで果てる身か、と思う。お依とのんだ酒は、とうに醒めていた。

「どうすればいい？」

と自問する。もっとも覚悟はできる。死んで哀しむ者のいないことは幸いだった。このために妻を迎えなかったのかもしれない、と思えてくる。

このまま逃げてしまうわけにはいかないのだ。小身でも旗本である。さむらいの意地はある。恥ずかしくなく死ねればいい。

いつもは走り回っているはずの子供たちの影もない。木枯しの吹く中で、腰の刀を抜いてみた。刀はいつも手にしている。だが、人を斬った覚えのないのが不安だった。直心影流は身につけている。だが、いざとなれば体が動かなくなるかもしれない。竹刀稽古と斬り合いは別なのだ。

そこに敵を仮想した。刀を右手に下げ、膝をたわめる。そして逆袈裟に斬り上げ、天を向いた刀を引きもどし、八双から右袈裟に斬り下げ、それを車にし、左へ向いた刀を右へ引く、横一文字だ。刀が風を切って唸った。いまは体が動く。刀の走る筋も確かだった。

もちろん敵も動く。思った通りにいくわけがない。相手が正眼に構えると斬り込めない。敵は一人ではないはずだ。すると後に回り込まれる。囲まれないように走り回らなければならない。

あたりは、ようやく暮れて来た。誰かに助っ人を求めるか。頭の中を探してみる。助っ人になり得るような男はいない。

刀を鞘に収め、歩き出す。右京ヶ原を出て歩き出し、振りむいた。明日はここがおのれの死に場所になる。おそらく今夜は眠れないだろう。ゆっくり眠れるほどの度胸はない。

五日後には、お依と『いそ甚』で会う約束をした。そうか、今日がお依との別れだったのか。

死ぬ覚悟ができればよい、と言っても、そう簡単にいくわけはないのだ。

昌平橋を渡って、八辻ヶ原に立つ。柳原土堤を行くとなると、すでに夜鷹が男の袖を引く時刻である。足を止めた。

吾妻橋を渡るには遠すぎる。もっとも神田川のむこうを歩けば柳原土堤を歩かなくてすむ。だが、むこうを歩けば、平右衛門町の舟宿『いそ甚』の前を通ることになる。お依を思い出すからではないが、何となくいやだった。もっとも、少し遠回りすれば、柳原土堤を通らなくてすむ。

明日、死ぬ身が何を考えているのか、と思う。もちろん、暗くなれば柳原土堤を通るのはまともな男ではない。いやでも応でも夜鷹に引っかかってしまうのだ。

すでに、伝七郎は、いまはまともな男ではなかった。柳原土堤に入る。この寒い中でも手拭いをかぶった女たちがうろうろしている。さすがに寒いので数は少い。だが女たちは客を引けないと飯が食えないのだ。小さな小舎の中にむしろを敷いて、そこで女たちは股を開く。こんな女たちでも抱きたい男はいるのだ。酒に酔った勢いでここにやって来て、開かれた股に一物をねじ込んで放出する。それで気がすむのかどうかはわからないが。

「おさむらいさん、ちょいとおいでよ」

と白い顔の女が歩み寄ろうとして、何かに気付いたように身を引いた。伝七郎は何かを睨んでいた。

むこうに黒い影があった。影の形からして浪人であった。女たちは伝七郎の袖は引かなかった。浪人の三間ほど手前で、

「キェーッ！」

と叫んだ。とたんに走っていた。浪人が棒立ちになる。体がガタガタと震えた。伝七郎は刀を抜いた。そして走り寄りざま、浪人の左肩に刃を叩きつけた。

斬り損じたか、と思ったほど、手ごたえがなかった。雁金に斬った。雁金とは貝骨がなまったもので、肩甲骨のことをいう。貝骨といわれるだけあって平べったい。その雁金を斬り下げていた。走りながら鞘に収めた。刃には脂が浮いている。だがそれを拭い取る余裕はなかった。浪人は声もあげなかった。そのまま広小路に走り込み、息をついた。思ったほどには息は乱れていなかった。腕を袖の中に入れて歩きだす。

はじめて人を斬った。手応えがなかったのが不思議なくらいだ。あの浪人は死んだろう。まるで紙を切るように斬れた。浪人は竦み立っただけで、声もあげなかった。

「こういうことだったのか」

と思ってみる。斬るのと斬られるのとは同じである。浪人は痛みもなく死んでいったのに違いない。できれば痛みもなく死にたいものだ。体から血を失って死ぬのは快いものだと聞いたことがある。首の血脈を切られる。すると血は急速に失われていく。するといい気持になれるらしい。と言っても、まだ斬られたことがないので、ほんとのことはわからない。

住いにもどり、行燈を引き寄せ、刀を抜いてみた。切先五寸あたりのところに、雲がかかったように白い脂が浮いていた。もちろん血は付いていない。斬ったあとから血は湧き出してくるもので、突かない限りは刃に血は付かないものである。

伝七郎は、押入れの中から、鹿のなめし革を取り出して、刃を磨くように拭いはじめた。この革で磨けば、少し錆びかけた刀ももとにもどるのだ。革は伝七郎には商売道具でもあった。

「旦那さま」

と女中のお福が夕餉の膳を持って来た。そう言えば、夕飯は食っていなかったのだ。

4

目をさましてみると、雪が降っていた。しばらくは暗い天井を睨んでいたが、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

三月三日、桃の節句である。この日に幕府にとっては大事件が起る。そのことを誰も知らなかった。

五ツ半（午前九時）すぎに、桜田門外で、水戸浪士によって井伊大老が討たれることになる。明け六ツ（午前六時）には、いくらか間があったが、お福に命じて朝餉を作らせた。飯と味噌汁で足りる。飯が出来る間に、髭を剃った。むさい顔で死にたくはなかったのだ。髪は総髪にしている。親の代から月代を剃る必要はなかった。

着物の上に軽衫をはいた。野袴のように裾のすぼまったものである。それに綿入りの袖なし半纏を着た。

出かけるときには六ツ半（午前七時）になっていた。紙足袋に雪駄をはいた。そして懐中には草鞋を入れた。死に行くのに何も急ぐことはないのだ。

三月だというのに綿のような雪が降っていた。夜明け前から降り出したらしく、路上を薄く白化粧している。風はなかった。昨日のように寒くはない。何か死ねるような気持にはなっていた。眦を決しているようだ。

水戸浪士たちも、このとき、同じような気持だったに違いない。

両国橋の上を歩くと、大川も海も見えないように、白い御簾ごしに見るような風景だった。広小路から柳原土堤にいる。もちろん夜鷹はいない。浪人の死体でもうずくまっているかと思ったが、それもなかった。すでに片付けられたのだろう。

「死ねる、死ねるぞ」

と声に出して呟いた。胸はどきどきしていない。妙に澄んだ気分だった。どうせ死ぬのなら、一人でも二人でも斬ってやろう。その通りだ、ただで死ぬような安っぽい命ではない。

昌平橋を渡る。雪は降りしきっている。敵は待ちかねて苛立っている。旗本の屋敷の角を曲がったところで、腰をかがめた。雪駄を脱いで、草鞋にはき換える。草鞋をはくのもはじめてだった。雪駄は土塀の隅に隠した。捨ててしまうのがもったいなかったのだ。こういう所にも貧乏性がでる。そんなにはき古した雪駄ではなかった。

もちろん、斬死すれば、雪駄などには用はないわけだが、ここで雪駄にこだわってみたかっ

たのだ。

そろりと歩き出した。雪は降りしきっている。すでに一寸（三センチ）以上は積っている。雪のあとは道がぬかるむ。難儀だな、と思った。

右京ヶ原は、すぐそこだった。歩き寄って原っぱをうかがうと、四、五人が焚火をしていた。ほぼ中央だ。五人いた。五人とも浪人である。夏目半左衛門の姿はない。おかしい。半左衛門は屋敷でぬくぬくとしているのか。

五人の浪人は襷がけにし、それぞれに合羽を肩に乗せていた。袴のもも立ちは取っている。五人が囲んだ焚火は、パチパチと音をたてて燃えている。昨日見に来たときには、たしかに古材や、木片があった。

五人は伝七郎を囲んで斬るつもりなのだろう。こやつらに斬られてたまるか、と思った。

まず先に刀を抜いた。そして走りながら、

「わーっ！」

と叫んだ。五人が揃って顔を向けた。浪人は、まず、肩の合羽を払わなければならない。刀を抜くのはそのあとだ。そこに時間がある。伝七郎は、右の一人に向いながら、急に左に方向を変えた。

まず一人を斬る。その一人しか見えていない。刀柄に手をかける。急には鯉口が切れない。あわてふためき、顔には狼狽の色が走る。

左に刀を引き寄せ、思いきり腕に力を入れた。浪人の首のあたりに水平に刃が走る。手ごたえはない。左手で浪人の髷を摑んだ。もち上げると、首が浮いた。その首を後方の男に投げる。その浪人は胸で首を受け抱いた。

首を失った浪人の腹を蹴った。その浪人の体を別の浪人が抱いた。そのときになって首根からドバッと血が噴き出した。抱きかかえた浪人はその噴出する血を顔に受けた。さぞ生ぬるい血であったろう。

二人目が刀を半分抜きかけていた。伝七郎は小さく刀を振った。刀柄を摑んだ手首がぶら下る。ついでに剣尖を突き出した。剣尖が右眼に入った。そのとき、刃が骨を咬む手ごたえがあった。しまった！　と思った。剣尖が欠けたと思う。あわてて引き抜く。

引き抜いておいて、その刀を左へ運ぶ。三人目が刀を抜き、上段に振りかぶった。そのときには、伝七郎は頭から突っ込んでいた。刃の下をくぐるというのは怖ろしいものだ。だが、彼は夢中だった。

腰をかがめ、体を前進させながら、刃を水平にし、浪人の腹に当てる。そして体ごと右へ移動する。抜き胴が決っていた。腹を裂いたのに、豆腐を切ったように手応えがなかった。

音も叫びも全く耳には入らない。体は自在に動いていた。頭の中では三人目を斬った。あと残るは二人だと考えていた。

四人目が背を向けて逃げる。五人目はどこにいるのかわからない。どこからか刃が降ってく

るかもしれない。それを思いながら、左手で脇指を抜いた。それをそのまま投げる。脇指は宙を飛んだ。背中を狙ったつもりだったが、腰のあたりに刺った。当っただけましである。

走り寄る。振り向きざまの薙ぎがあることは知っている。右肩が開きかけた。右腕が回ってくる。伝七郎はその右腕のつけ根あたりに刀をたたきつけた。

その浪人は振りむいた。伝七郎を薙ぎ斬ったつもりだったのだろう。右腕は刀を握ったまま、袖からずり落ちていた。おのれの右腕がないのを知り、目を剝いた。その浪人の首根に、袈裟掛けに刀を叩きつけた。首がざくりと割れる。血が噴き出す前に一呼吸ある。裂かれた肉の白さを見ただけだった。一歩退き、目で五人目を探した。

わからない、どこにいる。伝七郎はあわてた。血まみれの男が立っていた。そうか、この男か、首のない浪人を抱いた男だ。顔面に血を噴きつけられ、目が見えなくなって、うろうろしていたのだ。

血は脂である。目に入ると何も見えなくなる。浪人は走り出そうとして、何かにつまずき転んだ。そしてヒッと叫んで起き上り、あらぬ方向に刀を構えている。一人で斬り合いを演じているのだ。

むこうに坐り込んだ浪人と目が合った。両手で腹を抱いていた。両手がまっ赤に染まっている。指の間から白い臓物がはみ出そうとする。浪人はそれを腹の中に押し込む。この浪人もやがては死んでいく。ただ、しばらくは死にきれまい。

さんさんと雪が降っている。まだ焚火も燃えていた。伝七郎は刀を右手に下げて立っていた。四人の浪人を斬った。ほんのわずかな時間だった。どう動き、どう斬ったかは記憶になかった。少しずつ思い出して来る。一人の浪人の首を刎ね、その髷を摑んで投げた。そして首のない浪人を蹴った。これで二人の浪人の動きを止めた。残るは二人だ。よく斬った。よく斬れたと思う。

昨夜、柳原土堤の浪人を斬った。今日死ぬつもりだから斬れた。こうして生き残ってみると、申しわけないことをしたと思う。自嘲が湧いて来る。

大きく溜息を吐いた。むこうで刀を構えている浪人が、その溜息に反応した。目が見えないから耳をそばだてているのだ。恐怖心にかられ、体を堅くしている。このまま放っておけば狂いだすだろう。いかに瞼をまたたいても血は貼りついていて流れない。

たしかに、直心影流の印可を受けている。これくらいのことは容易だったのだ。死ぬことだけを考えていた。この五人の浪人は金のためなのだ。いくらもらったか知らないが、金のためには死ぬ覚悟はできない。

伝七郎は、立っている浪人の前に立った。

「ここだ」

と声をあげてやった。浪人の体がピクンと震える。この浪人を残しては恨みを残すことになる。刀を抜いたときは、敵を斬り倒すしか生き残る道はないのだ。たしかに浪人は、助けてく

れ、とは言わなかった。

浪人が進んで来た。もちろん目が見えなくては間合いはとれない。剣尖を上げた。伝七郎のほうから間合いに入った。刀を振り下ろそうとしたとき、刃を左から右へ振った。刃が空気を裂いて悲鳴を上げた。刀柄を摑んだ両腕がとんだ。同時に咽笛がぱっくり口を開いた。白い肉が見え、一呼吸あって赤い血が空気にまじって、ごぼごぼと噴き出して来た。

伝七郎は、二、三歩歩き、そこで刃を拭いはじめた。鹿のなめし革である。刃が白く鈍く光っていた。脂がのっているのだ。

5

牛込御門の近いあたり、神楽坂に夏目半左衛門の屋敷がある。その屋敷の門扉の右隅にくぐり戸がある。伝七郎はその戸を叩いた。草鞋は捨て、雪駄をはいていた。

このとき、桜田門外は大騒ぎになっていた。井伊直弼の首が、水戸浪士によって討ち取られた時刻である。だが牛込御門は遠い。その騒ぎは、まだ届いてはいなかった。

門番が、どうぞ、と言った。名前は通してある。座敷に据えられた。しばらく待たされ顔の長い四十歳ばかりの旗本が入って来た。これが半左衛門だった。

「貴公の名は聞いておる」

と半左衛門は薄笑いを浮かべた。お依の男の名は知っていたようだ。伝七郎は黙って懐中の書状を出し、畳の上に置いて押しやった。

彼は書状を手にし裏を見て、あわてて、中の紙を取り出し開いた。そして狼狽した。

「わ、わしではない。この文字はわしのものではない」

伝七郎は、黙った。

「それで、右京ヶ原で、何があった？」

「五人の浪人を斬り捨てました」

「なんと」

「夏目さまは、奥方さまとわたしを二つに重ねて四つになされますか」

「まさか、これは総兵衛がやったことだ。この文字は総兵衛の手じゃ」

一気に早口で喋った。そして一息つく。

「わしは、あんたを斬る気などない。あんたを斬ればお依も斬らねばならぬ。それではお依の姦通を認めたことになる。夏目家にとっては不名誉なことじゃ。いまどき女敵討などはやらぬ」

そのとき、家来の一人が、あわただしく入って来た。

「何用じゃ」

「桜田門外にて、大老さまがお討たれになったとのことでございます」

「なに、大老が、すぐ登城する。用意せい」
出ていきかけて、半左衛門は足を止めて、伝七郎を見た。
「多門どの、肥前屋はわしに取っては金のなる木じゃ、お依をわしが手放すと思うか。たとえ姦通していてもじゃ。お依をよろしくたのむ」
そう言い残して、半左衛門は座敷を出ていった。半左衛門がお依を妻に迎えたのは、肥前屋の金が目的だった。それはお依の話からでもわかっていた。だから、お依が伝七郎と通じたからと言って、痛くも痒くもなかった。
むしろ、お依の男遊びに、肥前屋総兵衛のほうが気にした。お依は肥前屋で着換えて町女にもどって遊び歩いていた。このことが半左衛門に知れると、お依が離縁になるのではないか、と怖れ、五人の浪人を雇ったのだ。
伝七郎は、座敷に坐って動かなかった。そういうことだったのだ。いま、お依はこの屋敷の奥にいるのか。千二百石の旗本になると、表と奥がある。女たちは表には姿を見せない。
何か妙な気分だった。もちろん、右京ヶ原の五人の浪人は斬らねば、こちらが斬られた。人を五人も斬った気分はどうだ？　と自分に問いかけた。どうだ、と言われても、よくわからない。道場の竹刀稽古も無駄ではなかったわけだ。要するに、人を斬るのは、死ぬ気になれるかどうかだ。
座を立って、夏目の屋敷を出る。雪は小降りになっていた。だが道を歩くと、雪駄がキュッ

キュッと鳴ってはまり込む。この寒さではしばらくは溶けないだろう。牛込御門橋を渡り、神田に向って歩きだした。体から力が抜けていた。このあたりも武家屋敷ばかりである。あわただしく走る者もいた。
「井伊大老が殺されたか」
これから世の中はどう変るのか。伝七郎のような小身旗本には、あまり関係ないようだ。それにしても、どうして水戸浪士などに、井伊大老が討たれてしまったのか。
桃の節句のお祝いを将軍家に述べに登城する日だった。井伊家には大老を守る人物はいなかったのか。伝七郎も死ぬ覚悟で五人の浪人に斬り込んだ。水戸浪士も死ぬ覚悟だったのだろう。
「覚悟の違いか」
と呟いてみる。幕府の屋台骨は、大老暗殺で大きく揺らぐことになる。騒ぎはだんだん大きくなる。あちこちで旗本やその家来たちが集って、ひそひそと話している。神田に入ると、そこでは町人たちが、あちこちに固まっていた。大老が暗殺されるなど、かつてない事件なのだ。
神田多町に着いたころには、雪はやみ、薄日がさしはじめていた。
肥前屋の店に入った。番頭らしい男が出て来た。
「わしは、多門伝七郎だ。総兵衛どのに会いたい」
「何のご用でございましょうか」
「わしの名を告げれば、総兵衛にはわかる」

番頭は奥に入る。そこで客の相手をしていた五十年配の男が、ギョッ、と伝七郎を見た。手にした十露盤が足もとに音をたてて落ちた。

総兵衛は、しばらく、口を開いて、伝七郎を見ていた。

血風・先斗町

1

『先斗町、鴨川の西岸、三条と四条の間の小路なり。古くは新河原町といいしが、裏は河原にて、先斗りの町なりしかば、あと訛りて先斗町といえり』

文久三年十月――

十月といえば、いまの十一月である。京都の冬は寒い。底冷えがするという。体の芯から冷えてくるのだ。

阿比留兆次は、先斗町の酒場『小萩』で酒をのんでいた。二合入りの銚子を手にし、盃に注ぐ。それをちびりちびりと呑む。酒が回るにつれ上半身は温くなってくるが、足もとは痺れるように冷めたい。

店は、三和土と畳座敷になっている。三和土には、五台の卓がある。座敷にも五つの食卓があって、それぞれ衝立で仕切れるようになっている。

座敷に二人のさむらいがいた。三和土のほうにも三人のさむらいがいて酒をのんでいた。さむらいといっても、どこかの藩士と決っているわけではない。浪士も浪人も、京都にいる者たちは、月代を剃りあげ、髷はきれいに結い上げている。いわゆる月代をのばしたむさ苦しい浪人というのは少ないのだ。

京都は勤王の志士の坩堝である。さむらいのほとんどは、志士のようである。浪人と浪士という言い方がある。浪人というのは、一度禄を食んだことのある者で、浪士は、郷士、農夫、町人、博徒などをいう。これらすべてをひっくるめて志士と言っている。

兆次も浪士であった。生まれは上州高崎である。親の名も知らない捨て子だった。高崎のやくざの用心棒として活計をたてていたが今年の二月、人に誘われて、清河八郎の浪士組に参加し、この京都にやって来たが、清河らと共に、芹沢鴨、近藤勇らと別れ、江戸にもどった。

そのときに、近藤らと共に京都に残ればよかったのだが、清河についていってしまった。そして、清河は暗殺され、浪士組は公儀によって捕えられた。兆次は逃れ、再び京に来て近藤ら

の新撰組に応募したのである。いまは新撰組の一人として落ちついている。

それでも、兆次は勤王の志士だった。こういう言い方をすれば、新撰組の隊士のほとんどは勤王の志士である。勤王の志士と言ってもピンからキリまである。当時は、勤王と佐幕という分け方はされていなかった。幕臣もほとんどは勤王だったのである。

だが攘夷となれば話は別だ。攘夷激派というのが、長州勢であり、薩摩、土佐の脱藩浪人たちである。

二カ月前に、八月の政変というのがあった。このことを少し説明しておかないと当時の京都はわからない。

朝廷と公卿たちは何が何でも攘夷であった。つまり外国が怖ろしかったのだ。この公卿を利用して一気に攘夷に持っていこうとしたのが長州を中心とする激派志士だった。

当時、京にあった家茂将軍にむりやり攘夷をつきつけ、天皇をかつぎ出し、大和行幸を決議した。

これが、尊攘志士たちの念願でもあったのだ。決議されたことで、公卿たちは長州藩邸に集まり〝遂に我ことなれり〟と祝杯をあげた。

だが、孝明天皇は、天皇親政に自信がなかった。それで一橋慶喜や松平容保に相談され、一夜にして、攘夷がもとの公武合体にもどったのである。

これを八・一八の政変という。愕然となったのは、三条実美ら公卿と長州など激派志士た

ちだった。この政変で京にあった長州勢は国許に引き上げることになった。攘夷の公卿たちも京都にはいられない。世に言う〝七卿落ち〟がこれである。

この政変に絡んで、前侍従の中山忠光を盟主とする天誅組が蜂起し、そして潰れている。

この政変で、京都から攘夷の志士たちは一掃された。もちろん、志士が京都からいなくなったわけではない。みんな地下に潜ったのである。あちこちで暗躍しはじめたのだ。

新撰組は、これらの志士たちを探し出して斬殺するのが仕事のようになっていた。つまり、京都から志士が一掃されたというのは表むきだけで、現実には、志士はごろごろしていたのだ。

兆次が、この『小萩』に通いはじめたのは二カ月ほど前からである。密偵というのではないが、密偵のような目つきになる。

酒を呑みながら、店の中に目を泳がせる。酒を呑んでいる三人の浪人も志士なのだろう。志士といっても、長州、薩摩、土佐の浪人たちばかりとは限らない。各藩の藩士たちが脱藩して志士になっている。もちろん、浪人たちばかりではない、浪士も多い。

言わば、近藤勇や副長の土方たちも浪士である。

「おいでやす」

と女将のお藤が、三和土に降りて来て、兆次の卓に歩み寄ってくる。そして向いの椅子に坐り、銚子を手にして酌をする。二十七、八、色の白い姿のいい女だった。

「阿比留はんは、いつもお一人どすな」

「人づき合いが悪いのでな」

「関東の方どすか」

「上州は高崎というところでな」

兆次は、この年に三十二歳になっていた。新撰組でも、年長のほうである。もっともこの店では新撰組であることは口にしなかった。意識して隠しているというのではなかったが、そのようになったのである。もちろん、上州高崎の浪士が志士であってはいけないわけはない。

「お藤さんは、いつも美しい」

「いやどすえ」

と言っては衿を合わせる。衿を合わせるのではなく、そのあたりに白い指を遊ばせるのだ。それが妙に色っぽいしぐさであることを知っているのだ。

このお藤を目当てに通って来ているわけではないが、美しい女が視界でちらちらするのは悪いものではない。

「もう、年ですえ」

「なんの、いまが盛りだ」

何となくこの店に入り、そしてこの店に通うようになった。この店が攘夷の志士たちの溜りになっているなど、考えてもいなかったのだ。お藤に惚れて通ったとて、ものになるような女ではない。京の女は気位が高い。田舎者の兆次などには、京の女には手が出ないのだ。また、

このような女に好かれるような品性はない。十年ほどは用心棒として生きて来たのだ。品性などというものはもともとない。そういうおのれのことは知っていた。

「どうぞ、ごゆっくり」

と言ってお藤は立っていく。二人の浪人が入って来て、お藤と二言三言口をきいて、座敷へ上っていく。どういうたぐいの浪人かはわからない。ふと目を移すと、いま来た浪人の姿がなかった。

「なるほど、もう一つ奥に座敷があるようだ」

呟きながら、兆次はお藤の姿を見ていた。よく見ると、更にいい女に見えてくる。腰のあたりの膨みが何とも言えない。裸にしてみたいものよ、と思う。手を触れれば、なめらかな肌だろう。

やくざの用心棒をしていたのだから、女の数は知っている。お藤は、上州の女たちとは違っていた。と言っても手の出る女ではない。ただ眺めるだけの花である。もちろん、あれほどの女だから情人はいるのだろう。その情人が羨ましい。お藤の姿を目で追っていると、体が妙に熱くなってくる。そういえば、京都に来てからは、まだ、女の肌には触れていなかった。

島原にでも行ったほうがいいのかもしれない。隊士の中には島原に遊女を買いに行っているのも多い。兆次は苦笑する。彼には女を買うというのが性に合わないのだ。ごろつきの生き方をしていて、女を買うのがいやだというのは妙なものである。金で買ったほうが気楽であることはわかっているのだが、それができないのだ。

金を払って、お藤の、またおいでやす、という言葉に見送られて、店を出る。先斗町通りである。左右に小さな店が並んでいる。女たちが店の先に出て客を呼ぶ。提灯の灯りが行列しているように並んでいた。

左手に並んだ店と店との間に小さな路地がある。通り抜けられるらしくむこうに通りが見えていた。二人と並んで歩けない細さである。兆次はその路地に入ってみた。広さ二尺ほど。二人がすれ違うには、お互いに板壁に背中を押しつけなければならないほどの狭さだ。

こんな細い路地がこの通りには何本もあるのだ。どうしてこんな細い路地を作ったのだろうか。

路地を抜けると、木屋町通りである。この通りの一方は川になっている。高瀬川である。この高瀬川は、二条通りから鴨川と分れて流れ込んでいる。底の砂利が見えるほどに浅い。もっとも水の深さというのは上から眺めただけではわからない。この川を舟が上り下りするのだ。

2

三条通りへ向って歩く。左手が高瀬川である。町の中を流れる小川というのは快いものだ。荷を積んだ舟が下っていく。これまではこの高瀬川をしみじみと見ることもなかったのだ。

ふと、お藤の姿を思い浮かべてみる。そして苦笑する。手の届かない女だ。

川を左手にして歩く。これは剣士の心得である。体の左側を押えられると、刀が抜けなくなる。左をふさぎ、右を開けておかなければならない。酒をのんでいるときも同じだ。『小萩』でも、板壁を左にして坐っていた。体にそういう習慣がついているのだ。意識しなくても、ごく自然に左側をふさぐ形になるのだ。

左を川にして歩く。お藤の姿を思い浮かべながらも、脳の半分はあたりに気を配って歩く。そうでなければ、いまの京都では生き残れない。

兆次は足を止めた。そのときには左手で刀の鯉口あたりを摑んでいた。そして、目の前に立っている三人の浪人を見た。見たこともない浪人たちだ。中の一人が叫んだ。

「こいつだ、こいつは新撰組だ！」

三人は、同時に体を伸ばして刀を抜く。敵が刀を抜く前に兆次は、鯉口を切り刀柄に手を掛けていた。

斬り合い、と言うのはたいていは問答無用である。兆次はこれまでに隊士の一人として浪人を斬っている。そのときに目の前の浪人に顔を覚えられたのだろう。

刀を水平に抜きながら、兆次は一歩を踏み出していた。刀を抜いた浪人は、そのまま、

「キエーッ！」

と叫んで上段に振りかぶる。腹はがら空きだった。刀を抜いたとき、更に一歩を進める。間

合いに入っていた。

左へ充分に刀を引きつけておき、懐中にとび込みざま、水平に刃を右へ移動させる。浪人はそのまま突っ込んで来る。刃が浪人の腹を横へ走る。

切尖三寸に力を加える。刃が浪人の腹にめり込む感触があった。刃を右へ引き抜く、と同時に、刀の重さに曳きずられるように、兆次の体も右に移動する。抜き胴が鮮かに決っていた。

兆次の左脇腹を掠めるように、浪人の体が通り過ぎていく。

「ギャーッ！」

という叫びを聞いた。胴を抜くときに二人目を確めていた。二人目は抜いた刀を振りかぶろうとしていた。

兆次は、右へ動いた刀を引きもどし、剣尖を車にして、上段へ持って来る。そこで相手かまわずに垂直に斬り下げる。一歩を大きく踏み込んでいる。

二人目の浪人は、兆次の動きを見て目を剝いた。上段からの刀を早く振り下ろそうとする。だが、肩に力が入っていた。刃の迅さが違った。加速度がつく。刃が空気を裂いて笛を鳴らした。

浪人の左肩を裂く。雁金に斬るという。人の肩には平べったい貝骨がある。この貝骨がなまって雁金となった。この貝骨を肩から垂直に裂くのである。浪人の刀は上段にあった。そのために、左手首から切断することになる。手首を斜に切断し、肩から二尺も斬り下げた。

魚を三枚におろすという。人体の三分の一を削ぎおろしたような感じだ。左肩に隙間ができ、その部分が裂けめくれていく。裂けた部分は、魚の刺身のように白っぽく見えた。血をにじみ出させる前の肉は白いものだ。

浪人の体が左へ傾いた。左肩が斬り放され軽くなったのだから、右へ傾くはずなのだが、人体は、斬られた部分が収縮する本能に動くものらしく、左へ傾くものらしい。そして左へよろめき、そのまま、まるで誘い込まれるように、高瀬川に転り落ちていった。

いま一人、三人目がいる。その浪人は刀を正眼に構えていた。

「新撰組だけあって、なかなかやるな」

正眼の刀を八双に構えた。ただの八双ではないようだ。兆次は、なるほど、これが示現流か、と思った。薩摩藩士は、例外なく示現流を使う。この示現流は、島津家のお留流でこの幕末になってやっと姿を見せた剣である。

その浪人は、肘を張って構えた。剣尖はまっすぐに天を向いている。それが蜻蛉に似ていることから、トンボの構えというと聞いていた。

示現流と対峙するのは、兆次もはじめてだった。もちろん、刀を抜いたから死の覚悟はできている。いま怖れるものは何もない。人を斬るということは、自分も斬られるということである。

兆次は、二人目を斬り下げたあとは、刀を右手に下げていた。構えというのは流派によりではなく、人によっていろいろあるわけだ。人を斬っているうちに、自然におのれの構えというのは決っていくものである。正眼に構えるのは、むしろ初心者である。

腹を裂かれた一人目は、両手で腹を押さえそこに蹲まっていた。両手はすでに赤く血にまみれている。腹の内臓は折り畳まれている。そのため、一方が斬り裂かれると内臓は外へとび出ようとする。それを浪人は腹の中へ押し込もうとしているようだ。血にまみれた内臓は再び中へもどることはない。浪人の腹は血にまみれた内臓で黒々としている。

だが、腹を裂かれただけでは、すぐには死ねない。死ねないが再び助かることはないのだ。腹を裂かれて三日間生きていた例があるという。生きているだけ無惨である。

「介錯たのむ！」

と呻くような声をあげた。

だが、兆次も三人目の浪人も手はふさがっていた。

示現流の怖ろしさは、その気迫と鋭さである。気迫には圧倒され、ふつうならばたじたじとなる。剣には威の位、移の位、写の位と三位がある。示現流はまず威の位である。威がほとんどと言っていい。チエイストと叫ぶ。これは気合いではなくむしろ叫びなのだ。

この一声の中に、おのれのほとんどをぶち込む。ほとんどとは俗念である。生死から恐怖、情、すべてである。叩き込んでそれを力とする。その叫びで相手は竦み立つ。一刀にすべてを賭け二刀は考えない。そういう剣なのだ。技の巧みさなどはない。それだけに怖ろしいと言え

る。

もちろん、兆次としては冷静でいなければならない。この場合、最も心すべきは間合いである。示現流の一閃は早い。太刀の迅さが命みたいなところがある。

浪人は、じりじりと間合いを詰めて来る。兆次は動かなかった。だが、筋肉は締ってくる。相手の動きにつれて動くことになる。

「キエーッ！」

と叫んだ。チエイストとは聞えなかった。裂帛の気合いである。浪人は間合いに入っていた。足が地面を蹴った。体が浮き上る。上段からの太刀が振り下ろされる。そのままならば、浪人の剣尖三寸が、兆次の肉に食い込むことになる。問題はこの三寸である。

三寸だけ退けばよい。だが、三寸がむつかしい。三寸の退きも術のうちである。退いたと見せずに退く。

上段から振り下ろし、刃を叩きつけるまでに、手首が視界をさえぎるときがある。その一瞬に退く。三寸（約十センチ）といえば、ほんのわずかである。敵が動き出したときに動きはじめる。それでどうにか間に合う。

剣尖が肌すれすれに掠過した。敵は斬ったと思い込んでいる。だが、剣尖は何にも触れない。空振りである。斬ったと信じているから、空振りに対する反応は鈍い。体は前に突っ込んでいる。それでいながら、踏みとどまろうと反応しかけている。

相手が踏み出したときから、兆次は右手の刀を振り上げにかかる。敵が空振りしたときには、兆次の刀は上段にある。空振りした浪人は隙だらけになっている。態勢を立て直すには時間がかかる。浪人は空振りしたと知って血走った目を剝いていた。

兆次は、振り上げた刀柄に左手を添える。そして、一気に斬り下げるのだ。相手の背丈は前につんのめっているだけ低くなっている。肩を斬るには低すぎる。斬るとすれば頭だ。額の中央に狙いをつけた。額から鼻の頭にかけた直線を斬り下げる。

切尖三寸が額の中に入った。それを顎の下まで斬る。斬り下げた一瞬は、何の変化もなかった。一呼吸してそこに一筋の赤い糸が浮いた。その赤い糸が太くなり膨れ上り、そしてそれが赤い滴りになる。パカッ、と音をたてて開くのはそのあとである。

兆次は、赤い糸を見たとき、背を向けていた。刀を拭いながら歩きだす。そんなときにホッ、と溜息などつかない。少しずつ息を吐き、ゆっくりと息を吸う。息苦しいときは、息を吸うことをせずに、先に息を吐く。すると息は自然に肺に流れ込んで来るものなのだ。

一丁ほど歩いてから、兆次は大きく溜息を吐いた。示現流の浪人より腕が上だったということではない。兆次のほうが人を斬り馴れていた差だろう。高崎の用心棒のころから、修羅場には馴れていた。これまでに人を三十人ばかりも斬っている。その違いだったのだ。

3

壬生の新撰組屯所――

通りから、路地を少し入ったところに屯所の門がある。門を入った右手の建物が主家で、そこが本部になっている。その奥が隊士の住居である。ここが手狭になって、通りの向いの前川邸を借りてある。

広い屋敷ではあるが郷士の家を借りたものである。隊士二百人となれば入りきれない。それで向いの屋敷を借りたのである。

兆次は主家の中に土方の姿を探した。

「副長！」

と声をかけた。

「ああ、阿比留さん」

土方を隅に呼んだ。

「先斗町に『小萩』という料理屋があるのですが」

と浪人が出入りしていることを話した。

「『小萩』ですか、阿比留さんの見た目では長州人なんですね」

土方は、懐中の財布を出して、一両を兆次の手に握らせた。

「阿比留さんには、明日も呑みに行ってもらいます。気付かれないように。あとは山崎くんにでも、探索させます」

「斬り込むときには教えて下さいよ」

「そうしましょう」

と言って土方は放れていった。

もちろん、いきなり斬り込んでも、長州浪人がいるとは限らない。調べてできるだけ多く集ったところを襲わなければ効果はないのだ。まず『小萩』の地形を調べることになる。『小萩』の裏はすぐに鴨川である。鴨川への逃げ道もあるはずだ。その辺を確めさせて、斬り込ませる。それが土方のやり方だ。

その夜から、探索係の頭である山崎蒸たちが動きはじめる。新撰組と言ってもやたらに斬って回るわけではない。探索の報告によって動くのだ。町人や商人に姿を変えて情報を集めて回る。それがすべて本部に報告され、それを基に命令を出すのは土方である。

それとは別に、隊別に毎日交代で市中見廻りに出る。表むきの目的は市中治安にあったのだから。

兆次は四番隊に属していた。組長は松原忠司である。彼は四番隊の部屋に入った。丸い火鉢が四個あって、それぞれに火鉢を囲んでいた。四番隊はいま十六人いる。見廻りにはこの十六

人が出かける。隊の中では兆次が年長であった。

「おい、阿比留、おまえ、酒と血が臭うぞ！」

と竹林という男が言った。もちろん、血の臭いなどそれほど珍しいことではない。今夜は三番隊が出動している。三番隊の組長は斎藤一である。

新撰組の中で一番人を数多く斬っているのは兆次だろう。もちろん兆次の場合は、攘夷派の志士だけではない。用心棒時代にかなり斬っている。剣術というのは道場剣法ではなく、人をいかに数多く斬っているかが価値があるのだ。人を斬るには呼吸ということがある。人を斬っていれば、その呼吸が体についてくる。場数を踏んでいるという言い方もある。

今日、示現流の浪人を斬れたのも、場数を踏んでいたからだ。あの叫びの中でも冷静でいられた。間合いを極めることもできたのだ。見切りもぎりぎりまで詰めることができた。いまは、それが当り前のことのようにも思える。もちろん、ここまで来ると、生死などたいしたことではないのだ。今日を生きていても明日は、あっさりと誰かに斬られて死ぬ。そういう思いがある。そういう覚悟が、快い緊張感となっている。

だから、刀を抜いて斬り合うことが苦痛ではなくなっているのだ。京都ならではのことなのだ。そして兆次はこの緊張感が嫌いではなかった。副長の土方は、兆次のこういう生き方を知っている。だから、ときには酒代を渡すのだ。

兆次は、これまでに、三度このような情報を持って来ている。それが三度とも当ったのだ。

翌日——

兆次は、島原に足を運んだ。遊女を買う気になったのだ。懐中には昨日、土方にもらった一両がある。

島原の大門を入る。大門といってもそれほど大きな門ではない。島原の四方は堀によって囲まれている。遊女たちが逃げ出さないようにだ。

遊廓に上った。よい女を選ぶほどの金はない。適当にみつくろって、女の部屋に入る。一発すませばいいようなものだが、ただ女の体に吐きだすだけではむなしい。それで酒を運ばせた。聞かないのに女は身上話をはじめる。女は三つか四つか自分の身上を持っている。その中から客に合った話を一つだけ選び出して話すのだ。もちろん、これも客への奉仕である。

そうなると兆次も自分の身上を話したくなる。もちろん、他人にその話はしたことはない。両親がどんな人だったかも知れない。生まれて間もなく藁舟に乗せられて流された。間引きである。たいていは舟は沈んでしまう。運がよければ誰かに拾われて生きのびることになる。たいていは沈んでしまうのだそうだ。

兆次を拾ったのはやくざの用心棒の女だった。運よく育って、四歳のころから、用心棒に棒振りを教わった。棒振りが体に合っていたということもある。十二、三歳のころにはいっぱしの使い手になっていた。長脇差を振りまわせば、大人にも負けなかった。十七歳のときには、

地元では用心棒で通用していた。十八歳のとき義父の用心棒が喧嘩で死んだ。そのあとに用心棒として雇われた。

義母となった女が読み書きは教えてくれた。それで文盲にはならずにすんだ。無惨な半生である。十七、八のころにすでに二十人近い博徒を斬っていた。地元では人斬り兆次で通っていた。

高崎にも、勤王の志士がいた。近郷の郷士や百姓が、志士と称して何人も村を出ていた。その一人が高崎にもどって来て、同志をつのった。江戸で浪士を集めている。天子さまのために、国のために働いてみないか、と言う。兆次はその誘いに乗った。一生、やくざの用心棒ですごすのはつまらなかったのだ。

浪士組が江戸で結成された。それは清河八郎の浪士組だったのだ。京都に行き天子さまの護衛をするという話だった。

勤王とか攘夷といっても、兆次にはよくわからない。兆次だって一応は勤王の志士だったのだ。新撰組に応募してくる浪人たちだってほとんどは、勤王の志士のつもりでいる。なにも、討幕を叫ぶ攘夷派志士だけが志士ではないのだ。

遊女を抱き、遊女の体の中に二度放出した。それでいくらか体は軽くなった。男は女を抱かないでいると情念がたまる。女の体に放出したからと言って情念まで吐露したわけではない。遊女も馴染みにならなければ、情が絡むところまではいかないのだ。何かもやもやしたものが

残った。

足を先斗町に向ける。料理屋『小萩』で酒をのむのが目的だった。土方にもらった金の半分は使っていた。呑みたいときに酒を呑めるという身分ではなかった。

『小萩』に入った。お藤が、お上りになって、と言った。座敷と三和土では値段が違う。出される料理も異る。まだ残っている金で間に合うはずだ。

座敷に上った。このほうが奥座敷をうかがうこともできる。座敷に上って食卓につく。衝立で一方を区切られる。いままでは気付かなかったが、座敷では若い女が三人いて、交代で酌をしに来る。たしかに料金が高いだけのことはある。

これでは、いま少し土方から金をもらわなければならんなと思う。

酒と料理が運ばれて来て、若い女が酌をする。丸い体つきをしている。京女らしい風情だ。こういう女を囲える身分になりたいと思う。近藤や土方は、休息所というのを持っていて、そこに女を囲っているのは知っていた。近藤局長も意外に女好きのようだ。鬼のような顔をしているが、女には優しいのかもしれない。土方はもともとが女好きである。

遊女ではどうにもならん所がある。もともと女を買うということは好きでなかった兆次だが、今日は背に腹はかえられない、というところがあった。金を出しただけのことしかなかったのだ。遊女を抱いただけに、かえって体が淫らになっていた。おのれを忘れるほどに酔ったなら、そこにいる若い女を押し倒してしまうかもしれない。もっとも人斬りは習慣としてそこまでは

酔わない。おのれを忘れては、人斬りではなくなる。

高崎では人斬りであった。そして京都でも人斬りなのだ。生まれつきの人斬りだろう。四歳から棒の振り方を教わったのだ。そこいらの道場で竹刀稽古をして来た志士たちとは違うのだ。人を斬りながら生きて来た。一人斬っていくら、という時代もあったのだ。

隣りの席の浪士が、昨日、高瀬川のそばで三人の志士が殺されたことを話していた。もっとも人が斬死するのは日常茶飯事でもあった。

「新撰組か」

「いや、相手は一人だったそうだ。一太刀ずつで死んでいた。凄い使い手らしい。一人は雁金に斬られて川に落ちた。一人は顔面を斬られて顔が二つに割れていた。一人はのれの臓腑を抱いていたという」

新撰組では二十人近くが寄ってたかって斬る。そのことは京都では知れ渡っていた。たとえ一人でも二十人が囲んで斬る。これは土方のやりかたでもあったのだ。

「新撰組でないとすれば何者だ」

「近ごろは、幕臣の京都見廻組というのも動いているそうだ。旗本の中から、腕の立つのを選んで組を作ったようだ」

「すると、その見廻組なのか」

「さあな、だけど、旗本の中にも腕の立つのはいるだろう。旗本八万騎というからな」

最近、見廻組というのができたとは、兆次も聞いていた。人数が足りないので、半分隊士をよこせ、と組頭の佐々木只三郎が近藤局長のところへ言って来た。

この佐々木只三郎は、浪士組の頭であった清河八郎を斬った男である。直参旗本四百石、近藤たちとは身分違いである。見廻組頭となって、千石になったという噂もあった。

「そう、見廻組の一人かもしれんな。だが、一人は神原泰之助という薩摩浪人だったという。示現流をかなり使ったという。それが一太刀で死んだのだからな」

「ますます京都も物騒になる」

「それは仕方ないだろう。幕府を潰すまではな」

兆次は、酒を呑みながら苦笑した。こやつらを待ち伏せて斬ろうか、と思う。

このような激派浪士というのは、すでに勤王の志士ではなくなっている。ただ天皇の攘夷を利用して、ただ幕府を倒したいだけなのだ。むしろ勤王は新撰組かもしれない、と思っている。

いまや、これらの志士たちは、勤王でも攘夷でもない。ただ討幕の志士なのだ。八月十八日政変で、この志士たちは、天皇にも裏切られているのだ。

それでも、京都の人たちは、新撰組に斬られる薩、長、土の志士たちを勤王の志士と思い込み、味方しているのだ。

4

「阿比留さん」
と土方副長が兆次を呼んだ。
「今夜、『小萩』に斬り込みます。今夜は浪人がかなり集まるようだ、とさっき山崎くんが知らせて来ました。二番隊の永倉新八が斬り込みますよ。約束だから、阿比留さんには教えますが」
と言った。新撰組の中には密偵が入り込んでいる。土方にしてからが、組の中の密偵を探し出せないでいる。
「むしろ、知らせたほうがいいんじゃないんですか、知らせてやれば『小萩』に走りますよ」
誘い出しておいて斬ったほうが早い。土方は、ふむと唸った。
「浪士は永倉さんにまかせておけばいいでしょう。わたしが『小萩』の前で待っています。走って来るものがあれば斬りましょう。一人や二人ならば逃すことはない、と思いますがね。一石二鳥じゃないですか」
「斬りたくはない。ここへ連れて来て喋らせたい」
土方は一石三鳥を狙っているのだ。

「そうですね。阿比留さんにお願いしますか。隊士を二人つけます」
その隊士二人が密偵を縛って屯所に連れて来るのだ。兆次は、にやりと笑った。土方は財布を出すと二両を兆次の手に握らせた。
「阿比留さん、あんたは、山崎くんの組に入ってもらう。そのほうがあんたの性格に合っているようです」
「ですが、わたしには変装はできませんよ」
「その月代をのばしてもらいます」
「なるほど、そのようにしましょう。酒がのめるだけましですね」
探索方は、金が使えると聞いている。人斬りには似合った仕事かもしれない。隊士が二人呼ばれた。信用できる男たちだろう。若田栄吉、吉村新太郎の二人だった。この二人には事情は話してない。
土方は屯所内に巧みに『小萩』斬り込みのことを流すに違いない。すると、屯所を抜け出す者が必ず出る。
兆次は、若田、吉村の二人を連れて屯所を出た。もちろん、先に着いていなければならないのだ。二番隊はすでに市中見廻りと称して屯所を出ている。そして、すでに『小萩』の回りに隊士を配しているだろう。『小萩』に斬り込めば、浪士たちは鴨川へ逃げる。鴨川にも半分は配しておかなければならない。それは兆次の仕事ではない。永倉がやることだ。

料理屋『小萩』に着いた。先斗町は提灯の灯りで明るい。いわゆる紅灯の巷である。明るさがあれば暗さもある。兆次は暗い闇にうずくまった。暗い中には鬼が潜む。兆次は鬼になっていた。

誰がやって来るか楽しみである。斬るわけにはいかんから、棟で叩くことになるだろう。一刻も早く知らせないと、浪士たちは新撰組の餌食になってしまう。急いで来るに違いない。

待つまでもなかった。一人の男が走って来る。五番隊の正木征三郎という隊士だった。左右をキョロキョロと見回す。すでに三番隊が配されていることを知っているのか。

兆次は闇の中からヌーッと出た。正木はギョッと足を止める。

「正木さん、珍しいところで会いましたね。そこいらで一杯やりませんか」

「阿比留さん」

と言っておいて、正木は刀柄に手をかけた。

「おのれ、罠だったのか」

「罠ではありませんよ、永倉さんが『小萩』に斬り込みます」

正木は刀を抜いた。同時に兆次も抜いていた。正木だって新撰組に入っているのだから、刀術は心得ている。

「わしを斬らないと『小萩』には入れない」

正木は、いきなり上段に振りかぶった。兆次が躱せば、そのままつっ走るつもりなのだ。兆次も上段に構えた。

「ギエーッ！」

と叫んで斬り込む。その刃を棟ではね上げた。キーンと金属の叩き合う音がした。正木の刃をはね上げておいて、左肩を打った。

「うっ！」

と声をあげた。棟で肩を打たれても一瞬息が止まる。手もとにとび込み、刀をもぎ取る。若田と吉村がとび出して来て、刀の下げ緒で正木を縛り上げる。

「よろしく」

と言って兆次は歩き出した。むこうから五人の隊士が歩いて来る。浅黄色に袖口を白い山形に染め抜いた羽織を着ている。一目で新撰組とわかる。永倉新八がチラリと兆次を見た。人々が怖ろしげに道を空ける。そのあとから更に五人が歩いてくる。合わせて十人が表から斬り込む。あとの十人は鴨の河原で待ち伏せているのだ。

「新撰組だ、御用改めである」

背後に叫び声を聞いた。兆次は、ゆっくりと三条通りへ向って歩く。斬り合いは三番隊にまかせておけばよいのだ。三条通りまで来ると、三条小橋の手前から木屋町通りへ入る。高瀬川沿いの道である。その通りを上る。

先斗町からこの木屋町通りへは、幅二尺の細い路地が通じている。そこから志士の一人が走

り出て来た。後から新撰組二人が追って来る。

兆次の目の前で斬り合いになる。兆次は黙って見ていた。志士は斬り立てられ、体のあちこちを斬られ血まみれになっていく。体内の血を失い、次第に気力を失い、新撰組の太刀を浴びて崩折れた。とどめもささずに隊士二人は走り去る。

兆次は二条小橋のほうへ歩いていく。後から志士が走ってくる。兆次は振りむいた。志士と目と目が合った。志士は兆次に狙いを定めたようだ。兆次は向き直り刀を抜いた。志士は刀を振り上げ走り込んで来る。刀を叩きつけてくる。兆次は余裕を持って体を左へ開いた。同時に刀を水平に薙いだ。

志士は前につんのめっていく。肩の上にある首が揺らいだ。顔が上を向いた。同時に咽首のあたりがパクリと裂けた。そこから音をたてて血が噴き出し、首が背中のほうに転り落ちる。拍子斬りという。首と刃が双方からぶっつかり合う。その力は二倍にも三倍にもなるのだ。ぶっつかり合えば咽笛に刃は抵抗なくめり込む。そして抵抗なく抜けるのだ。

二条小橋のたもとに女が一人立っていた。兆次は橋の下に志士が一人逃げ込んだような気がした。橋の下を覗き込もうとすると、女が目の前に立った。お藤だった。お藤は兆次に向って両手を合わせたのだ。

「阿比留はん、見逃しておくれやす」

お藤は橋の下の志士を逃したいのだ。あたりを新撰組が走り回っている。

「好きな男か」

「はい」

「羨ましいな、お藤さんに、命懸けで守られるいい男が」

「見逃しておくれやす。見逃しておくれやしたら、何でもさしてもらいやす」

「わしに、抱かれるか」

お藤は、目を大きく見開き、頷いた。兆次は、刃の脂を拭った。その間に新撰組は走り去った。

「逃してやれ！」

「おおきに、ご恩は忘れまへん」

お藤は小石を拾って川に投げ込んだ。ポシャンという音が合図だったらしく、橋の下の水が騒ぎ、黒い影が橋のむこうに出た。そして川から這い上り、むこうへよたよたと走っていく。冷めたい水の中にいて、足が痺れたのだろう。転んでは立ち上り、影は小さくなっていく。

この志士が、長州の桂小五郎だったことを兆次は一生知ることがなかった。

5

三日後——

兆次は、河原町通りのうどん屋にいた。河原町通りは、高瀬川の一本西の通りである。当時のうどん屋そば屋というのは、手軽な出会いの場所でもあった。

奥座敷に入れば、酒も出してくれる。店の者に『小萩』のお藤を呼びにやらせた。お藤は志士を助けたくて、見逃しておくれやす、とは言ったものの、来るかどうかはわからない。嘘も方便ということがある。おれなどに抱かれる女ではない、という思いがある。来なくてももともとだ。

もちろん、料理屋『小萩』は店を閉めていた。店の中は血の海だったろう。八人の志士が新撰組の手によって殺されたという。捕えられたのが九人。四、五人が逃れた、と聞いた。攘夷の志士たちは、あちこちに集って会合を開いている。そこを新撰組に狙われるのだ。

「お連れさまがお見えどす」

と店の者の声がした。間があってお藤が姿を見せた。

「来ないか、と思っていた」

「いいえ、阿比留はんは、怖ろしい人どす。逃げたらどんな目にあうか、わかりしませんよって」

新しい酒膳が運ばれて来て、お藤が酌をする。

「阿比留はんが、新撰組やったとは、知りへんどした」

しなやかそうな体つきだ。抱き寄せてそこに押し倒せばいい。兆次は苦笑した。それができないのだ。女は抱かれるためにやって来ている。抵抗はしないだろう。裾をめくって肌を撫でる。そして体を重ねるだけでよい。だが、それだけでは島原の遊女と変らないではないか。だが、お藤に情を求めようとしても無理だろう。少なくとも敵同士である。お藤は死んだように体をまかせるだけのはずだ。よがり声もあげず、ただじっと兆次が放出するのを待っているだけだ。

それだったら、まだ形だけでもよがってみせる遊女のほうがましだということになる。人斬りの兆次としては、気の弱いことだった。

抱かないですませれば、抱かなかったことへの悔みを生ずる。抱けば抱いたでむなしさが残るに違いない。

「逃げた浪人は、お藤さんのいい男か」

「へえ、大事なお人どす」

ただ、盃を重ねる。銚子が空になると、お藤が手を拍いて、銚子を追加させる。

兆次は女の情に飢えていた。ほんの一瞬の快楽ではなかった。快楽だけならば、女を手込めにしてでも、目的は達成できる。だが、女の情というのは、簡単には得られないのだ。

酒が運ばれて来て、また酌をする。それを呑む。兆次が酌をしてやればお藤ものむ。手を出せば、目の前に美肉がある。だが、手が出ない。あるいはお藤に気後れしたのか。こういう女と、しんねりむっつり情を交わすことができれば、どれほどいいだろうと思いはする。だが、

京女の情はそんなに安っぽいものではないだろう。

「新撰組は嫌いか」

妙な話題を持ち出す。いらぬことだ。

「嫌いどす」

「新撰組は、京の治安を守っている」

いわずもがなのことである。いま、お藤と兆次の間には関係のないことだ。

「京の人は、みんな新撰組が嫌いどす」

ただ人を斬るだけの集団である。好まれているわけはないのだ。壬生浪、みぶろ、と言われている。新撰組の姿を見ただけで、京の人たちは逃げ出すのだ。

「そんなことは、どうでもよいことだった」

「どうおしたのどす」

「わしに抱かれに来たか」

お藤は笑った。当り前のことだ。ただ、酒の相手をさせるだけに呼び出したのではない。お藤の情夫を見逃してやった。その報酬を求めるために呼び出した。もちろんお藤も心得ている。

兆次は、ごろんと横になった。

「どうしたんどす」

「酔ったようだ、眠くなった」

お藤はもじもじとした。お藤としては、押し倒され、早くすましてもらったほうがよかったのかもしれない。それで借りは返したことになる。

「お藤さん、もう帰ってよい。ご苦労だった」

「ほんとによろしいんどすか」

「帰ってくれ」

「お気の弱いお人どすな。そんなら、帰らしてもらいます」

と腰を浮かせる。そのとき兆次の股間がジーンと疼いた。だが、それにも耐えて、お藤の姿を見送った。同時に悔みが走る。抱いてしまえばよかったじゃないかと。走り出て、お藤を呼びもどしたかった。なぜ、お藤を帰したのだ。もったいないことをして、とおのれを責める。起き上って、冷めた酒をのむ。人斬りというのは、どこかで繊細なのだ、と呟いてみる。あるいは臆病なのかもしれない。

金を払って店を出た。とたんに視界で影が動いた。

「そういうことだったのか」

と自嘲する。お藤が手を打っていたのだ。新撰組隊士をここで見逃す手はないのだ。左右に首を回した。七、八人はいるようだ。囲んで斬るつもりだろう。七、八人はゆっくりと距離を詰めて来る。

いまのうどん屋にも裏口はあったはずだ。兆次は店の中にとび込んだ。三和土が裏まで続い

ている。三和土を走って裏口からとび出した。そのまま路地を走る。高瀬川に出る。小さな石橋を渡ると木屋町通りである。三条通りか四条通りを回り込むには時間がかかる。

浪人たちが路地を走ってくる。石橋のたもとで兆次は刀を抜いた。石橋は一人しか通れない。橋のむこうで浪人が足を止めた。石橋を渡れば、兆次の餌食になる。

三人の浪人がそこに並んだ。他は別のところへ回り込んだらしい。兆次は橋を渡った。一人が上段から斬りつけてくる。間合いが決っていなかった。剣尖が胸のあたりを掠める。兆次は横一文字に薙いだ。両眼から白い水のようなものが飛び出すのを見た。

「わあーっ！」

と叫び、刀を投げ出して両手で顔を覆う。後の浪人が浪人の尻を蹴った。両眼を裂かれた浪人は高瀬川に転り落ち、水音を立てた。川の水は冷めたい。

兆次は背を向けて逃げる。浪人が追ってくる。彼は振りむきざまに刀を薙いだ。思いきり振った。剣尖がぐーんと伸びるのがわかった。切尖三寸が胸の中に埋まった。浪人は目を剝いて竦み立ち、おのれの胸を見る。チロチロとどす黒い血が流れ出し、そしてバッと血が噴き出した。心臓を裂いたのだ。

兆次は視線を回した。左右から二人ずつ走って来る。兆次は振り向いた。石橋を渡って来ようとした浪人が足を止めた。橋は血で濡れていた。その血に辷ってひっくり返り、そのまま高瀬川に落ちた。

すでに三人が姿を消した。あと四人だ。兆次は、右手の二人に走り寄る。二人は足を止めて、刀を正眼に構えた。それにかまわず間をつめる。その浪人は思わず刀を振り上げる。振り上げたその刀の下に頭を入れる。刃の下をくぐるというのは勇気のいることだ。これは勇気ではなく呼吸だろう。

刃を相手の腹に押し当てた。そして体当りする寸前に右手を思いきって右に引く。体も自然に右に移動する。衝突する寸前にお互いの体はずれていた。

浪人は兆次を追い振り向こうとする。体がよじれた。振り向こうとするのは上半身だけである。腹の切口もよじれた。下半身は動かない。そこで自分の腹が大きく裂けていることに気付く。その腹から大きな蛆のような内臓がはみ出た。その内臓が赤い血にまみれていく。

もちろん、兆次は次の浪人に刃を向けていた。上段から一閃する。刃が音を発する。浪人は一歩退った。だが、剣尖がぐーんと伸びていた。ほんのわずかに剣尖が額を削り、そして着物の胸元を裂いていた。届かないはずの剣尖が届いていたのである。

刃には加速度がつく。その加速度が遠心力を生むのだ。それで剣尖が二寸も三寸も伸びる。眉間に血滴が浮いた。それがたらりと流れる。浪人は刀を正眼に構えて、一歩二歩と退る。その間だけ詰める。浪人は青ざめ、体を堅くしていた。ただ守りの構えである。

これでは防ぐだけで斬り込めない。兆次は片手で突いた。半身にして片手で薙ぐ。それだけ剣尖は伸びる。両手と片手では刃の長さが違ってくる。腕を手首を削られる。

残った二人が走って来ているのは知っていた。肩を削った。ついでに鼻の頭も削った。この浪人は、すでに戦意を喪失している。兆次は二人に向って走った。

博徒の喧嘩と同じである。むしろ博徒のほうが面倒である。長脇差を振りまわしながら押したり引いたりが巧みである。刀を片手であつかうのを知ったのは、博徒の喧嘩からであった。

二人は足を止めて、刀を正眼に構えた。さっきの浪人は気力を失い坐り込んでいた。気力を失えば、すでに斬り合いというのはできない。

兆次は二人の浪人に刀を大きく振ってみせた。剣術にはないやり方である。前に、威の位、移の位、写の位の三位を述べた。刀を振り回すのも威の位である。威の位にかかれば体が堅くなる。また体の大きさも一周り小さくなるのだ。斬って出ようという気迫が失せてしまうのだ。

おのれのこういう姿に満足していた。これが阿比留兆次なのだ。お藤の前でもじもじしていたおのれがいじましい。

「うおーっ！」

と吠えた。浪人二人はますます小さくなる。

「来い、斬って来い！」

七人で囲んで兆次を斬るつもりだったのだ。それがいまはたった二人になっている。もちろん、七人は兆次がこれほどに逃げまわるとは思っていなかったのだろう。

「おのれ！」

ともう一度吠えてみた。お藤に対してである。うどん屋から兆次の使いが来たとき、おのれの体を狼に与えて、兆次を討ち取ろうと手配したのだ。そういう女に情を求めようとしたおのれが愚かだった。

もちろん、この二人も逃すつもりはなかった。怒りはそのまま力になる。やくざが長脇差を振り回すように刀を振り回した。二人とも足を摺って退く。道場剣法でいくらか使えてもこういうときには全く役に立たないのだ。

兆次には隙がありそうで斬り込めないのだ。道場でならその隙につけ込めるのだろうが。

「おのれ、おのれ」

と叫んだ。お藤の顔がちらついた。

一歩大きく踏み込んだ。浪人は思わず刀を振りかぶる。その手首を裂いた。ワッ、と叫んで刀を取り落す。そこを雁金に斬った。

二人目が逃げようとした。

「わっ！」

と声をかけた。足が止まり動かなくなる。剣尖を小さく払った。剣尖が大きく揺れる。そこを、右手首を斬り落した。右手首が刀柄にぶら下った。

そこまでだった。

「お藤さんによろしく言ってくれ。そのうちに会いに行くとな」

懐中から布を出し、それで刃を拭いはじめる。懐紙はなかった。布でていねいに拭ってその布を捨て鹿のなめし皮を出した。それで磨くように拭いあげる。これで脂もとれるはずだった。

木母寺にて斬る

1

慶応四年五月十四日——。

上野の山には、三千人の士がいた。彰義隊である。彰義隊ははじめ一橋家の士たちによって企てられたという。それに直参旗本に各藩の有志たちが集まった。雑然とした集団である。烏合の衆である。

隊士の中には剣士が多かったが、戦争に剣は役に立たないのだ。もちろん彰義隊にも鉄砲がないわけではなかったが、たいてい旧式の物ばかりである。

鉄砲は江戸城の武器倉から、会津の松平容保が持ち出したあとである。それでなくとも薩長軍は新式の鉄砲を備えていた。特に威力を発揮したのはアームストロング砲である。それに薩長軍を指揮したのは大村益次郎であった。

彰義隊は、頭が池田大隅守、小田井蔵太、頭並が菅沼三五郎、春日左衛門、天野八郎、川村敬三らであるが、この人たちは戦争などやったことがない。

彰義隊が三千人、薩長軍も三千人、人数は同じだが、鉄砲と指揮官が違った。大村益次郎は、幕府の長州征伐のとき、幕府軍と戦っているし、戦争好きでもあった。大村は五月十四日のこの日すでに作戦計画書を書いていた。

頭と頭並が集って軍議を開いたが、作戦などというものはなかった。ただ薩長軍の攻撃を待つだけである。待つだけでは彰義隊は負けることはわかっている。むしろこの夜、江戸に駐屯している薩長軍に夜襲をかけるべきだった。夜襲ならば剣も役に立つのだ。

それをどうしてやる者がなかったのか。軍議でそれを言い出す者がなかったのか。

その日、江戸は雨が降っていた。彰義隊は暗かった。その中に酒匂十三郎がいた。十八番隊の隊士である。組頭は西村賢八郎である。西村は直心影流榊原鍵吉の高弟である。

酒匂十三郎は、馬庭念流をよくした。だから彰義隊に参加した。この年に二十八歳になっていた。小身だが旗本でもあった。

旗本たるもの、薩長の横暴を見逃しておけぬ、というのが参加の理由だった。

「おい、十三郎、どうした」

と声をかけて来たのは鳥飼甚兵衛だった。鳥飼もまた十三郎と同じ百二十石の旗本である。十三郎より二つ年上の三十歳である。

薩長軍が江戸に進軍して来て、江戸城を無血開城した。その時点で家屋敷はなくなっていた。つまり、旗本の家屋敷は、徳川家より借用していたものだったからである。

家族は江戸郊外の知り合いの家に預けていた。いきなり禄と住む家を失ってはどうしようもないのだ。

十三郎は好んで彰義隊に入ったのではなかった。人に誘われて入った。上野の山を死に場所と決めたのだ。死ぬと決めればどこでもよかった。いたるところに青山ありだ。

「十三郎、ついてこんか、おぬしの腕を借りたい」

「よかろう」

と言って立ち上った。何をやりに行くのかはわかっていた。薩長兵を斬るのだ。江戸入城以来、薩長兵は市中見廻りと称して、一隊五人ずつが、江戸の町を歩き回っている。

江戸は、町々に木戸があった。この木戸で江戸の治安は保たれていたのだ。それが薩長によって取り払われた。とたんに治安は悪くなった。盗賊がこれ幸いと横行する。町奉行所は機能していなかった。商家に押し込み金を奪って逃げる。木戸がないからどこまでも逃げられる。

江戸の治安を預るのは、いまは薩長軍だった。ところがこの薩長軍、盗賊よりも悪い。江戸

の庶民を脅し、物を奪い、威張りちらし、美い女とみれば手込めにする。

だが、江戸っ子と言われる人たちは空元気だけで意気地がない。薩長兵に対して何もできないのだ。それで兵たちは図に乗る。

そういう薩長兵に堪忍袋の緒を切り、人斬りをはじめる侍たちが出て来た。だが、一人や二人ではどうにもならない。何人か斬ったところで逆に討たれてしまうのだ。

腕があっても、呼子を吹けば他の薩長兵が駆けつけてくる。囲まれて逃げられなくなるのだ。

十三郎が甚兵衛と歩き出すと、三人が出て来て肩を並べた。甚兵衛が先に誘っておいたのだろう。五人は上野の山を出る。上野広小路には、いつものように人が往来していた。もちろん、いつもに比べるとその数は少ない。

五人はばらばらになって歩く。敵をみつけると集るのだ。呼子を吹く奴を先に斬れ、と甚兵衛は言った。

この日は雨が降っていた。濡れても歩けるくらいだ。甚兵衛といま一人が番傘をさしていた。十三郎は濡れながら歩く。家の庇があればその下を歩く。

十三郎は、千恵のことを考えていた。祝言を上げてからもう八年になる。十三郎が二十歳、千恵が十八歳だった。肌の色が白く、柔い肉をしていた。それほど美形というのではないが、いい女だった。

その千恵が二カ月ほど前、姿を消したのだ。十三郎はあちこち探し回った。相手はほぼわかっていた。同じ旗本で浮田平四郎という。幼馴染だと言っていた。十三郎も二、三度会っている。

当然、その平四郎も姿を消していた。二人で駆落ちしたのか。どさくさにまぎれてという言い方があるが、まさにどさくさである。

徳川家が崩壊した。高禄の旗本たちは、知行地へ逃げていく。当然、江戸には住んでいられない。家屋敷は自分のものではないのだ。人夫を雇って家財道具を運び出す。一時、江戸は火事場のようにごった返していた。

江戸開城は四月十一日。この年は四月が二度あった。つまり旧暦から新暦に変ったのだ。だから、千恵がいなくなったのが四月でも、二カ月前ということになる。

この年の九月八日に、明治元年となる。世の中が激しく動いていた。

江戸及び江戸近郊で賊が出没した。江戸を逃げ出す旗本が狙われた。高禄旗本は金を持っているし女たちが一緒である。何十人の旗本が賊に襲われて死んだことか。

十三郎は、千恵に未練があった。いい女だった。肌の色は白く、しなやかな体でよく反応した。千恵はよく十三郎を求めた。まぐわいが好きだったのだろう。十三郎だって淡白というのではなかったが、千恵の要求にはついていけなかった。

旗本の娘なのにどうしてこのように淫らなのかと思った。祝言の夜、千恵が未通女だったのかどうかは知らない。いま思うとすでに男を知っていたのかもしれない、と思う。

未通女かどうかを確める方法を知らなかったし、またそのようなことは気にもしていなかった、というよりも、頭から未通女だと思い込んでいたのかもしれない。

浮田平四郎とできたのはいつころからだったのか、十三郎は、千恵に逃げられるまで、ついぞ知らなかったのである。あるいは十三郎が祝言を上げる前からだったのかもしれない。祝言を上げる前に千恵は女になっていたのだろう。

三カ月ほど経ったころから、千恵は声をあげ悶えはじめた。女とはこういうものなのかと思っただけである。あるいは三カ月はじっと歓喜をこらえていたのかもしれない。

妻の姦通に全く気付かなかったというのもうかつなことだった。千恵は寺詣と称してよく外出していた。寺詣と言いながら、その度に男に抱かれていたのだろう。

浮田平四郎も千恵も、十三郎の愚鈍さを笑っていたのに違いない。女房は姦通などしないものだと思い込んでいた。だから思ってもみないことだったのだ。

少しでも疑ってみれば、その変化はわかったはずである。男に抱かれて来た日は、それなりに変ったところがあったはずなのだ。千恵を信じていた。信じるということは何も見えなくなることなのだ。

自分のうかつさに腹が立って来る。いま思えば、いろいろと思い当ることがある。思えば、寺詣からもどった夜などはたいてい求めて来た。

抱いてみると妙にこなれていたりする。まだ触れない先にはざまが潤んでいたりする。そこに男の名残りがあったわけではないのだろうが、男に抱かれたあとは潤みやすい。刺激に馴れていたのだ。

女は歩かせるに限る、という言い方があった。女は歩くと練れるという。当時は、十三郎は、なるほどそういうことかと思ったに過ぎない。

平四郎との噂は、ちらちらと聞いたことがあった。だが、まさかと思い無視した。つまり信じていたのだ。信じるというのは愚かなことである。

旗本の女房が姦通するなど、ましておのれの妻が、という思いがあった。

2

下谷・御徒町というあたりである。町はひっそりとしていた。このあたりも旗本の屋敷がずらりと並んでいる。その中に大名屋敷がポツンポツンとあった。いまは人も住んでいない。住んでいた人たちは立ち退き、あとには野盗や浮浪者が入り込んでいた。

空家ばかりである。五人はそれぞれに歩いていく。十三郎はしんがりを歩いていた。前を歩くのはどこかの藩士だろう。名前も聞いていない。名乗り合っても仕方のないことだ。

先頭を歩いていた甚兵衛が刀を抜いた。それを見て十三郎は走った。他の三人も刀を抜いて走っていた。

角を曲る。むこうに薩長兵がいた。ダンブクロ（幅の広いズボン）をはき、ボタンのついた洋服を着、腰には白い晒を巻いて刀を差している。これが薩長兵の服装だった。

甚兵衛が刀を振り上げ斬りつける。意外なことが起った。敵兵が、キェーッ！　と叫んで甚兵衛に斬りつけた。それを彼は刀で受けた。

刀が折れてとんだ。そして甚兵衛は頭を割られたのだ。敵の刀を受けて、その次に甚兵衛には技があったのだ。敵兵を斬るつもりが先に斬られてしまった。

それを見て、三人の仲間は足を止めた。薩長兵は、あとの四人とも刀を抜いた。三人は踵を返すと逃げ出した。

残ったのは十三郎一人になった。逃げるきっかけを失ってしまった。敵兵五人はゆっくりと歩み寄ってくる。斬るつもりが逆に斬られては世話ない。

甚兵衛を斬った敵兵は薩摩人だろう。上段からの一閃は示現流だろう。もっとも十三郎は示現流の太刀というのを見たことがなかった。示現流は初太刀にすべてを賭ける。それに刀は重ねが厚く幅も広い。これを受けるというのは無茶だった。

十三郎は刀を抜いて右手に下げた。彼はまだ、人を斬ったことがなかった。つまり道場剣法である。相手を斬れるかどうかはわからない。だが、死ぬ覚悟はできていた。刀を抜いて怯えても仕方がないのだ。

刀を正眼にも構えなかった。正眼は守りの構えである。守りに入っては人は斬れない。

薩兵は間合いをつめてくる。腕には自信があるのだろう。刀を上段に振りあげて、

「キェーッ！」

と叫んだ。兵は目を剝いた。そこにいるはずの十三郎の姿がなかったのだ。姿が消えるわけはない。兵が刀を振り上げかけたとき、十三郎は自分から転んでいた。

刀を振り上げるとき、一瞬、両腕が視界をさえぎる。視界をふさがれて十三郎が転ぶのが見えなかった。

十三郎は転びながら敵の足を薙いでいた。

「ギァッ！」

と叫んだ。次は敵兵が転ぶ番だった。右足が膝の下から切断されていた。十三郎は立ち上ると二人目に剣尖をつけていた。

二人目が刀を振り上げる。それにかまわず敵の左肩を雁金に斬り下げていた。まずとんだのは、敵の左手首だった。刀柄にぶら下る。左肩がパクリと割れた。雁金とは、肩甲骨のことを言う。これを貝骨と言った。この貝骨を垂直に裂く技である。これを雁金に斬り下げるという。

鎖骨から肋骨を斬り下げる。肋骨を七、八本も斬っていた。斬られた肉は収縮する。肩がパックリ開いたとき、白い肋骨の端が見えていた。肉は収縮しても骨は収縮しない、それで切断された肋骨が突き出て見えるのだ。

ブワッと空気が洩れた。肺が裂けたのだ。肉は白いものだった。その白い肉が血で赤く染ま

っていく。

三人目が、キェーッ、と叫んだ。刀を振りあげる。胴はがら空きである。人はいざというとき、刀を振り上げるものだ。刀を振り上げなければ、相手を斬れないと思い込む。

十三郎は刀を左へ引き寄せて体を寄せた。そして刃を敵の腹に当てると右へ引く。引きながら、体を右へ移動させる。抜き胴である。腹が裂けた。だが、当人は気付いていない。

よく研ぎ上げられた刀で斬られると、痛みを感じないものだ。その男は再び刀を十三郎に向けた。

「腹、腹！」

と兵の腹を指さしてやった。えっ、と自分の腹を見た。黒い軍服が破けてぶら下っていた。そして、浅黒い肌が見え、その腹がジワリと口を開くところだった。

「ワッ！」

と目を剝いた。そして刀を投げ捨てると、両手でおのれの腹を抱き、膝を折って坐り込んだ。

ワーッ、と叫んで、残った二人の敵兵は逃げ出した。十三郎は刀を下げてつっ立っていた。何だか、ぼんやりとしていた。人を斬ったのははじめてだった。簡単に斬れたものだと思う。

ぶるる、と体を震わせた。自分で生き残ったことに気付いたのだ。妙な気分である。

雁金に斬られた敵兵は死んでいた。右足を斬り落された兵は、刀の下げ緒を解いて、血止めをしていた。下げ緒を二つに切って一本を膝の上に巻きつける。その紐の間に刀の鞘を押し込

み、一回転させる。

何度も、ギャッ、ギャッ、と叫んでいた。激痛がある。気丈な男だった。そうしなければ血は止まらないのだ。生きのびるにはそれしか方法がなかった。くるりと回した鞘のもう一方の端を腿のあたりに結びつける。そこで兵は気絶した。気がゆるんだのだろう。

坐り込んだ兵は、ずるずると這い出ようとする臓物をしきりに押し込んでいた。両手は赤く染まっていた。臓物はぬめるのだ。しきりに外に出ようとする。折り畳まれて腹の中に収まっていたのだ。それが出口を求めて外に出ようとする。

十三郎は刃を拭い鞘に収めると、気絶している兵の腰に巻いていた晒を解いて持って来ると、それを拡げて腹を抱きかかえている敵兵の腹に巻きつけてやる。

どうせ死ぬしかないのだが、腹を縛ってやれば、一日か二日は生きている。

「かたじけない」

と兵は言った。生きられないにしても、臓物が外に出ないだけいいのだろう。

そこへ、逃げた二人の兵が仲間を連れて走って来た。五人ふえている。斬りかかるのか、と思ったが、そうではないようだ。七人は足を止めた。仲間の死体を引き取りに来たようだ。

十三郎は、ゆっくりと歩き出した。はじめに足を切断された、つまり鳥飼甚兵衛の頭を割った男は、示現流の使い手だったようだ。彼が斬られて敵兵は浮き足だった。あとの二人が斬られている間に二人は逃げだした。強い者が斬られると、あとは浮き足立つ。それを聞いている

から、五人の兵も斬りかかっては来なかったのだ。

甚兵衛が投げ出した番傘を拾った。小雨は降り続いていた。彼は上野広小路に出た。そして居酒屋に入った。酒がのみたかった。

銚子が運ばれて来た。それを手酌でのむ。はじめて人を斬ったのだ。

鳥飼甚兵衛は腕の立つ男と聞いていた。これまでにも何人も薩長兵を斬っていた。だから薩長を斬りに行こうと誘ったのだ。その甚兵衛がどうして敵の刀を受けたのか。間合いから外れる余裕がなかった。それで思わず受けてしまったのだ。刀が折れるとは思っていなかった。

二合入りの銚子の酒を半分ほど呑んだときに、急に胸くそが悪くなった。雪隠に走り込むと嘔吐した。もっと出そうな気がして咽に指を突っ込んだ。胃袋がひっくり返るような気がした。水で口をゆすぎ、手を洗った。そして再び食卓につく。酒をのむ。やっと酒の味がした。あの気分の悪さは何だったのだろう、と思う。

ふと、顔をゆがめた。また、千恵のことを思い出したのだ。頭の中には、千恵の丸くて白い体がある。女の体というのは丸いものだ。その千恵の体を浮田平四郎が抱いている。

その光景を思い浮かべてしまうのだ。平四郎の手が丸くて弾力のある乳房を揉む。紅い乳首がしこり悲鳴を上げる。揉まれてさまざまに形を変える乳房。千恵が声をあげる。あるいは呻く。

「おのれ」

と呟く。胸がキリキリと痛む。こんなに妬心があろうとは思ってもみなかった。尻を引き寄せて撫でる、摑む、揉む、横には張らず柔くて丸い尻だった。

それから手をはざまに入れる。つるんとしていた。切れ込みを割ると、そこは潤んでなめらかだ。平四郎の指がそこに遊ぶ、すると千恵は声をあげて腰をひねる。

こらえきれなくなると、千恵は平四郎の股間に手をのばし、一物をしっかり握る。手を上下させておいて体を起すと、彼の一物を口に咥えるのだ。

もっとも、十三郎の妄想である。千恵が自分にしていたことをそっくりそのまま平四郎にしているような気がする。

千恵は一物を口に咥えるのが好きだった。口に咥えて頭を上下させる。唇の間を一物が出入りするのだ。平四郎の一物もまた千恵の口に咥えられている。

十三郎は、妄想を追い払うように頭を振った。ここ二カ月、そういう妄想ばかりをしている。耐えられないのだ。

3

五月十五日——。

この日は雨が激しかった。

早朝に江戸城大下馬前（二重橋の外）に各藩の兵が集った。黒門町が薩摩、不忍池方面が肥後藩、湯島坂方向が因州藩、長州、肥前、久留米、大村、佐土原藩は上野の東方面と背面を突く作戦である。

彰義隊は、大砲数門を配置しただけだった。上野の山を守るというだけの作戦だった。もっとも大慈院（寛永寺）には輪王寺宮（天皇の弟）がおいでになる。宮を守っての戦いなのだ。

西郷吉之助は、前日、勝海舟に対して、官軍が彰義隊を攻撃するから、輪王寺宮を避難させるようにと通告した。官軍も輪王寺宮を討つわけにはいかないのだ。

その報せが届いたので彰義隊では、官軍の攻撃を知っていた。

六ツ半（午前七時）に一発の銃声がした。それが合図だったらしく、攻撃が開始された。まずは銃撃戦である。

ドシャ降りの雨の中、敵味方の銃がはじける。銃声が雨の音に消される。彰義隊員が、狙い射ちされて、バタバタと仆れていく。もちろん敵も倒れる。

この上野の森の戦いでの死者は、官軍が三百人、彰義隊が六百人と言われている。完全に官軍の勝である。これは鉄砲の違いだったのだ。

酒匂十三郎は、大慈院の門の下に雨を避けてひかえていた。最後には斬込隊が突撃してくる。それに備えてだ。

銃弾は寺の門扉にまでとんで来る。弾がピシピシと当る。備えの隊士たちも、銃弾に貫かれ

て這う。

雨は降りしきっていた。砲弾もとんでくる。これでは、戦う前に戦死してしまう。彰義隊は先に斬込隊を出すべきだったのだ。豪雨の中である。敵地までたどり着けたかもしれない。だが、彰義隊にはそういう考えはなかった。

もちろん、守る輪王寺宮は大慈院にはいなかったのだ。宮はまだ子供だった。それで榊原鍵吉が背負って逃げたという説もある。

十三郎はジリジリしていた。備えているのに雨と一緒に銃弾が降ってくるのだ。十八番隊の組頭の西村賢八郎は知られた剣客である。

「西村さん、斬り込みましょう」

と隊士が言う。

「まだいかん、敵が斬り込んで来てからだ。誘い込んで全滅にする」

そういう作戦だったようだ。戦争の経験のない人が指揮をとっているのだ。それに隊士たちは、軍隊としての訓練を受けたわけではないのだ。相手は三千人でも軍隊である。

上野の山は城ではなかった。ただの小高い丘である。銃撃戦は高地に利がある。狙い撃ちができるのだ。

「みんな、手貫緒をつけておけ」

と賢八郎が言った。下げ緒を適当な長さに切って刀鍔にある二つの孔に通して結ぶ、それ

を外側から回して一ひねりして手首を入れ刀柄を握るのだ。

雨の中の斬り合いとなれば、手が滑る。斬り合いの中で刀を失えばそれで終りだ。雨の中を隊士たちが走る。走りながら、ぶっ倒れる者もいる。

血が流れる。だがすぐに雨が洗い流すのだ。十三郎の隣りにいた隊士がバタリと倒れた。

「おい、どうしたのだ！」

と抱き起すと、胸を射抜かれて死んでいた。一番楽な死に方かもしれない。その隊士は運がよかったのだ。

「十八番隊、移動！」

と賢八郎が声をあげた。賢八郎が走る。隊士はそれについて走る。そして草むらか立木の蔭に潜む。ここで敵の斬込隊を待とうというのだ。もちろん、道の両側である。たちまちずぶ濡れになる。雨が体の中まで染み込んで来る。

思わず身震いする。五月とはいえ水に濡れると寒い。

隊士たちは刀を抜いて待つ。

「来たぞ！」

と賢八郎が声をひそめて言った。できるだけ刀柄は濡らさないようにしておく。だが、濡れないというわけにはいかない。

黒い影が迫ってくる。三十人ほどだろう。

「わしが合図するまで立つな」

と言う。

黒い敵が坂を上ってくる。半分ほどが目の前を行きすぎた。

「斬れっ！」

賢八郎が叫んだ。隊士がワァッと声をあげて斬り込む。敵の斬込隊を分断した。わざと前後に囲まれる立場をとった。

十三郎も走り出した。昨日三人を斬った。そのためにわりに落着いていられた。黒い兵たちに斬り込んでいく。予期しないところから斬り込まれて兵たちは泡をくった。

斬込隊に入るくらいだから腕はある。もっとも西村隊の隊士たちも剣客である。乱れて斬り合うことになる。

十三郎は手近の一人に向った。刀を左から右へ薙いだ。おう、と敵が跳び退く。そこに追いうちを掛ける。敵は調和を崩していた。上段から斬り込む、敵はそれを刀を水平にして受ける。彼は手首をひねった。垂直に振り降ろされた刃が水平になる。剣尖がグーンとのびた。

切先二寸ほどが敵の胸を裂いた。刃は肋骨と肋骨の間に入り抜けた。一呼吸あって胸からブワーッと血が噴き出した。

そのときには、十三郎はその場にはいなかった。馬庭念流は足の運びに秘伝がある。足を止めていると斬られるのだ。敵と味方がどのように斬り合っているのかは見えない。それだけの

余裕もないのだ。

敵が横なぐりに刀を叩きつけて来た。それをとっさに受けてしまった。刀が折れた。シマッタ！　と思う前にその敵に抱きついていた。

斜め後から敵が斬りつけてくる。十三郎は敵を抱いたまま、くるりと回った。敵の刃は敵の背中に斬りつけられた。彼は折れた刃を敵に押し当てた。そして押して引いた。首の血脈が裂け血を噴出させる。

敵の刀をむしり取る。敵は刀を放さない。十三郎も焦っていた。指をこじ開けた。その間も、いつ刃が降ってくるかわからない。

ようやく刀を手にした。ずしりと重い刀である。これならば十三郎の刀が折れるはずである。ドシャ降りの雨の中である。敵が斬り込んでくる。十三郎は片膝ついた。刀を左から右へ薙ぐ。刀の重さが快かった。敵は両足を腿のあたりから両断されていた。

両足を失って敵は転がる。両足を失ったとは知らない敵は両手をついて起き上ろうとする。大砲の音がしきりである。パチパチと小銃の音がしている。雨は降りしきる。足もとを水が流れていた。その水が赤かった。

「走れ！」

と賢八郎が叫んだ。敵の斬込隊はこの一カ所ではなかったのだ。賢八郎が走る。そのあとをついて走る。二十人ほどいた十八番隊は十数人に減っていた。

むこうで敵と味方が斬り合っていた。その中に突入する。敵はあちこちから斬り込んで来ている。

十三郎は走り寄りざま、敵の腰に刃を叩きつけた。敵が腰をくねらせた。わあっ、と叫んで刀を叩きつけてくる。十三郎は左に回り込んだ。敵は空を斬って前につんのめる。彼は刃を右から左へ掬い上げるように斬っていた。

首がとんだ。そのあとから血が噴き出す。どす黒い血だった。血は雨に薄められて赤くなる。死体がごろごろと転がっていた。着ているもので敵か味方かはわかる。その死体たちはみな刀を握っている。それを踏みつけたら怪我をする。

むこうから黒い服の敵が刀を振り上げ、叫びながら走ってくる。転がっている死体には気付かないようだ。死体につまずいてひっくり返った。

あわてて起き上ろうとするところを、十三郎は刀を棟に返して頭を打った。グシャッと頭蓋骨の潰れる感触があった。敵は両眼をとび出させて両頬にぶら下げていた。

頭を打つと両眼がとび出すとは思ってもいなかった。

立ち上ってあたりを見回す。立っているのは七、八人だった。あとは雨でけぶって見えない。雨は降りそそいでいた。

ズドン、ズドン、

と音がする。これまでの大砲の音とは違っていた。そして近くではじけて火花が上る。これ

が敵のアームストロング砲であることはあとでわかった。

ワーッ、と喚声が上る。どこかの口が突破されたらしい。官軍が雪崩れ込んでくる。そのときになって十三郎は空腹を覚えた。西村賢八郎が歩み寄って来た。

「酒匂、生きていたか、敗れたようだ。黒門口が突破された。逃げよう、逃げるしかない」

無駄に死ぬことはなかった。すでに夕刻になっていた。十三郎は敵兵の刀と鞘を奪って腰に差した。見ると賢八郎の姿はなかった。どこかに走り去ったのだろう。十三郎も走った。

4

十三郎は、音羽の護国寺に来ていた。そこに百人ほどの彰義隊の隊士たちがいた。上野の山を逃れて来たのだ。

どれくらい死んだのかわからない。十三郎も何人斬ったのかは覚えていない。どこにも傷は受けていなかった。着物からは水が滴り落ちている。脱ぎたくても代りの着物はないのだ。

「会津へ行こう」

「そうだ。会津で薩長と戦うんだ」

隊士たちが息まいていた。敗れてもみんな元気なのだ。

この隊士たちの中に彰義隊副長の天野八郎がいた。天野について来た隊士たちらしい。

寺で隊士たちのために炊き出しをやり、握り飯を出した。それをぱくつく。十三郎も握り飯の一つを手にした。

今日はともかく、明日からは薩長軍の彰義隊生き残りの隊士狩りがはじまるだろう。逃げるとすれば今夜のうちだ。

十三郎は、本堂の階段に坐っていた。彼は着物を脱いで絞った。そうしている者も何人かいた。下帯までびっしょり濡れているのだ。濡れた着物が簡単に乾くわけはなかった。

三人五人と寺を去っていく。江戸にいればどこかで彰義隊狩りに引っかかる。会津に行くしかないのか。十三郎は階段に坐ってぼんやりしていた。下帯を締めただけの裸である。負けたのは仕方がない。相手は軍隊なのだ、勝てるわけはなかった。だが、せいいっぱい戦ったのだ。

十三郎は、ふと千恵のことを思い出した。いま、千恵はどこにいるのか、浮田平四郎と一緒なのか、未練であることはわかっている。だが忘れられないのだ。

千恵の柔肌が脳にちらつく。平四郎に自由にされているのだ。それがたまらないのだ。千恵の要求に応えてやっていれば、こんなことにはならなかったのか。

そうではあるまい。千恵は十三郎と一緒になる前に平四郎とできていた。そして祝言を上げてから八年間も、ずっと平四郎に抱かれていた。

はじめて千恵を抱いたとき、イタイ、と言った。そのわりには一物は抵抗なく滑り込んだような気がする。疑えばきりがなかった。女一人、どうってことはないじゃないかと思おうとす

る。

千恵よりも剣術に夢中になりすぎたのかもしれない。千恵の女としてのよさをわからなさすぎたのかもしれない。女とはこんなものだと思っていた。比べるに女を知らなかったのだ。

床上手という。たしかに千恵は床上手だった、と言うより床好みだったのだろう。千恵の手に一物を握られたときもドキッとした。一物を口に咥えられたときには、更にドキッとした。女はこういうことも知っているのかと思った。

それが、いま思えばみんな平四郎に教えられたものだろうことがわかる。千恵はいつも平四郎の一物を口にしていたのだ。だから、一物を口にすることには馴れていた。

口にしてしゃぶれば、女の体はそれだけで潤んで来る。男の手に触れられなくても露を出すのだ。当然、そのことは知っていた。まぐわいには露が出たほうが快いのはわかりきっている。まぐわうには充分の露だった。

平四郎の一物が千恵の壺に埋まる。千恵は声をあげて白い腰を振り回す。体をくねらせて歓喜する。その光景が見えて来る。妄想である。千恵が平四郎に抱かれて歓喜するさまが、十三郎にはこらえきれないのだ。

一物が壺に出入りする。そのさままでも見えるのだ。千恵が体を震わせて気をやる。もっとして、と叫ぶ、また気がいく、と叫ぶ。妄想とは果てのないものだ。

十三郎は湿った着物を着た。肌にへばりついてくる。帯に刀を差す。重い刀だった。薩摩兵

か長州兵かわからなかった。重いだけによく斬れた。この刀に比べれば、十三郎の刀は軽かった。

江戸の旗本、御家人はたいてい軽い刀を差している。公用刀だからいつも差していなければならない。刀というのは重いものだ。だからできるだけ軽くする。

寺を出て浅草方面に向う。夜も深くなっている。幸い雨は上っていた。戦いが終るまではドシャ降りだったのだ。

刀がずしりと重い。腰が重くなる。それだけ体も引き締ってくる。体温で着物も少しずつ乾いてくるようだ。

大川端に出た。江戸にいては薩長軍に捕まる。とりあえず向島に渡ろうと思ったのだ。江戸を出るかどうかはまだ決めていなかった。江戸には千恵がいるのだ。もっともどこにいるのかはわからないが。

大川端には渡し舟がなかった。舟はもやっているはずなのに。川端沿いに歩く。暗くても星明りはある。物の形くらいはわかるのだ。

むこうに舟が岸を離れるところだった。十三郎は走った。

「おーい、待ってくれ」

と声をあげた。この舟をのがすと舟はなさそうだった。橋はある。だが、橋のたもとには薩長兵が立っているはずだ。彰義隊の残党が向島、本所、深川に渡りたがっているのはわかって

いる。

舟はもどって来た。六、七人の侍たちが乗っていた。残党である。ようやく舟に乗れた。

「あんたはどこの隊だった？」

侍が話しかけてくる。江戸者ではなかった。彰義隊は東北各地から集って来ている侍も多かった。

「おれは十八番隊だ」

「斬込隊だな、かなり死んだろう」

「どれくらい死んだかはわからん」

西村賢八郎は逃げ去った。そのとき隊士はいくらも残っていなかったようだ。

舟は向島に着いた。そこに多くの舟が乗り捨ててあった。むこう岸に舟がないわけだ。岸に上ったが、どこに行こうというあてはない。

上ったところは隅田川土堤である。春は桜の名所で多くの江戸の人たちを集める。ずっと桜並木が続いている。その北はずれに木母寺という寺がある。花見の客たちは木母寺まで行き帰って来る。

他の侍たちも木母寺をめざす。行くところがない。もっとも木母寺を北へたどれば、奥州街道、日光街道の千住宿に出る。一応木母寺まで行って考えようということなのか。

木母寺は寺領二十五石、将軍が鷹狩りのときにはお成りになった。この境内には梅若丸の

小祠がある。木母寺境内には『植半』という料理屋がある。植木屋半右衛門の略称である。芋、蜆料理が売りものだった。

木母寺に着くと、ここにも彰義隊残党がぞろぞろといた。植半は開放されていた。残党が上り込んで、すでに眠っている者もいた。みんな疲れ果てているのだ。

十三郎もここで仮眠をとった。会津へ行くより仕方ないのか、と思う。組頭の西村賢八郎はのちに捕えられて牢に入っている。

目がさめた。着物もどうにか乾いていた。起き上り、境内へ出る。百人以上もいた士たちは少なくなっていた。奥州街道に向ったのか。もちろん、この木母寺にも、いずれは薩長兵がやってくる。

探索方が出ているはずだ。どこに残党が集っているかはすぐに知れる。

十三郎は迷っていた。もう戦争はたくさんなのだ。会津にまで行って戦う気はない。江戸にいれば捕えられる。おそらく隠れていられる所はないだろう。

一人の隊士がすれ違った。一呼吸あって、なにっ、と目を剝いた。振り向いて、

「浮田平四郎！」

と唸るような声をあげた。隊士は振り向いた。浮田平四郎だった。彼もまた彰義隊に入っていたのだ。

「おう、酒匂か」

と言ってニヤリと笑った。
「浮田、刀を抜け」
平四郎は一歩退いた。
「酒匂、止めておけ、いまさら妻敵討もないだろう。徳川家はなくなったのだ。法度も変る」
「抜け、抜かねば斬る」
「まあ待て、千恵さんとは幼馴染だった。別れるつもりだったが、千恵さんが別れてくれなかった。おまえよりもおれのほうがよかったらしいな」
「言うな！」
十三郎は刀柄に手をかけた。もちろん、間合いには入っていなかった。彼が間合いを詰める。するとその分だけ平四郎は退く。
「酒匂、わしを斬れば千恵さんも斬らなければならなくなる。おまえに千恵さんが斬れるか」
「千恵はいまどこにいる」
「神田松ヶ枝町だ。行って抱いてやれ、いい女だ、というより好きな女だ」
十三郎は刀を抜いた。隊士たち十数人が集って来ていた。
「待て、たかが女のことだ。熱くなることはない」
刀を振り上げた。平四郎は逃げようと背を向けた。その右肩を斬った。ワァと叫んで体をくるりと回した。そこを雁金に斬り下げた。重い刀は、肉を斬り骨を断って腹のあたりまで斬り

下げた。
ハッ、となったとき、隊士たちが刀を抜いていた。
「刀を抜かぬ者を、それを背中からなぜ斬る。卑怯ではないか」
殺気が充ちた。平四郎の仲間だったようだ。
「この男は、わしの妻を盗んだ」
「そんなこと、言いわけにならんぞ！」
十三郎も刀を構えようとした。背中から太刀が降って来た。両肩を裂かれた。
「ギェッ！」
と声をあげた。正面から隊士が斬り込んで来た。それを受けた、と同時に左右から斬りつけて来た。躱しようもなかった。顔を斬られ肩を斬られた。次の一人が胴を薙いだ。
そこで隊士たちは刀を引いた。
「女房を寝取られたくらいで。寝取られるきさまが悪い。女房を満足させることができなかったのだろう」
隊士たちは笑いながら去っていく。
十三郎は立っていた。額から肩から流れ出す血が体を染め上げていく。痛みはそれほどにはなかった。腹に異常を覚えた。首をのばして、おのれの腹を見た。臓物が流れ出していた。
千恵の柔肌を思い出していた。乳房の膨みを、はざまの感触を。おのれの一物が勃起してい

るのを覚えた。

十三郎は重い刀を持ち上げ、首筋に当てると押した。血管がプツンと切れる音を聞いた。そして、血が噴出する音を聞いた。血が体からなくなっていく。血を失って死ぬのは快い、と聞いたことがあった。奇妙な気分だった。

「千恵！」

と叫んだ。何かが遠のいていくような気持になった。

点鬼簿

点鬼簿とは、死者の姓名を記す帖面のことで、過去帖ともいう。

1

まだ、残暑はきびしかった。

関口新兵衛は、着流しに塗笠をかぶって、中山道を歩いていた。紺縞の単衣はかれの姿をさっぱりと見せていた。

蕨宿を過ぎたあたりである。次の宿場浦和までは一里と十四丁である。更に大宮宿までは一里と十丁ある。江戸を出たのは明け六ツだった。

午を過ぎていた。今日中に大宮にたどりつければいいのだ。急ぐことはない。強い陽光が道に反射して、笠の中の新兵衛の顔まで射ていた。

新兵衛には連れがあった。旅姿の女が、かれの後を歩いていた。商家の内儀というみなりである。女の名を比呂という。比呂は歩きながらしきりに首すじの汗を拭っていた。すでに五里あまりを歩いたことになる。だが比呂の姿には疲れは見えなかった。この女は三十になっていた。

茶屋を見つけて、先に茶屋の床几に腰を降ろしたのは新兵衛だった。比呂は先を急ぎたいのに、と言わんばかりに渋々と並んで床几に坐った。

「麦湯をたのむ」

二人とも笠をとった。新兵衛の沈んだ顔に比べ、比呂の顔はいきいきとし、目にも張りがあった。

老婆が冷えた麦湯を運んできた。茶碗を手にして、乾いた咽を潤す。

「今度こそ、討ちもらしはいたしませぬ」

きっとした声で言った。

老婆が、のどやかな声で、

「お暑いことで」

と誰にともなく言った。

足を休めているのは新兵衛たちだけではなかった。だが、老婆と比呂の声は、あまりに違いすぎていた。

比呂の声がいきごんでいるのも無理なかった。この比呂は、いまは江戸で炭屋を営む茨木屋与吉という商人の後妻に納まっているが、そのむかしは、武家の妻であった。いまの比呂は、商人の妻ではなく、もとの武家妻にもどっているのだ。

新兵衛は、比呂の横顔をちらりと見て、唇をゆがめ嗤った。

比呂のもとの夫は、古河藩の藩士で、小野小四郎と言った。表祐筆役であったと聞いている。ささいなことで小四郎が同役の田鍋昌左衛門という男に斬られ果てたのは、六年前だった。比呂はいま、夫の仇である田鍋昌左衛門を討つための旅をしているのだ。新兵衛は比呂の助太刀役だった。

「関口さま、まいりましょうか」

比呂が先に腰をあげた。

「急くことはあるまい。大宮宿までは、あと二里足らずだ」

「それでは、先にまいります」

茶代を払って、比呂は歩きだしていた。その後姿を見て、かれは腰をあげようとはしない。比呂の尻が左右に揺れるのを見ていた。肉付きのいい体である。すれ違う旅人が、振り向いて、比呂の尻を見ている。男の淫情をそそるものがその尻にはあった。

新兵衛は、茶碗を手にして、空であることを知った。老婆が麦湯を注ぎ足してくれる。それを一気にのみ干して、腰をあげた。その腰が重い。腰だけでなく、気分も重い。

強い陽ざしに、新兵衛は眉根を寄せた。歩きながら笠をかぶる。比呂の姿は、街道に小さくなっていた。比呂を追って、かれは足を進める。

人を斬る旅である。気が進まないのは当然である。仇討の助太刀でも、人を斬ることには変りはないのだ。

比呂は、夫の仇、田鍋昌左衛門を討っても、小野家の再興ができるわけではなかった。比呂には身内がない。身内に男がいなかったから、比呂が仇討の旅に出なければならなかったのだ。小四郎に弟か男児でもいれば、仇を討って、藩庁に預けた家禄を返してもらって小野家を再興できるのであるが、女ではその再興もならない。討たれた小四郎には、父親があったが、その父親も二年前に病没していた。

だから、比呂の仇討は、小野家の再興ではなく、夫小四郎の無念を晴らすためだけなのだ。生きていくために、商人の与吉の後妻に納まってまでも、比呂は仇田鍋を忘れてはいなかった。けなげと言えば、その通りだった。

新兵衛が、田鍋昌左衛門の居所が知れた、と茨木屋に行って告げたのは、昨日の夕刻だった。

「いまさら、仇討でもあるまいが」

新兵衛が話しているうちに、比呂の顔色が変り、目が血走ったのである。奥に走り込んだ比

呂は、懐剣を摑んでもどって来て、

「ご案内下さいませ、田鍋昌左衛門はどこに」

とすぐにでも走り出しそうな様子だった。田鍋の居所が、川越の近くと聞いて、比呂は気を静めたのである。

「比呂どのは、いまは幸せに暮している。いまさら仇討など」

「いいえ、小四郎さまの無念は晴らさねばなりませぬ」

比呂は言ってのけた。むしろ亭主の与吉がおどおどし、困惑した顔で、新兵衛に頭を下げたのである。

「わたしも、比呂のやりたいようにさせたいと思いますので」

と、助太刀料十両をさし出した。

その十両は、いまかれの懐中にある。その十両の重さは、おのれの気分の重さとかさなっていた。

「田鍋を比呂に討たせたあとは、江戸にもどらず、旅に出ようか」

と新兵衛は呟いていた。江戸に知人はいても身寄りがあるわけではない。十両あれば、一年ほどは気ままな旅ができるのだ。

二人が、大宮宿に着いたのは、まだ陽のあるうちだった。汗とほこりにまみれている。旅籠に落ちついて、旅装を解き、湯を浴びた。

比呂は、浴衣に着換え、いそいそと落ちつかない。物見遊山にでもきたようなはずみようである。この女は、亡夫の仇討本懐をとげることしか念頭にないのだろう。

夕餉の膳が運ばれて来た。新兵衛の膳には銚子が二本のっていた。比呂のせめてもの心づかいなのだ。

〈仇討が、どんなものか、この女に思い知らせてやる〉

新兵衛は、比呂をちらりと見ながら、胸のうちで呟いた。比呂が銚子を手にして、酌をした。

「二年前、比呂どのと、はじめて会った日も今日のように暑かった」

比呂は頷いていた。

2

長屋の中ほどにある井戸端で、関口新兵衛は下帯ひとつの裸で、洗濯をしていた。すでに夏は過ぎていたはずだが、暑い日だった。肌がヒリヒリと焼けていくようだった。

長屋の路地に、こざっぱりとした二十七、八の女が姿を見せた。その女が比呂だった。比呂は生計のために、料理茶屋で女中として働いていた。働きながら夫小四郎の仇を探していたのである。

「千石屋さんに聞いてまいりました」

比呂はそう言った。千石屋は、新兵衛が用心棒の仕事をもらっている口入れ屋だった。

「千石屋に、関口さまの腕は聞いてきました」

「頼みごとならば、酒一升買って来てもらいたい。酒屋は路地を出た右手にある」

そう言うと、比呂は頷いて背を向けた。比呂が一升徳利を抱いてもどって来たときには、新兵衛は洗濯ものを干し終えていた。

そこで新兵衛は、比呂から、仇討の話を聞き、助太刀を頼まれたのである。比呂は二両をさし出した。

「少ないな」

新兵衛は、二枚の小判を見ながら言った。

そのとき、比呂は意外というような顔で新兵衛を見た。

「仇討といっても、人一人を斬るのだ。十両はもらいたいな」

と冷めたく言っていた。比呂は困惑の色をみせた。その女に十両の金があると思っていたわけではない。更に新兵衛は言った。

「他を探されるがよい。義に篤い浪人や武士もいよう。それでなくても、江戸にある古河藩の藩邸には、それなりの侍もいるはず」

千石屋で腕の立つ浪人といえば、亭主はまず関口新兵衛の名を告げるはずである。だが、新兵衛でなければ、田鍋昌左衛門を斬れないというものではないはずだ。

新兵衛に断わられても、比呂は座したまま動かなかった。ただじっと強い光を放つ目で見ていた。かれは、徳利を引き寄せ茶碗に酒を注いで、それを不味そうに飲んでいた。

「いまは、時がありません」

他に助太刀を探す間がないというのだ。比呂は、田鍋の住いを探し出しながら、その田鍋がすぐにでも逃げ出してしまいそうな気がしていたのだ。

比呂は膝をにじった。

「夫小四郎の無念を晴らしとうございます」

叫ぶように言った。

新兵衛は、酒を飲む手で比呂の手首を摑んで引き寄せた。抗うかと思った。たとえいまは料理茶屋の女中はしていても、夫の仇討に執念を燃やす女である。だが、かれの膝にもろくも崩れた比呂は、男の手がおのれの衿元を掻き分けるにまかせたのである。

かれは乳房を摑んだ。丸く豊かな乳房が汗ばんでぬめっていた。乳房を揉みしだく。食い込ませた指をはじきかえすような弾力がその底のあたりにあった。

揉みしだいておいて、新兵衛は女の体を仰臥させた。たしかに体は丸太棒のように堅くなっていた。息をのんでいるのもわかる。おのれの体を見知らぬ浪人に凌辱されても、仇討だけは果したいのだ。

裾前を左右にはねた。そこには、ぴたりと合わさった肉付きのいい白い腿があった。その腿を押し拡げ、そして潤みをたたえるまで、新兵衛ははざまを弄んだ。その間も比呂は一言も発しなかった。ただ手籠めにあうような気持だったのだろう。

新兵衛は、おのれの屹立したものを、深い切れ込みに埋めた。そのとき、はじめて比呂が、つきつめたように、声を発した。

「夫の無念を……」

それだけだった。新兵衛が体を放すまで、比呂はただ石であり続けたのだ。そのあとにかれの胸にむなしさが拡がった。淫情があって女を抱いたのではなかったのだ。女を試そうとして、ゆきがかりに抱いてしまっただけだった。

新兵衛は、刀を研ぎに出していると称して一時（約二時間）ほど住いを空けた。その間、比呂はじっと待っていたのである。

もどった新兵衛は、田鍋が住んでいるという京橋・畳町にある甚兵衛長屋に、比呂と共に出かけた。だが、田鍋昌左衛門は逃げたあとだった。比呂は、あわてて逃げ出したとみえる荒れた住いに立って唇を噛んでいた。

比呂が知らないことがあった。

田鍋昌左衛門を逃がしたのは、新兵衛だった。刀を研ぎに出していると言って住いを空けた一時の間に、かれは田鍋と会っていたのである。

新兵衛は、そのときの田鍋との会話をよく憶えている。

「田鍋昌左衛門どのか」
「左様、どなたかな」
「関口新兵衛と申すが、ご存知なかろう」
「なにかご用か」
「小野小四郎の妻女、比呂どのに頼まれて来た」
「おお、小四郎のご妻女か。して、比呂どのはどこにおられる」
「あとでくる」
「すると、貴公が比呂どのの助太刀か」
「そういうことになる」
「助太刀など、ご無用に願いたい。もっともご心配なれば、お立合なさってもけっこう」
「ということは、おのれから比呂どのに討たれるお覚悟か」
「むろん」
「いさぎよいことだな」
「わしは、この四年、比呂どのが現われるのを首を長くして待っておった。待つということは長いものだ」
「立派なことだ」
「これで背負った荷を降ろせるというものでござる」

「そうはまいらぬ。その荷は、いましばらく負っていただく」
「なんと」
「いま、比呂どのに、そこもとを討たせるわけにはいかぬ」
「わけを、わけを申されい」
「仇討は、あと二年待っていただきたい。背負うた荷は、重かろうが、比呂どののためとお考えいただきたい」
「わけがわからぬ。討たれるのに、なぜ二年の時がいるのだ」
「わけは申し上げかねる。半時後には、比呂どのが駆けつける。それまでに、ここをお立ちのき願いたい」
新兵衛は、上り框に二両を置いた。そして比呂と共に、長屋に駆けつけたときには、田鍋の姿はなかったのだ。もちろん、二枚の小判も消えていた。

3

行燈に火が入っていた。
窓を開けて街道を見ると、軒下の提灯が折り重なるように点いていて、道を照らしていた。
新兵衛は、窓辺に腰を降ろして、外を眺めていた。まだ寝るには早い。比呂は浴衣姿で、道

中着を畳んでいた。尻のあたりが丸い。二年前と比べれば、更に肉付きがよくなっているようだ。

かれは、なぜ田鍋を逃がしたかを、おのれに問うていた。そのなぞは、明日答が出ることになるだろう。二年前、長屋に田鍋を訪れたときは、逃がすつもりはなかった。田鍋を斬る前に、田鍋という浪人がどんな男かを知りたかった。ただそれだけだった。

田鍋昌左衛門は、かれが予想していた男と違っていた。三十五、六の枯れた男だった。長屋に住みながら、扇子削りの内職で糊口をしのいでいる様子だった。それで、新兵衛の気が変わったのだ。

「関口さま」

比呂が声をかけた。

首をひねると、比呂は、のべられた夜具の上に坐っていた。膝を崩している。豊かな姿態を包むには、浴衣は小さいようだ。膝の間に、褄が乱れて、白い素足をのぞかせている。

「行燈を消して下さいませ」

「眠るにはまだ早い」

「明日は大事の日でございます」

新兵衛は、立って行燈の灯りを吹き消した。そして窓辺にもどった。夜気はすでに冷えている。肌に快かった。

窓から眺める街道には、まだ灯りも多く、人の往来もあった。

かれは、おのれの胸底に秘めている点鬼簿をとり出した。その点鬼簿には、いくつかの姓名が刻み込まれている。

その姓名の中から、一つを引っぱり出してみた。越前・鯖江藩士、三浦伝八郎とある。かつて、新兵衛も鯖江藩に禄を食んでいた。馬廻り役八十石である。

「あの日も、たしか暑い日だった」

その記憶があった。藩庁を出て、帰宅する途中、夕立に降られた。その夕立が罪を作った。駆け込んだ屋敷が三浦伝八郎の住いだった。伝八郎は、藩主間部若狭守に従って、江戸に出ていた。

伝八郎の妻志津が姿を見せ、上って茶など召し上れ、と誘った。新兵衛は二十六、志津は二十歳だった。かれは気軽に上った。屋敷の中には、志津一人だった。それに気付いたときは遅かった。志津の手がかれの手首を握り、乳房に誘っていたのである。

「関口さま、わたしに恥をかかせないで」

志津の目は潤んでいた。その潤みに気付かなかったのを迂闊というつもりはない。伝八郎が江戸に行って三カ月、しかもあと三カ月しなければ帰国しない。志津の肌は淋しかったのだ。この女が三浦家に嫁して三年が経っていた。三年の間に女として熟れた体は、肌淋しく、体は男を求めて疼いていた。

新兵衛は志津を抱いた。かれは志津の色香に迷った。男を迷わすだけの四肢を持っていた。それだけではすまなかった。そのあとも志津に誘われ、交媾を重ねた。度重なるにつれて噂も立つ。

三浦伝八郎が帰国するという三日前、新兵衛は志津と共に、鯖江藩を捨てたのである。未練ある禄ではなかった。だが、それと同時に伝八郎に追われる身にもなったのである。伝八郎にしてみれば、新兵衛と志津を斬らなければ、家禄を保つことができなかった。つまり女敵討である。

新兵衛は江戸に来て志津とは別れた。志津が、新兵衛に飽きて他の男の所へ走ったのである。志津はそういう女だった。かれは志津を追わなかった。逃げた女を追うおのれのみじめさを知っていた。つまり矜持があったのだ。

江戸に来て三年目、新兵衛は、伝八郎に襲われた。伝八郎は、四人の浪人を助太刀に雇っていた。だが、四人の助太刀も、新兵衛の剣の前には、血しぶきをあげるしかなかったのである。伝八郎をも斬った。仇討が法ならば、返り討も法である。

そのときに、新兵衛の胸底に点鬼簿ができ、三浦伝八郎の名が刻み込まれたのである。浪人たちの名は記すに名を知らなかった。

「関口さま……」

比呂に名を呼ばれ、新兵衛はおのれにかえった。振り向くと、暗がりに比呂の目が煌っていた。

「からだが火照って眠れません」

誘っているのだ。二年前に肌を合わせた仲である。新兵衛は動かなかった。恥をかかせないで、と迫ってきた志津が思い出される。いま、かれは志津が生きているのかどうかは知らない。

比呂は新兵衛が動かぬとみて起きてきた。そして、かれの肩に豊かな乳房を押しつけてくる。発情した女が匂った。七里ほどの道を歩いてきたのである。女の体が練れ火照るのも無理はなかった。

女の手が、衿元からすべり込み、男の厚い胸を撫でた。熱い手だった。その手がかれの股間をさぐった。そこにあるものは、新兵衛の意志に反して、勃え立っていた。下帯をゆるめ、それを摑み出すと、指を這わせる。

新兵衛は、おのれの股間で白い手が蠢くのを見ていた。二年前には、体を堅くして、人形のように身をまかせた比呂が、いまは商人の女と化していた。二年間、与吉の妻として、女の体は練れ馴れたのだろう。

「寝間へ」

低く囁いた。

新兵衛は、おのれの夜具に仰臥した。比呂はかれの腰のそばに膝を崩して坐った。そして再び屹立したものを手にしたのである。

「二年前のこと、憶えています」

そう言って、比呂は手にしたものの尖端に唇を押しつけて来た。

この女は、おそらく、江戸を発つときから、こうなるつもりだったのだろう。道中、比呂がいさみ立ち、うきうきしていたのは、こうなるのを予期してだったのか、とさえ思うほどだった。

比呂は、尖端のなめらかな部分に舌を這わせ、からませる。それを口に咥えた。そして、一気に根元まで呑み込んだのである。

二年前は、生贄のようだった同じ女とは思えない。与吉が比呂をこんな体にしたのかもしれない。二年経てば女は変るものである。かれはおのれの股間を見た。比呂の唇の間に、おのれが出入りしている。その光景が、かれの脳を灼いた。志津を思い出していた。

比呂は、仰臥し、膝を折り立て、その膝を開いて男を迎える姿勢をとった。はざまをさぐるまでもない。はざまは熱い沼となっていた。

「関口さま」

新兵衛は、うながされて体を起し、白い内腿の隙間に体を割り込ませると、比呂の手が堅いものを誘った。たしかに熱い沼だった。その沼におのれが埋まり没した。

「仇討を止めぬか」

閉じていた比呂の目が大きく見開かれた。

「与吉には、仇を討ったことにすればよい」

そう言いながら新兵衛は、この女が仇討を諦めるとは思ってもいなかった。薄闇の中で女の目だけが、青い炎のように燃え上るのを見た。それとこれとは別なのだ。もちろん、かれも、比呂に仇討を止めさせる気はなかった。田鍋昌左衛門を逃がした決着をつけなければならないのだ。

比呂が、かれの背中に腕を回し爪を立てた。すでに体には震えが走っている。尻がもち上っていた。その尻に新兵衛は手を添えて引き寄せた。腕の中で柔らかい尻が躍る。そして、比呂の体がつっ張り、こきざみに震え、次に力が抜けて、柔らかくなった。

新兵衛は、背中に小さな疼きを覚えていた。爪で掻かれ、血をにじませているのだろう。

4

新兵衛は、おのれを包み込んだ女の襞が締めつけ、律動するのを覚えていた。かれは豊かな肉付きの女に重なっていた。女の両手がおのれの尻をしっかり引き寄せている。

抜き差しを拒否しているのだ。女は弓なりに体を曲げて、腰を回していた。女が叫んだ。そのとたんに、かれを押し出そうとする力が動いた。かれは押し出されまいと押しつける。女は奇声をあげる。新兵衛には、よく馴染んだ女体だった。

比呂の体ではない。志津の体だった。いまおれは志津を抱いているのだと思った。新兵衛は夢を見ていた。夢であることを知っていた。よく見る夢でもあった。

この夢には、必ず三浦伝八郎が姿を見せるのだ。もうそろそろ現われるころではないのか、と新兵衛は頭をもたげて、あたりをうかがった。

女の乳を水に流したような白っぽい景色だった。深い霧のようにも思えた。風物はすべて融け込んで見えた。その白っぽい霧の中から、血まみれの伝八郎が姿を見せるのだ。

〈まだか〉

とかれは思った。枕もとの刀をさぐる。太刀はそこにあった。それを摑んで鯉口を切った。体の下で志津が叫んだ。そして、重なった彼の体をはねかえそうとするかのように暴れ狂う。

白い闇の中に、伝八郎が姿を見せる。新兵衛は志津に重なったまま、鞘を払った。そして刀を手にして立ったときには、志津の姿は消えていた。

「新兵衛、志津は死んだぞ、首は刎ねた。おまえの首を刎ねて、鯖江に持ち帰れば、三浦家は再興できる。父や母が待っている。早く帰らねば」

新兵衛は、伝八郎の刀を巻き上げた。刀を失った伝八郎は、狼狽した。落ちた刀を拾おうと伸ばした腕を肘のつけ根から、斬り落した。伝八郎は叫び、失った右腕のつけ根を左手で摑んだ。そして、膝をついたのである。

「待て、新兵衛、おれを斬るな。おれは死ぬわけにはいかぬ。鯖江には老いた父と母が、おれの帰りを待っている。いや、おれは鯖江に帰れなくともよい。斬るな、助けてくれ」

新兵衛は、左腕も、肘のつけ根から刎ね斬った。右肘に左手首がぶら下った。

「それでも生きたいのか、伝八郎」

「生きたい、助けてくれ、みのがせ。おれは乞食になっても生きたい。新兵衛、血止めをしてくれ」

「伝八郎、未練がましいぞ。武士らしく諦めたらどうだ」

「武士は捨てる。斬るな、斬らないでくれ。たのむ……」

新兵衛は無造作に、血刀を一閃させた。伝八郎の首が胴を放れて転がった。その転がった首が立った。そして、たのむ、たのむ、と叫んでいる。

新兵衛は、目を開いた。

「また、あの夢か」

全身が汗にまみれていた。首すじの汗を手の甲で拭った。起き上って部屋を出た。風呂場へ降りて、裸に水を浴びた。

「伝八郎、まだ成仏できぬと見える」

低く呟いて、肌を拭って浴衣を着る。おかしなことに、股間は屹立していた。

たしかに、伝八郎の死にぎわは、醜悪であった。武士として未練がありすぎた。だが、そん

な伝八郎を責めようとは思わない。人の死にぎわというものは、そんなものだ。伝八郎はまだ若かった。死にぎわに乱れて当り前である。

田鍋昌左衛門は、比呂が現われるのを待っていたと言った。比呂に立派に討たれようとも言った。そのいさぎよさが、新兵衛の気に入らなかった。

あのまま、比呂を田鍋のもとに連れていけば、あの男は笑いながら死んでいったに違いない。新兵衛は、昌左衛門に、そういう死に方をされたのでは、伝八郎にすまぬ、と思った。いや、昌左衛門を前にしてそう思ったわけではない。昌左衛門のいさぎよさに、腹を立てていた。そうあっさり死なれては、かなわぬと思った。

伝八郎の夢に脂汗をかいて醒め、いま新兵衛は昌左衛門を逃した理由を知ったのだ。生きることに執着して、みじめに死んでいった伝八郎に、同じような武士がいることを知らせてやらなければならないのだ。

おのれが、伝八郎に夢の中で責められるのは、かまわなかった。伝八郎の首を刎ねたあとで、人の生命を断つことの重さを、新兵衛は知ったのだ。

昌左衛門は、待つことは重い荷を背負っているものだと言った。そうではない。昌左衛門は、比呂の夫小四郎を斬った重さに気付いていなかったのだ。

新兵衛が、部屋にもどると、行燈がつき、比呂が座していた。

「どうした、おれが逃げたとでも思ったのか」

「いいえ」

比呂は、首を振って笑った。

「目が冴えて」

明日の仇討を前にして、気が昂ぶっているのだろう。衿元から手を入れて乳房を握ってやると、比呂は大きく溜息をついた。

「関口さま、わたしは小四郎の仇を討つために生きてきたのでしょうか」

「田鍋を討ってみればわかる。討ったあとは与吉の妻にもどればよい」

比呂は笑って頷いた。

そして、胸を拡げると、二つの乳房をかれの胸に押しつけて来た。水を浴びたばかりの冷めたい胸が快いのか、強く押しつけて、体をゆさぶる。

新兵衛を裸にし、おのれも裸になって、肌を押しつけ擦りつける。比呂の胸の底にも、何かが蠢きはじめたようだ。

「関口さま、わたしを狂わせて」

仇討を前にして、比呂はおのれを狂わせたい。おのれのはざまに、ふたたび男の手を誘った。そして、男の指の動きに合わせて、体をゆすりはじめた。体にはすぐに火がつき、くすぶりはじめる。比呂は新兵衛の口に口を押しつけ、吸った。

5

大宮の宿場外れから、川越に向う道がある。川越まで道程四里だった。川越の手前に古谷というところがある。そこまで二里三十丁、約三里である。

道幅は一間半、牛馬が通るには、ゆったりとした道である。周りは水田である。道は水田の中を曲りくねってのびていた。新兵衛と比呂は、その道を歩いていた。なみに歩いて二里一時である。一時半で古谷村に着く。

視界に青々とした稲田が拡がっていた。昨日のいさみ立った比呂に比べ、今日の比呂は力なく歩いていた。それだけに新兵衛の足に遅れがちになる。

「どうあっても、夫の仇は討たねばならぬな」

新兵衛は、比呂の足に合わせて歩きながら言った。

「はい」

と小さく答える比呂。だが、その声には意気込みがなかった。ここ六年、夫小野小四郎の無念を晴らすために生きて来た女である。少なくとも比呂はおのれにそう言い聞かせて来たはずである。

陽射しは強かった。

稲穂はそろそろ実をつけはじめるころである。実をつけた穂は頭を垂れる。

車を引いた牛がすれ違った。荷台には炭俵を積み重ねている。

「田鍋昌左衛門は、そこにいるのでしょうか」

「いる。今度は逃げられん」

新兵衛は、二年間、田鍋を探しまわっていたわけではない。田鍋が京橋・畳町の長屋から逃げ出すとき、新兵衛は口入れ屋千石屋の小者に、田鍋のあとをつけさせていた。そして、三カ月に一度は、田鍋の暮しぶりを看視させた。だから、いま田鍋がどのように暮しているかを新兵衛は知っている。

そこまでするには、それなりの金も費している。千石屋の無理難題も引き受けた。たとえ仇討であっても、新兵衛には他人事である。なのに、なぜそこまでしなければならなかったのか。

畳町の長屋で、田鍋を比呂に討たしてやっていれば、それで済んでいたのである。田鍋は素直に討たれる気になっていた。助太刀の必要はなかったのだ。

そうだろうか、と新兵衛は思う。いざ比呂が懐剣を構えて刺そうとするとき、田鍋はおのれの胸を突き出しただろうか。現に田鍋は新兵衛が置いた二両の金を持って逃げたではないか。

荒川に架る橋の上まで来た。比呂は、足を止めて、欄干によりかかって、眼下を流れる川水に目をやった。おそらく、小野小四郎が斬死したときのことを思い出しているのに違いない。

「あと十丁ほどだ」

「はい」
と比呂は顔を上げた。
新兵衛は、おのれが首を刎ねた三浦伝八郎を思っていた。首を刎ねるとき、新兵衛の気は静まりかえっていた。右腕を斬り落したとき、そのまま見逃してもよかったはずである。だが、右腕を失った伝八郎の生きざまを思うとみじめに過ぎた。朋輩として首を刎ねてやらねばならなかったのだ。
村の集落が見えた。藁葺き屋根が点々と散っていた。通りがかった老百姓に、
「お里さんの家はどこかな」
と問うた。老百姓は、一軒の農家を手で指してみせただけだった。比呂は訝むように新兵衛を見た。
庭に踏み込むと梅が匂った。むしろの上にくすんだ紅色の梅が並べて干してあった。家の中から、赤ン坊を抱いた三十ばかりの女が出て来た。赤ン坊は、四、五カ月だろうか。女にあやされて笑い声を立てていた。
「お里さんか」
新兵衛に声をかけられて、女が振りむいた。はじめは怪訝そうな顔をしていたが、新兵衛と比呂を見比べ、何かに思い当ったらしく、女の顔からみるみる血の気が引いた。よく陽に焼けて浅黒い顔が、どす黒いものになった。

話は聞いていたものと思える。膝ががくがくと顫えた。とたんに異変に気付いたのか、赤ン坊が泣き出した。ひきつけをおこしたような泣き方である。
その泣き声を聞きつけて、奥から四十ばかりと見える百姓男が姿を見せた。
「どうした、お里」
新兵衛と比呂の姿に気付き、はじめは訝しげに見ていた男は、次の瞬間、女と同じ反応を見せた。
「田鍋どの、しばらくぶりだな」
田鍋昌左衛門であった。二年経てば人は変る。比呂が商人の後妻に納まったように、田鍋も、百姓になっていた。お里というのは、田鍋の妻で、抱いている子は、田鍋の子なのだ。二年前に比べ、田鍋はたくましくなり、若く見えた。
「田鍋どの、約束通り、二年待ってもらった。今日はその約束を果たしていただく。貴公のいさぎよさには、おれは感銘した。いさぎよく、比呂どのに討たれてやってくれ」
比呂は、棒をのんだように、つっ立っている。比呂の白い貌にも血の気がなかった。
「比呂どの、小四郎どのの無念を晴らされるがよい」
そういう新兵衛の目はまがまがしい煌りをみせていた。
「ま、まってくれ」
膝を折ったのは田鍋だった。

「お、おれは、すでに武士ではない。見られる通り百姓だ。お里との間に子もなした」
「昌左衛門、醜いぞ。二年前のいさぎよさはどうした」
「二年前……、あのとき討ってくれればよかったのだ。あのときは討たれる覚悟はできていた。そう申したはずだ。いまになって、どうして」
「言うな昌左衛門、おれはおまえのいさぎよさが気に食わなかった。いまになって生命が惜しくなったか」
「そうだ、惜しい。惜しくなった」
新兵衛は、片頬をゆがませて嗤った。
「比呂どの、昌左衛門を討たれい」
そのとき、赤ン坊を抱いたお里が、二人の間に割り込んできて膝をついた。そして、赤ン坊をそばに置くと、頭を地面に擦りつけた。
「旦那さまを、旦那さまを、ゆるして下せえ、おねげえだ」
「ならぬ。昌左衛門は仇持ちだ。比呂どのに討たれねばならぬ」
「そこを曲げて、おねげえしますだ」
「昌左衛門、武士を捨てても、仇持ちであることには変りがない。六年間背負ってきた重い荷をここで降ろせるのだ。貴公は二年前にそう言った。討たれて荷を降ろせ、それで楽になれる」
昌左衛門は、顔を比呂に向けた。

「比呂どのは、いま、茨木屋とかいう商人と夫婦になられたと聞いた。わしを討っても、小野家を再興できるわけでもあるまい。わしを助けてくれ」
「昌左衛門、それを卑怯未練という。武士らしく死ね」
「わしは武士を捨てた」
新兵衛は、腰をひねって刀を抜いた。とたんにお里がかれの足にすがりつく。それを蹴倒した。赤ン坊は火がついたように泣いている。
「おのれ」
叫んで立ったのは昌左衛門だった。家の中に走り込む。逃げたのではなかった。かれは刀を摑んで走り出て来た。
「旦那さま逃げて！」
お里が叫んだ。
「おのれ、返り討ちにしてくれる」
昌左衛門は、刀を抜くと鞘を捨てた。
「お里、どいていろ。おれも田鍋昌左衛門だ。むざむざと討たれはせぬ。返り討ちにしてくれる」
「それでこそ、武士だ」
昌左衛門は、剣を青眼に構えた。かれはおのれが武士であることを忘れてはいなかったのだ。

その構えには厳しさがあった。小野小四郎を斬った剣なのだろう。

新兵衛は、青眼に構えた剣の峰をゆっくりと降した。いきり立っている昌左衛門に隙を見せてやれば、すぐに斬り込んでくる。それは目に見えていた。そこに新兵衛の技があるのだ。

峰が地を摺った。

昌左衛門が動こうとした。そのとき比呂が叫んだ。

「関口さま、もう、よろしゅうございます」

「ならぬ！」

新兵衛がはじめて、声を荒げて叫んだ。

「おれは、おまえに何度も仇討を止めよと言った。だが、おまえは夫の無念を晴らすのだと言い張った。家の再興がめあてであればとにかく、おのれの怨情だけで、この男を討とうと言い張ったのだ」

新兵衛の目に怒りが生じた。その目が煌りを放ち、血走った。

「仇を討つことがどういうことか、目を剝いて見ているがよい」

かれは地に足を擦った。

昌左衛門が、あわてて剣を振りかざし、斬りつけた。その瞬間、血しぶきがあがった。右腕を肘から切断された昌左衛門が、目を剝いた。

「た、助けてくれ！」

悲鳴をあげた。

刹那！

新兵衛の剣は、昌左衛門の首のあたりを一閃した。

一呼吸、あたりは静まった。

強直したように立った昌左衛門の首がぐらりとゆれた。とたんに、二人の女の悲鳴が湧いた。首は胴を離れて転がり落ちた。そのあとで首を失った胴が、音をたてて倒れた。お里がわめきながら、その胴にしがみついて、体を震わせ、慟哭した。

比呂は、体から背骨が抜けたように、膝をつき、そして尻から落ちていた。新兵衛は刀を拭って、鞘に収めた。

「比呂、おまえの無念は晴れた。田鍋昌左衛門の死にざまは、おまえの胸に刻み込まれ、一生離れまい。これが仇討というものだ」

新兵衛は、背を向けて歩き出していた。かれは、昌左衛門を斬るときのおのれが、憤怒の形相であったことを思い出しながら、歩いていた。足は川越城下に向っていた。平常心では人を斬ることができないのを、かれは知っていた。だから、新兵衛はおのれを怒りに駆り立てたのだ。

「伝八郎、成仏せよ」

低く呟いた。そして、おのれの胸底にある点鬼簿に田鍋昌左衛門の名を刻みつけた。

八辻ヶ原

1

神田鞘師町の裏店の一軒に浪人が住んでいた。浪人の名を来栖源四郎という。源四郎は家の中の夜具の中に臥していた。床に就いてから一カ月ほどになる。

風邪をひいた。ただの風邪だと思っていた。しきりに咳が出ていた。咳をすれば痰が出る。激しい咳のあと、痰が出て、痰に赤い血が混じることがあった。

医師を呼んだ。医師は風邪だろうと言って薬を出した。源四郎は労咳ではないか、と思った。まず食欲がなくなった。舌が荒れているのだ。

女房のお藤は源四郎にしきりに食べさせようとする。粥を作って食わせ、せんべいを買ってくる。だが、粥だって砂を噛むような気がする。何を食っても同じだった。第一咽を通らないのだ。

食わなければ体力が衰えるばかりだ。お藤もそう言う。源四郎自身もわかっている。わかっているがどうにもならない。食わなくても空腹感がないのだ。

源四郎は、これまで用心棒などをして生きて来た。三十五歳である。お藤は料理茶屋の仲居をしていた。器量も悪くないし、ぼってりとした肌は白かった。お藤の稼ぎがあるから、貧しい暮しではなかった。

寝込んでからは、お藤の稼ぎだけが頼りだった。お藤は店では売れっこのようだ。いきいきとしている。目の張りもあった。美女というほどではないが、魅力のある女だった。今年二十八歳になる。女盛りと言うべきだろう。

女盛りのお藤を残して死んでいくのかと思う。何も食えないのだ。舌がざらついていて味もわからない。第一腹が空かない。だから食わないでもいられる。

血痰が出る。そのうちどばっと喀血するのだろう。それで終りだ。

ある朝、目をさますとお藤の姿がなかった。料理茶屋は早番と遅番がある。早番でもこの時刻にお藤がいない、と言うことはない。用があって出かけたのか。いずれはもどって来るだろう、と思った。

うつらうつらと眠る。体が怠いのは微熱があるのだろう。咳が出る。なかなか止ってくれない咳だ。体力がないから、咳をするにも苦しい。

咽が渇いて枕もとにある土びんをとって呑む。咳が治まると疲れ果てたように横たわり眠る。何かとりとめのない夢を見ている。目をさましたときに夢のことは忘れている。夜中に一度、目をさました。あたりはまっ暗である。障子だけがぼんやりと明るい。暗い天井を見て、このまま死んでいくのかな、と思う。

浪人の最期はこんなものだろうな、と思う。ものを食わなくても空腹感は覚えない。ただ肉だけが削げていく。ついには骸骨のようになって死んでいくのだ。

死ぬのは怖ろしくはなかった。どうせ人は一度は死ぬのだ。このまま死んでいければ楽なものだ。空腹感もない、咳を除けばどこが痛いというのでもない。何だかすんなりと死んでいけそうだ。生きていることに未練もなかった。あと何日か、そう長くはもたないだろう。

源四郎は、九州熊本、加藤家の家臣だった。二代目の忠広は暗愚だった。そこに勢力争いが生ずる。初代の清正のころには考えられないことだった。加藤家が改易になったのは、家老たちの争いではなかった。謀叛の疑いだった。

源四郎はそのときに浪人になった。土着して百姓になった者も多かったし、他家に召抱えられた者もいた。だが、それは一部分で家臣の大半は浪人である。地元では食えないので旅に出る。旅から旅を渡り歩いてたどり着いたのは江戸だった。江戸だったら、何とか食えるだろう

と思ったのだ。

幸い源四郎はいくらか剣術ができた。それで用心棒などの仕事もわりにあった。お藤と夫婦になったのは七年ほど前である。お藤もまた浪人の娘だったのだ。形ばかりの祝言をあげただけだった。

暮しは用心棒の仕事だけで何とかなった。半年ほど前、人に誘われて料理茶屋の仲居として働くようになった。源四郎ははじめは止めた。だが、彼自身も少しましな暮しがしたかったのだ。お藤は源四郎の思いを押し切って仲居になった。

たしかに暮しは楽になった。すると源四郎はぶらぶらと遊び回り、用心棒の仕事も探さなくなった。お藤の稼ぎで充分に食えるからだ。彼が風邪を引いたのも、気のゆるみだったのかもしれない。暮しが変ると体の調子も変っていくものだ。気持に隙ができる。その隙間から風邪が入ってくるのだ。

目がさめた。外は明るい。今日もまだ生きているのだ。口の中がカラカラに乾いていた。舌と上顎がひっつきそうだ。それでいて口の中が粘る。枕もとの土びんの水をのんだ。そして横たわり、フーッと息をつく。水をのむだけで息が上るのだ。

家の中にお藤の姿はなかった。昨夜、もどって来た様子もなかった。どうしたのだろうと思う。すすけた天井を見る。寝ていても体が怠いのだ。

お藤は昨夜は帰らなかった。その前の夜もだ。どこかへ泊って来るような女ではない。家には重病人をかかえているのだ。店が終ればとんで帰って来るはずである。今までがそうであった。源四郎にはそれが当り前だったのだ。

それなのにお藤は二晩も帰らなかったことになる。お藤の身に何かあったのか、と思う。お藤に何かあったとしても源四郎には何もできないのだ。

ごろつきに手込めにされる光景を思い浮かべた。お藤ならごろつきどもに狙われるだろう。それとも何かの出来事にまき込まれたのか。つまりこの家に帰って来れない何事かがあったのだ。

どこかに捕われている。どこかとはどこだ。どこの誰になぜ捕われたのかだ。捕われて男たちに手込めにされているのか。そう思うと彼の胸が痛んだ。きれいな体をしていた。その体が汚されている。

お藤がいないでは生きていけない。そう思って苦笑した。あと二、三日しか生きてはいけない体である。どうせ死ぬ体である。お藤がいなくてもどうということはない。このまま死ねばいいのだ。あとは誰かがどうにかしてくれるだろう。源四郎が死んだと聞けばお藤ももどって来るかもしれない。源四郎が死んでもどって来るのであれば、いまだってもどって来るはずである。

どっちにしても変りはしない。おのれが死んでからのことだから。待てよ、と思った。死んだと聞いてもどって来るかもしれないと考えたのはどういう発想からだろうか。

源四郎は、お藤がもどって来ないのは、もどって来れない状況にあると考えたからだ。もしかしたら殺されてしまっているのかもしれないと。そこには、お藤の意志はない。何かなければ帰って来るのが当然と考えた。

帰って来ないことにお藤の意志があったらどうなるのか、それを考えて源四郎は目を剝いた。お藤は自分の意志で帰って来ない。

料理茶屋には金持ちの客が集まる。その客たちは仲居を口説く。金と相手次第では転ぶ仲居もいると聞く。それを狙った茶屋もある。お藤だけはそんなことはしない、と思っていた。だが、お藤だって女だ。特別な女ではない。ただの女である。お藤を口説く客だっているだろう。彼女がその気になったとしたら。いまさらではなく、以前から客に抱かれていたとしたら。

あるいはすでにそういう男と話合いができていた。そして家出するまでに客がお藤のために妾宅を用意していたとしたら。

「まさか」

と目を剝いた。それとも他に情夫ができたのか。どっちにしても同じようなものだ。お藤はわしを裏切ったと考え、そして、

「おれは、お藤に捨てられたのか」

と唸るように呟いた。愕然となった。お藤には男がいたのだ。それで源四郎を捨てた。

「お藤に捨てられた」

消え入るような声になった。

2

源四郎は天井を睨みつけた。お藤に捨てられた、と思うと涙がポロポロと出て来た。目尻からこめかみ、耳朶のほうへ点々と落ちていく。

捨てられたのだ。当り前のことなのかもしれない。源四郎はあと三、四日、あるいは十日だとしても死んでいく男である。そんな男と一緒にいても何も報われることはない。別に男がいる。嫌いな男ではないだろう。源四郎には明日がない。もう一カ月も世話して来ている。お藤が料理茶屋の仲居になったときから働かなくなっていた。

そんな男と一緒にいることはないのだ。あと四、五日で死ぬ。あるいはお藤がいなければもっと早いかもしれない。となると捨てたくもなるだろう。

「おのれ！」

と乾いた声で口走った。

どうののしったところで体が動かないのだ。枕もとに置いてある土びんの水だって三日前の水だということになる。

このまま早く死ね、とお藤は言っているのだ。死ねばどこかの寺の無縁仏として葬られるの

だろう。あるいはお藤がもどって来て葬式を出してくれるのか。

もう粥をすすめてくれる女もいない。このまま死んでしまうしかないのだ。手をのばして土びんの水をのもうとした。だが空になっていた。水さえ飲めないのだ。

仰向けになって目を閉じる。涙がポロリ。わしを捨てた女だ。おのれと叫んで刀を手に走り出したいところだが、すでにその力はない。舌が乾いている。咽にひっつきそうだ。

「おのれ、おのれ」

と呟いてみる。お藤がおのれを捨てるなんて考えたこともなかった。おのれと怒ってみても、怒る力さえ残ってはいないのだ。とにかく末期の水くらいはのみたかった。

起きようとしてみる。だが手足に力が入らないのだ。思わず呻いた。体を横にし、そしてうつ伏せにする。両腕で体を支えようとする。腕に力が入らない。上半身を浮かし両膝を引きつける。息を切らしながら、どうにか坐ることができた。左膝を立てる。右手で枕を摑んだ。左膝の上に左手をのせる。両腕で体を引きずり上げる。

どうにか立ち上った。だが歩き出そうとして膝に力が入らず、また寝転んでしまった。はじめからやり直すことになる。寝てばかりいたので膝に力がないのだ。二、三歩歩いては、また膝をつく。息が切れていた。立てずに這い進んだ。広い家ではない。二間っきりの家である。それなのに炊事場にたどりつくまでかなりの時間がかかった。

柱や障子にすがりながら、どうにか土間に降りた。水がめの蓋を開いた。中は空っぽだった。

底にいくらかの水が残っている。水を汲んでくるには共同井戸までいかなければならない。そんな力はなさそうだった。柄杓で底の水を汲んだ。ごりごりと音がした。柄杓を引き上げると、わずかの水がたまっていた。それをするように呑む。水がめを斜めにすれば、いくらかの水はあるのだろうが、柄杓で掬っても水は入って来ない。まだいくらか残っているはずなのだが。

柱や障子にすがり簞笥のところまで行き、手拭いを持って来た。その手拭いを水がめの中に入れる。手拭いに水を吸わせるのだ。その手拭いを絞って流れ出る水を口に滴らす。そして咽を鳴らした。それを何度かくり返して息をついた。

寝ていた部屋にもどり、刀を手にした。刀を逆さに立て鞘を払う。まだ錆はついていなかった。刀をもとにもどした。お藤を斬るために刃を確めたのか。刀をもどし杖にして立ってみた。どうにか立てた。さっきよりはいくらか楽だった。

部屋の中を這ってお櫃の蓋を開いてみたが洗ってあるように中は空っぽだった。部屋の中を這いまわる。いつもあるところに金はなかった。お藤が持ち去ったのだ。もっともやがて死ぬ男に金など用はなかったのだ。

「おのれ」

と口走った。髷は乱れ、髭はぼうぼうである。それも死んでいく者にはどうでもいいことだろう。

寝巻を着物に着換える。そして帯を締める。どうしようというのだ、とおのれに問うてみる。だがわからない。ただ、一人で死んでいくのは淋しかったのだ。そばにお藤がいれば安心して死んでいけたのだ。

帯に刀をさしてみた。刀の重さによろめいて膝をついた。刀を鞘ごと抜いてそれを杖にした。これならば何とか歩けそうだった。歩いてみると思ったよりも歩けそうだった。

外に出るのであれば髷を整え、髭を剃りたかった。

「どうしようというのだ」

と自分に問うてみる。外は夜になっていた。戸を開けて外に出る。そして刀を杖に歩き出す。膝が折れて坐り込む。また立って歩き出す。暗がりを歩く。人の目に触れたくないのだ。人とすれ違うときには背をのばす。通りすぎると、坐り込んで空咳をする。だが、まだ死にそうにはなかった。

何とか神田堀に出た。堀端には柳の木が並んでいる。その一本の根元に坐り込んだ。木の影の中に融け込む。人通りの少ないところである。そこで人を待つ。お藤のいない家の中で死ぬのはあまりに淋しすぎる。そう思って住まいを出て来た。どこかで死ねればそれでいい。野たれ死も仕方がない。

大工が道具箱を肩に小走りにやって来る。源四郎は首を振った。手拭いをかぶった女が歩いてくる。娼婦だろう。これも見過した。彼はじっと動かない。

商人と見える男が歩いて来る。源四郎はもぞっと動いた。そして刀を杖にして立ち上る。商人の前にヌーッと立つ。商人はびっくりして竦み立つ。彼は刀を抜いた。刃を棟にかえす。商人はガタガタ震えて動けない。

棟で商人の頭を叩いた。両方の目玉がとび出すのを見た。商人の襟を摑んで堀端に引きずる。倒れた商人の懐中をさぐる。財布が出て来た。それを懐中にねじ込む。その財布には紐がついていた。紐を切っておいて刀を鞘に収める。そして、商人の体を堀の中に落す。

源四郎は肩で息をしていた。ポシャンと水音を聞いて、その場に寝転んだ。夜空には鎌のような三日月が出ていた。青白く光っている。

彼は辻斬りをやったのだ。殺された商人は不運だった。斬らなかったのは血を見るのがいやだったのだ。それで叩いた。死体を放っておくとすぐに見つかる。だから場所を堀端にした。死体を堀に投げ込んでおけばしばらくは見つかるまい。そういう計算があった。

地面に寝転んだまま、動けなかった。これで死ぬのかと思ったが、頭の中は妙に冴えていた。痛くもなければ苦しくもない。ただ体が動かないだけなのだ。体を動かそうとしても動かない。まるで石になってしまったようだ。

3

源四郎は、居酒屋の腰掛けに坐って酒をのんでいた。むさい顔だった。もっとも着ているものはまだましである。むさい浪人も珍しくはない。彼は先に金を出して酒を頼んだ。金さえ見せれば酒は出す。

ちびりちびりと酒をのむ。水はのめるのだから酒はのめると思ったのだ。たしかに咽を通っていく。胃の腑のあたりがカーッと熱くなる。寝ついてからは酒はのまなかった。咽は通るが酒の味はしなかった。苦い薬のようだ。それを少しずつ呑む。胃袋に何かを入れなければならないのだ。

何かを食いたいという空腹感はない。だから食わずにすますことはできるのだが、体が動かないのだ。お藤は粥を炊いてくれた。それさえ咽を通らなかった。

粥を食わなかったのは源四郎の甘えだったのだろう。食えなくても無理に咽を通さなければならなかったのだ。

酒をのんでいて、飯が食えそうな気がして来た。それで老婆に飯を頼んだ。とにかく食わなければならないのだ。胃の腑に何かを入れなければならない。

老婆が飯を運んで来た。丼飯に味噌汁に香のものがついている。飯を一箸口に入れた。数えるほどの飯粒である。それを嚙む。まさに砂を嚙むようだった。それをむりやり咽にのみ込む。味噌汁をのんだ。これも味噌の味はしなかった。だが、とにかく咽を通った。味がしないのであれば胃袋に流し込めばいいのだ。そう思って丼飯に汁をかけた。それを流し込む。飯が咽を通っていく。しめたと思ったが、とたんに目を白黒させた。そして口を押えて店をとび出した。

店の入口の前にうずくまり、嘔吐した。胃の中にあるものが、みんな出て来たのだ。もちろん、たいしたものは入っていなかった。むりに押し込もうとしても胃が受けつけなかったのだ。胃袋がひっくり返るようだった。

老婆に表を水で流しておいてくれ、と頼んで店にもどった。そして丼飯を睨んだ。飯粒五、六粒を口に入れて嚙んだ。飯の味がしないのは舌が荒れているからだ。それでも嚙んで飲み込んだ。

「女房に捨てられた男か」

と呟く。お藤がいる間は、このまま死んでもいいと思っていた。お藤に逃げられてから死ねなくなったのだ。死にたくないと思ったのではない。死ねないと思いはじめたのだ。

男の意地なのかと思う。女房に捨てられたのでは死ねない。死んでたまるかと思う。

源四郎は這うようにして住まいにもどった。五歩歩いてはしゃがみ込み、十歩歩いては寝転んだ。だがとにかく家にもどって来た。力尽きたように寝ころぶ。そしてそのまま動けなくな

り眠った。翌日目をさます。まだ生きていたと思う。手足は動くのだ。動けないまま死ぬのかと思った。起き上ってみる。立ち上ってよろめき倒れた。もちろん体は怠い。このまま寝ていたいところだ。

あまり咳も出なくなっていることに気付いた。とにかく体が動くのだ。まず井戸から水を汲んで来た。水を飲んだ。かなりの水が飲めた。もちろん、まだ目はうつろである。

源四郎は、ふと思いついたように懐中を探った。そこに縞の財布があった。口を開いて逆さに振る。三枚の小判が転り出た。一分金、一朱銀が何枚かあった。あとは小銭である。だが、これだけあればしばらくは生きられる。彼は生きることを考えていた。

彼は鋏で髭を切った。乱れた髷をまとめた。どうにか見られるようになった。刀を腰に差す。刀の重さによろめくことはなかった。

よろめきながらも外に出る。ゆっくりと歩いた。そして昨夜の居酒屋に入った。昨夜の礼を言い、飯を出してもらう。この店は昼間はめし屋でもあった。運ばれて来た飯を箸の先につけて口に入れる。それを嚙むのだ。舌が荒れているから、まさに砂である。それでも少しずつ飲み込む。

残った飯をお握りにしてもらった。竹の皮に包んでもらって家に帰る。食欲があるわけでもないのに、五、六粒の飯を口に入れて飲み込む。まるで仕事のようにそれを続けた。もちろん、いまやることはそれだけだった。

「おのれ、お藤」

と口走ってみる。怒りが出て来ただけ、体力がもどって来たのだ。十日もそれを続ける。とりあえず食うことだった。一日一度、居酒屋に行ってお握りを作ってもらう。それで一日分は足りた。はじめのうちは一日に一個の握り飯が食えなかったのだ。

一日一日体が軽くなってくる。十日も経つと、どうにか人並みに歩けるようになっていた。髪結いに行く。髭を剃ってもらい、髷を結ってもらう。それで生き返ったような気がした。それと同時に空腹感を覚えるようになっていた。

労咳だと思っていたのは嘘だったのか、咳も少なくなっていた。体の怠さも薄くなっていく。一体あれは何だったのだろうと思う。もう数日で死ぬはずだったのだ。それがいまは飯が食えて歩けるのだ。もちろん、まだ完全にもとにもどったわけではないのだが。

体力が回復して来ると、お藤の柔肌が思い出される。着痩せする体質で細身に見えるが体にはたっぷりと肉がついていた。乳房も快く膨み、腰から太腿にかけてはむっちりと肉をつけていた。

体がよくなると別の苦しみが出て来る。お藤のあの体を抱いている男がいるのだ。寝込んでからは、お藤の体には触れていない。お藤だって女盛りの体だ。体が男を欲しがったのに違いない。

すでにあのころ男がいたのか、と思ってみる。思い当ることがないわけではなかった。だが、

そのころはお藤が他の男に抱かれるなんて考えたこともなかった。

そうか、あのころから男がいたのか、そのことに全く気が回らなかった。いまはその男と暮しているのか。そう思ってみて宙空を睨みつけた。

源四郎は歩き出した。お藤を探し出す方法がないわけではない。いまでも料理茶屋で働いているのだろう。最も稼ぎやすいところだからだ。

誰でも女ならば料理茶屋の仲居になれるわけではなかった。客筋が違う。容姿に条件がつけられる。料理茶屋の仲居となると他の女たちとは違っていた。お藤にはそれだけの容姿があった。もちろん賃金もよいものだった。

源四郎は、まずお藤が働いていた両国橋東詰めにある料理茶屋に行ってみた。やはりお藤は店を辞めていた。すると他の料理茶屋を探すしかない。もっとも江戸に料理茶屋はそれほど多くはない。一軒一軒探してみてもたかが知れている。

だが、お藤がお藤の名で出ているとは限らない。名前を変えていれば探すのが面倒になるのだ。

4

源四郎は、八辻ヶ原の柳原土堤側の隅に立っていた。

『筋違御門内を八辻ヶ原という、この広小路へは八方より入所なり』（江戸砂子）とある。八方への通道は、一は昌平橋へ、二は芋洗坂へ、三は駿河台へ、四は三河町筋へ、五は連雀町へ、六は須田町へ、七は柳原へ、そして八が筋違御門橋へということになる。

神田川の内側ということになる。川の内を内神田、外を外神田という。この八辻ヶ原は、昼は大道芸人、辻講釈、薬売りなどさまざまな見世物が出る。夜になると白首が出没してひそかに男たちの袖を引く。

川の下流の柳原土堤には夜鷹が出る。夜鷹とたいして変らないが、八辻ヶ原の白首たちは夜鷹をさげすんだという。

源四郎は、柳原へ向う道のそばにうっそりと立っていた。白首たちも気味悪がって近寄らない。夜鷹は河原に茣蓙などで四方を囲ってそこで体を売るが、白首はどこかに住まいを持っていて、そこへ客を連れ込むのだ。

客を捕えた白首は去っていく。住まいに行くのだ。白首の数はだんだんに少なくなっていく。そして何人かが最後に残る。売れなかった女たちだ。客が捕まらないまま帰っていく女もいる。

源四郎は、ここに三晩立っていた。彼はお藤を探しまわった。江戸の料理茶屋を聞きまわった。だが、どこにもお藤はいなかった。両国橋東詰め、富ヶ岡八幡の二軒茶屋、不忍池畔の料理茶屋、そして上野広小路の茶屋。仲居の一人が教えてくれた。上野の茶屋に以前お藤と言った女がお冴という名で出ていると。

その上野の茶屋を張り込んだ。その店にお藤はいたのである。だが、その場では声を掛けなかった。住まいをつきとめてやろうと思ったのだ。

店がひけるまで待った。そして帰っていくお藤を尾行した。住まいは同じ神田の松枝町の裏店だったのだ。もちろん、そこには男がいた。

乗り込んでその男を叩っ斬ってやろうと思ったがそのときには気を静めた。翌日、その家を見張った。一緒にお藤と出て来た男を見て、源四郎は目を剝いた。

中野半左衛門、源四郎と同じ熊本、加藤家の臣だった。江戸に出て来てからは朋友としてつき合って来た。源四郎の住まいにも何度か来たことがある。

お藤は半左といつごろからできていたのか。お藤は半左と並んで歩きながら幸せそうな顔をしていた。むかっ、となったが、それも押さえた。こうして住まいもわかってみれば、いつでも斬れる。

生きていてよかったと思う。お藤に捨てられ、あのまま死んでいたら、こんな光景も見られなかったのだ。

「おのれ！」

とくぐもった声をあげた。朋友であったはずの半左にも裏切られていたのだ。女房にも裏切られた。怒りで叫び出しそうになった。

二人は八辻ヶ原を横切って昌平橋を渡る。そこから湯島天神の下を通って上野に向う。半左

が何気なくお藤の尻をつるりと撫でた。そこには馴れ合いがあった。お藤が体をくねらせて笑う。

こともあろうに半左が、と唸る。だが世間にはよくあることだ。亭主持ちの女と亭主の友がくっつく。お藤は源四郎を見捨て半左のところに走った。あるいは半左がお藤を誘ったのかもしれない。

半左はお藤を店まで送って踵をかえした。源四郎はそこに立ったままだった。お藤はどうしてあと三、四日を待てなかったのか。源四郎が死ぬのを待って一緒になればよかったのだ。少くともあと一日か二日あとだったら、源四郎は動くことはできなかったろう。

どうせ死ぬと思って捨てたのか。半左だって源四郎が死んだのを確めてから、お藤を住まいに呼べばよかったではないか。

おかげで源四郎は生き返ってしまった。

「犬畜生が！」

と口走ってみる。

二人を斬るのは容易なことだ。だが、ただ斬っては腹の虫が治まらない。

お藤は、源四郎の女房であることがやりきれなくなっていた。用心棒の仕事も探そうとはしない。お藤の稼ぎで食って遊んでいるのだ。

お藤は半左の所に相談に行った。そこでできたのだろう。あるいはお藤には半左が生甲斐の

ようになっていた。考えられることだ。源四郎はお藤が女房ということで安心し、甘えかかっていた。亭主に甘えられるのもお藤にはいやなことだったのに違いない。

罪があるとすれば源四郎にこそある。女というのはいや気のさした男とは一緒にいられないのだ。お藤はギリギリまで耐えた。耐えきれなくなって半左の所に走ったのか。

源四郎は、うっそりと立っていた。白首たちもいなくなっていた。八辻ヶ原にも人影がない。だが、この八辻ヶ原にお藤と半左が現われるのだ。半左はときどきお藤を店まで迎えに行くのだ。お藤に対しての優しさもある、がもう一つ、お藤が客と遊ばないように見張る目的もあった。

二人は肩を並べて昌平橋を渡って来るのだ。それが源四郎には待ちどおしかった。

ようやく昌平橋に二人の影が浮いた。お藤と半左が肩を並べて歩いてくる。八辻ヶ原に入った。やはり月明りがあった。源四郎はゆっくりと暗がりから出た。そして二人に歩み寄っていく。

「半左」

と声をかけた。二人がギクッと足を止めた。二人には源四郎がわからないのだ。彼はゆっくり刀を抜いた。

「な、何者だ」

「半左、刀を抜くまで待ってやる」

「お、おまえ、源四郎？」

「そうだ、来栖源四郎だ」

「お、おまえ、死んだのではなかったのか」

「わしが死んだのなら、葬式くらいは出てくれてよかったろう」

「待て、話せばわかる」

「話はない。抜くまで待っていると言っている。抜け、抜かねばそのまま斬る」

「待て、おれの言い分も聞いてくれ、おれはお藤さんに誘われて」

「言い訳は聞かん、抜け、抜くまで待ってやるのが、わしの思いやりだ」

半左は刀柄に手をかけた。刀を抜きはじめる。源四郎はその手首に刃を叩きつけた。

「わっ」

と半左が叫んだ。右手首は切断されて刀柄にぶら下った。手首の重さで刀は抜けて足もとに音をたてて落ちた。

「どうだ、半左、血止めをしてやろうか。血止めをすれば生きられるぞ。左手でもお藤の乳房は摑める」

手首からは血が流れていた。流れた血は土が吸い込んでいく。

振り向くと、お藤が竦み立っていた。口もきけない様子だ。顔は凍りついていた。お藤もまた源四郎が死んだと思い込んでいたのか。

お藤を斬らねばと思う。だがどうしても斬れないのだ。刃を拭って鞘に収めた。そして背を向けて歩き出す。走りもどってお藤を一刀のもとに斬る。そう思って何度か足を止めた。だが、お藤を斬れないおのれを知っていた。恨みがないわけではない。おのれを捨てた女だ、斬るべきだと思う。だが、歩き出した足は再び止まることがなかった。

駒ヶ原

1

日下仁十郎は、駒ヶ原に立っていた。草ぼうぼうの原である。目黒村の北端に位置する地域を駒ヶ原という。また駒場野とも称した。

『道玄坂より乾の方十四、五町ばかりを隔てたり。代々木原に続き広原にして、上目黒村に属す。雲雀、鶉、野雉、兎の類多く、御遊猟の地なり』（江戸名所図会）

百姓地で田畑などあったが、一面、広大な武蔵野の原で、この地が将軍家の御狩場に定められたのは享保三年のことであるという。

仁十郎は着流しの浪人であった。すでに四十を二つ過ぎていた。生きていて面白い世の中ではなかった。生計は用心棒などでどうにかしのいでいる。用心棒と言ってもいつもあるわけではない。深川に行けば人足の仕事がある。葦の原を埋め立てている。この仕事は十数年も前から行われている。

日当三百五十文。月に十日働けば何とか食っていける。それが月に十日働けないのだ。体がもたないのだ。体がもたないということはそれだけ体力が落ちているのだろう。一日働けば足腰が痛くなる。

もっとも仁十郎は人足をしなくても食えていた。剣術ができる。だから用心棒に雇われる。口入れ屋も優先的に仕事を回してくれるのだ。近ごろ体調もよくない。よく眠れないのだ。飯は食っているが、気力が出て来ない。

何となく世の中を暗い目で見る。楽しむことがないのだ。ただ生きているだけのような気がしている。もっとも世の中にそう楽しいことがあるわけではなかった。

仁十郎も八年前までは侍だった。家禄があったのだ。遠州横須賀藩、譜代大名五万石、本多越前守利長の家臣だった。槍奉行配下の与力である。

この本多利長は女好きだった。江戸にいるときには吉原に通う。そして気に入った遊女を身請けする。それだけならまだしも、江戸と横須賀を往復する間も、その女を連れて歩く。そして道中の本陣でもその女とまぐわうのだ。家中、誰知らぬ者はなかった。

遊女ははなと言った。はなは百姓の生まれとかでまぐわいが好きなのだ。それに声が高い。もっとも大名が側女を持つのは自由だ。たいていの大名は女好きである。

江戸にいるときは、はなを屋敷において吉原に行く。吉原にはよい女がいくらもいる。

八年前だった。仁十郎は藩士数人と酒をのんでいた。酔うと失言することもある。

「殿は淫らにすぎる。まぐわいというものはもそっとひそかにやるべきだ」

江戸屋敷や横須賀の城で女を抱かれるのはかまわぬ。だが、江戸への上下の旅の間にそれをなされては家臣たちが眠れないのだ。女のよがり声が高く、同じ本陣に泊っている家臣たちの耳に聞えるのだ。この手の声というのは気になるものだ。

「もう少し上品な声をひそませることのできる女をお召しになればよいのに」

これに怒った侍がいた。立身徳兵衛という旗奉行の配下だった。

「主君を悪しざまに言うとは許せぬ、表に出よ」

たしかに、どんなに淫蕩でも主君は主君である。

「立身どの、まあまあ」

となだめる者がいたが徳兵衛は聞かなかった。このとき徳兵衛は四十を過ぎていたが、剣はかなり使うと言われていた。仁十郎もしまったと思った。こんなことで命を落したくなかったし、斬りたくもなかった。

「立身どの、わしも言いすぎた。詫びる」

「いまさら詫びてもらっても、受けるわけにいかん、表へ出ろ」

徳兵衛はさっさと表へ出てしまった。こうなれば仁十郎だって逃げ出すわけにはいかない。逃げてもことはすまないのだ。表に出ると徳兵衛は刀柄に手をかけて待っていた。

「抜け！」

という。仁十郎はいきなり刀を抜いた。刀を抜こうとする徳兵衛の右手首を斬り落した。右手首をつけたまま、刀は鞘から滑って足もとに落ちた。

仁十郎は再び刀を上段に振りあげると、左肩を雁金に斬り下げた。背中に肩甲骨がある。平べったいところから貝殻骨と呼んだ。この貝殻骨がなまって雁金となった。雁金に斬り下げるとは、ただ左肩を裂くだけではない。雁金を二つにするほど斬るのだ。つまり剣尖は背中へ通っていた。

「おのれ！」

と徳兵衛は目を剝いた。人を斬れば藩にはいられない。その夜のうちに仁十郎は横須賀の城下町から去った。つまらぬことだった。徳兵衛も途中で許せばよかったのだ。徳兵衛は仁十郎を斬れると思ったのだ。

立身家は家禄没収ということになった。徳兵衛の仇を討たなければ立身家は再興できないのだ。徳兵衛の子供たちが苦労することになる。

それから八年が経った。仁十郎は仇持ちということになる。いつどこで斬りかかられるかわからないのだ。仇討とは、父の仇、などと叫んで斬りかかるものではない。みつけざま斬りかかる。

徳兵衛には二人の男の子がいた。彦之介と彦次郎である。この二人もすでに二十歳を過ぎているはずだ。そう思っていたところに、昨夜、仁十郎の住まいに書状が投げ込まれたのだ。挑戦状だった。

なぜ挑戦状などつきつけるのか。隙を見て斬りかかればよいではないか、と仁十郎は考えた。そのほうが討ち取りやすい。

書状には、明日、午、駒ヶ原で、とあった。駒ヶ原は広い、だが平地である。立っていればどこからでも見えるのだ。もちろん仁十郎にも覚悟はできていた。

いきなり斬りつけないで挑戦状というのは何かわけがあるはずだ。剣術の稽古をして腕を上げた。だから堂々と斬り合おうというのか。

約束の時刻はとうに過ぎたようだ。だが、彦之介達は現われぬ。仁十郎が焦れるのを待とうというのか。

本多利長は、寛文四年（一六六四）に吉原の遊女を横須賀城に連れて帰り、北の丸御殿を造り、そこに住まわせ北の丸どのとよばせていた。延宝年間（一六七三～）、同じ吉原の太夫を七百両で身請けして城内の西の丸に住まわせて、西の丸どのと呼ばせた。

九年前のことだった。吉原から身請けすれば仁十郎の耳にも入るわけだ。利長は遊女が好き

だったようだ。まだ、仁十郎が槍奉行の与力だったころである。

昨年、延宝八年（一六八〇）五月八日に四代将軍家綱が死去した。もちろん江戸在府の大名たちは総登場していた。ところが利長は前の日から吉原に居つづけでこのことを知らなかった。急を知った家臣が礼服を持って吉原に駆けつけた。あわてて着物を着替え江戸城にたどりついたのは暮れ六ツ（午後六時）を過ぎていて城門は閉っていたのである。

やむなく屋敷へもどると病気と称して閉じこもった。このような不祥事も仁十郎の耳に入って来た。

左手のむこうに四つの影が見えた。その影がゆっくりと歩み寄って来る。八年も前のことだ、徳兵衛の子供の顔など覚えてはいなかった。

四人は十間ほどのところに足を止めた。一人は女だった。そう言えば徳兵衛には娘もあったな、と思う。一人が前に出て来た。

「不倶戴天の仇、日下仁十郎、尋常に勝負せい。わしは立身徳兵衛が一子彦之介」

「同じく彦次郎」

「同じく津谷」

と三人が言った。彦次郎が一歩退ると、いま一人の浪人風の者が出て来た。

「拙者、河合伝右衛門、義によって助太刀いたす」

名乗って仇討をするとは聞いたことがない。仇討とは隙を見て、いきなり斬りつけるものだ。

もっとも討ち果しておいて名乗りをあげる場合はある。それは周りに弥次馬がいてそれに聞かせるためである。

河合伝右衛門は五間まで歩み寄って来た。三十五、六と見える屈強な浪人である。助太刀を買って出たからには、腕に自信があるのだろう。彦之介は尋常に勝負せいと言った。助太刀を立てたむこう側は尋常の勝負であるわけはなかった。

伝右衛門が刀柄に手をかけた。仁十郎もそれに合わせた。同時に刀を抜く。伝右衛門は刀を正眼に構える。仁十郎は右手に下げたままだった。

少しずつ間合を詰めて来る。腕は立つのだろうが、堅くなっている。余裕がないのだ。伝右衛門は仁十郎の刀を見ていた。右手に下げた刀がどのように動くのかを気にしているのだろう。

間が二間になった。足を擦った。そして間合に入る。間合とは大きく一歩を踏み出して相手を斬れる距離である。もちろん相手の剣尖も届く。

伝右衛門は、気合を発しながら、剣尖を上げて一歩を大きく踏み出そうとした。だが、途中で止めて間合から外れた。動かない仁十郎が無気味だったのか。

腕は立つ、自信はある。だが、いざとなるとおのれの腕が発揮できるのかどうかわからない。わずかでも間違うとおのれが斬られることになるのだ。いざ斬り合いになると誰もが怯える。怯えないためには、おのれを空にしなければならない。伝右衛門はおのれを空にできないでいる。

青々とした草が風になびく。

伝右衛門はまた間合に入って来た。また退くわけにはいかない。両足で地を蹴ろうとした。地を蹴って一閃すれば相手を斬れるはずである。だが迷いがあった。

額に汗が光りはじめた。仁十郎が動かないのが不気味なのだ。

伝右衛門にしてみれば、おのれのことではなかった。おそらく〝義によって〟ではなく、〝金をもらって〟と言うことだろう。いかに金をもらってもおのれの命を失っては何にもならない。伝右衛門は簡単に仁十郎を斬れるつもりだった。胸を叩いて助太刀を引き受けたのだろう。

それが仁十郎と対峙して見て違った。いまさら約束が違うと言って帰るわけにはいかないのだ。何か怖ろしい。仁十郎に威圧されるようだ。

あるいは覚悟の違いだろう。仁十郎には覚悟はできていた。これ以上生き長らえても世の中はつまらない。仁十郎の覚悟はそこから来ていた。この世に未練がなければ怯えはないのだ。

伝右衛門は、三たび間合に入った。そして剣尖を上げながら、

「キェーッ！」

と叫んだ。そして大きく一歩を踏み出す。刃が閃いた。相手の左肩に向って刀を振り降ろす。途中で剣尖が相手に届かないことを知った。だが、動きは途中では止められない。間合が間違っていたのか。

刃は仁十郎の胸もとを擦過した。そして地面を剣尖が削った。仁十郎の右手が動いていた。

伝右衛門は顔を上げた。そして仁十郎と目と目が合った。

伝右衛門は、ワーッ、と叫んで刀を捨て、両手でおのれの首筋を押さえた。指の間から赤い血が噴き出す。仁十郎の右手は小さく動いて、伝右衛門の右首筋を裂いたのだ。噴き出す血は止めようがなかった。伝右衛門は手で首筋を押えたまま走り出した。どこへ行こうというのか。

彦之介、彦次郎、津谷の三人はハッ、となった。三人は、伝右衛門が仁十郎を斬ってくれるものと思い込んでいた。自分たちがやることはとどめを刺し、首を掻き切るだけだったのだ。

予定が違った。逃げるに逃げられない。竦み立って足が動かないのだ。仁十郎は歩み寄った。まず、彦之介の右肩を八双から勢いよく斬った。

その刀を取り直し、再び振り上げて、次の彦次郎の左肩を雁金に斬り下げた。二人とも伝右衛門が斬られて、金縛りにあったように動けなかった。この八年剣術の修業は何もしなかったらしい。

二人とも肩から血を流していた。噴出はしないが血はぼこぼこと湧いてくる。二人はたちまち醤油樽を浴びたように肩から下が濡れていく。

仁十郎は、背を向け、刃を拭いながら歩み去っていく。

2

三日後、神田・松枝町の仁十郎の住まいに女が現われた。女の声に立っていくと玄関に津谷が立っていた。仁十郎はギョッとなった。だが津谷の手に懐剣はなかった。

「何の用だ」

「行くところがありません」

「行くところがないって、わしに関りのないことだ」

「いいえ、関りはございます。兄二人があなたに斬られました。わたしには行くところがございません」

「行くところがないと言って、わしのこの家に住むつもりか」

「はい、置いて下さい」

「冗談は止めてくれ、そなたとわしは仇同士だ」

「それでも置いていただきます」

「そのようなことはできぬ。帰ってくれ」

津谷は草履を脱ぐと、仁十郎を押しのけるようにして上っていった。そして座敷の中ほどにペタリと坐った。

「それは困るよ、津谷さん、出て行ってくれ」

「いいえ、出て行きません。ここにお世話になります」

二十三歳になったという。八年前は十五歳だったのだ。仁十郎は覚えてはいなかった。

「二人の兄は茶毘に付し、お寺に頼んで来ました。わたしは横須賀に帰るわけにはいかないのです」

「江戸に知り合いもあろう。本多家の江戸詰の方々がおいでになる」

「いいえ、ここがわたしに最もふさわしいところと思うて来ました」

「しかし、それは困る」

「あなたは、父と兄二人をお斬りになりました。少しは我慢していただきます」

「我慢というても、仇同士が同じ屋根の下に住むとは」

「わたしはかまいません」

「そなたがかまわなくても、わしが困る」

「お茶でも淹れましょうか」

と津谷は立った。そして土間に降りると、火をつけることからはじめた。仁十郎にはそれ以上言う言葉がなかった。

なるほど、こういうやり方もあったのかと思った。夜になって寝首を掻く。津谷にはこういうやり方しかなかったのかもしれない。

「ことの起りは徳兵衛どのだ。わしは詫びた。それなのに承知されなかった」
土間で動き回る津谷にそう言った。
「そのことは、いまはどうでもいいのです」
動く津谷を見ていた。
「妙なことになったものだ」
と呟く。やがてお茶が出された。茶碗を手にして口まで運んだ。
「毒など入ってはおりません」
そう言われてギクリとなった。毒が入っていようなどとは考えてもいなかった。津谷に言われて茶碗を台の上に置いた。
「夕食は、どうなさっているのですか」
「たいていは外で食うことにしている」
「それではもったいない。今日からはわたしが炊きます」
と言う。それから間もなく、津谷の荷が届いた。着物や着替えが入っているのだろう。二つの風呂敷包みである。この家には二部屋がある。仁十郎が寝室に使っていた部屋を空けた。どうしてこんな女と住まなければならないのかと思う。彼女は着物を着替えた。ふだん着である。その姿は浪人の妻らしく見える。
津谷は買いものに出かけ、夕食の仕度をしておいて湯屋に出かけていく。そんな津谷をぼんやり見ていた。

湯屋からもどった津谷は、夕餉の膳を出す。また、毒は入っておりません、と言う。仁十郎は飯を食った。味噌汁と香の物だけである。だが、この八年間、このような飯は食ったことがなかった。
もっとも全く飯を炊かなかったわけではない。ときには炊いた。そして味噌汁をぶっ掛けて食う。あるいはお茶漬けにして食ったりした。それが面倒で外で食うようになる。それも面倒なときにはせんべいなどを買っておき、それですますこともあった。
飯を食いながら、津谷の尻を見る。女の尻であった。丸くて肉付きがいい。このところ女の体には触れていなかった。もっとも女のいらぬ体ではない。それでときには岡場所に行く。
津谷は次の間に去る。仁十郎は夜具を敷いて横になった。起き上って雨戸を閉めた。いつもは閉めない戸である。雨戸を閉めないと星明りでも部屋の中に流れ込んで来て、ものの形くらいは見える。まっくら闇にしておきたかった。
そして夜具を移動させる。寝首を掻かれないためにである。翌朝目をさました。すでに朝餉の仕度ができていた。食事を取って家を出る。昨夜は眠りが浅かった。津谷が懐剣をふりかざし、斬りつけてくるのではないかと思ったのだ。眠ってしまえば刺されるまではわからないのだ。夜明けに近くなってトロトロと眠っただけのような気がする。
津谷は父親を殺され、目の前で二人の兄が斬殺された。恨みがあって当然だ。横須賀にも帰

れぬと言った。すでに横須賀には家がないのだ。仁十郎を討たねば家は再興されない。帰りたくても帰れない。

口入れ屋に顔を出す。幸い用心棒の仕事があった。口入れ屋は仁十郎の腕は知っている。腕の立つ浪人となると、仁十郎に仕事を残しておいてくれるのだ。

日本橋の木綿問屋に行く。旦那が待っていた。この日はあちこちに集金に回る日だという。金を持ち歩くので用心棒がいるのだ。集金は三日続くという。すると用心棒の仕事も三日あるわけだ。

用心棒の日当は五百文、埋立地の人足の日当よりもいいわけだ。旦那のあとをついて回るだけだ。旦那を襲う者があると仁十郎は斬り合わなければならない。もちろん、そういうことはめったにない。だが、万が一ということもある。その万が一のための用心棒である。旦那が木綿屋の店に入っていく。出て来るまで表で待っているのだ。

気が向いたらうどんの一杯も食わしてくれるし、酒の一本も呑ましてくれることがある。ただついて歩くだけだから、人足のようには疲れない。

旦那を木綿問屋に送りとどけてその日の仕事は終る。五百文をもらって帰るのだ。松枝町の住まいにもどる。もしかしたら津谷は出て行ったのかもしれない、と思ったが、津谷はいたのである。掃除をしたらしく、家の中はきれいになっていた。

家に女がいるというのはいいものだ。だがその女は仁十郎を仇と狙っている。妙なものだっ

た。彼は五百文を出した。

「これを家のことに使ってくれ」

と言った。三十文で一分になる。五百文で二朱だった。座敷に坐るとお茶が出る。毒は入っていませんよ、とは言わなかった。津谷に毒を盛られるのだったら仕方がない、と頭の隅のほうで思っている。

「洗濯ものはありませんか」

という。ない、と言った。全く洗濯をしないというのではなかった。自分でもときにはするのだ。庭には洗濯ものが干してあった。押し入れに突っ込んであったのを洗濯したのだろう。

その日、用心棒の仕事を終って帰って来てから湯屋に行った。湯屋には五日に一度くらいしかいかぬ。それでも浪人としてはいいほうだった。流し場で垢を落す。そして洗いざらしの下帯を締める。下帯というのはいつも汚れているものだ。洗いざらしの下帯は肌に快かった。

住まいにもどると夕餉が待っている。干魚が一尾つけてあった。夕餉をすますとあとは寝るだけだ。夜更しすると油がもったいない。

夜具に入っても仁十郎は落ちつかなかった。隣室には女が寝ているのだ。それに若い女だし容姿も悪くない。五日ほどは耐えた。気にしまい、と思うとよけい気になる。

仁十郎は立って襖を開けた。雨戸は閉めていないので物の形はわかる。夜具は膨んでいる。当然、津谷が寝ているのだ。彼はそっと忍び込む。夜具のそばに坐ると、

「眠ったか」

と声をかける。返事はなかった。だが眠っていないことは知っている。夜具の中に滑り込んだ。背中を向けている。津谷はいやだとは言わなかった。添寝をして手を胸のあたりにのばす。寝間着の上から乳房に触れた。弾力のある膨みが感じられた。手で揉んでみる。手を衿の間に入れた。そこに丸い乳房があった。手に余る大きさだ。それをゆっくりと揉む。そのなめらかな肌と弾力が快い。

ときには岡場所の女を買う。だが、チョンの間では乳房にも触らせてもらえないのだ。触り心地をたのしみながら仇同士でなければよいのにと思う。

乳房を揉みあげ乳首を摘む。津谷の息が聞えた。それまでは息を殺していたのだろう。

「よいのか」

と囁く。だが彼女は答えない。いいとは言えないのだ。よいのかと聞くのがヤボなのだ。いやならば、はじめから拒んでいる。肩を引く。だが仰向けにはならない。彼は尻を撫でた。丸い弾力のある尻である。女の尻をこうして撫でたのはいつだったろうか、と思う。遊女は尻も撫でさせてくれぬ。撫でようとすると、いやらしい、と言う。もちろん金次第である。金さえ出せばさまざまな奉仕をしてくれる。その金がなかった。ただ遊女の壺に一物を押し込んで放出するだけである。

仁十郎は寝間着の裾をたぐりあげた。腿をさらし尻をむき出しにする。腰から腿にかけては

よく肉をつけていた。撫でまわしながら手を切れ込みに近づけていく。

指を切れ込みにのばす。津谷ははじめてその指を拒んだ。羞恥のためだろう。彼女もこの家に来たときから、仁十郎とまぐわうことになるだろうことは予期していたはずである。

もう一度肩を引く。今度は仰向けになった。腰紐を解く。前を広げる。肌をさらした。彼は乳首をくわえたてた。そしてしゃぶる。津谷が呻いた。肌を撫でまわしておいて腿を割る。しばらくは男の手を拒んだ。膝の間に膝を割り込ませる。そしてはざまに手を入れそこを上下に撫でる。切れ込みを割る。そこはたっぷりではないが指が滑るくらいには潤んでいた。

切れ込みの中に指を遊ばせる。アッ、と小さく叫んで腰をひねった。指先が肉の芽に触れたのだ。

津谷はしきりに男の膝を締めつけて来た。兆しているのだ。仁十郎はおのれの一物に手をやって確めてみた。一物は怒張していた。

腿の間におのれの腰を割り込ませる。尖端が切れ込みに当てられると、彼女は、アッ、と声をあげ、そして一物が壺に滑り込むと、尾を引く声をあげて、はじめてしがみついて来た。

3

こういう夜が危いのだ、と仁十郎は布団を膨ませておいて縁で寝た。押入れで眠る夜もあっ

た。

立身徳兵衛は地下で嘆いていることだろう。おのれを斬った日下仁十郎に娘が抱かれたのだ。亡霊になれるものなら亡霊になって仁十郎の前に出て、恨み言の一言も言いたいところだ。

もちろん、仁十郎にも津谷の腹の中はわからない。どう思っているのか何を考えているのか。体を抱いて津谷に気をやらせて、彼女の恨みが消えるわけではないだろう。

翌日の夜も津谷の夜具の中に忍び込んだ。彼女は拒まなかった。彼のする通りになった。一物を受け入れて悶え狂い気をやった。その次の夜もそうだった。

そしてその次の夜は自分から手を出して一物を握って来た。体をさぐれば声をあげて体をくねらせる。そして数日すると、彼の一物を咥えて来た。女とは馴れるものである。

女の手がふぐりにのびて来る。仁十郎はあわててその手を押しのけた。そう、この手があったのだ。ふぐりの中の玉を握り潰されればいかな仁十郎でも悶絶してしまう。

女にはこのような手があったのだと。

仁十郎は痩せて来た。毎夜のように津谷を抱いているからではない。夜、ゆっくりと眠れないからだ。このところ不眠が続いている。眠ろうとすると、津谷が懐剣を手に襲いかかってくるのだ。手はすぐに枕もとの刀を摑む。そして幻だったことに気付いて刀を置く。

津谷が怖ろしければ、よそに行って眠ればよい。この家は彼女に与えておいて、他に住まいを求めればいいではないか、そうすればぐっすりと眠れる。だが、仁十郎は逃げ出すのはいやだった。

それに、夜を重ねる毎に津谷がいとしくなってくる。仇討を忘れてくれぬか、とは言えない。

一カ月ほど経ったある日、用心棒の仕事から帰って来ると、津谷の姿がなかった。彼女の荷物も消えうせていた。書きおきの一つもなかった。

帰ってくるのではないかと待ったが、むなしかった。探すにもどこを探してよいかわからない。仁十郎は居間に坐ってぼんやりしているしかなかった。

津谷がこの家に来てからの一カ月は何だったのかと思う。一緒に住んで隙をみつけて襲いかかるつもりだったのではないのか。あるいは夜中に寝首を掻くとか。だが一カ月間、彼女にはそういう様子は全くなかった。

津谷の出て行ったあとは、狭い家の中が妙に広くなったように思えた。

「なぜだ」

と呟いてみる。父の仇、兄二人の仇、討ちたかったのに違いない。仁十郎を討たねば、立身家の再興はならない。恨みにしても家のためにしても、討ちたかったはずである。

仁十郎は、もとの暮しにもどった。ぐっすり眠れるようにもなった。飯を炊くのが面倒で外で食事をとる。用心棒の仕事に出る。帰ってくれば寝るだけだ。住まいにもどるとき、もしやと思うことはあったが、住まいの前まで来ると家の中に灯りがないのに気付く。そしてがっくりと肩を落す。

どこへ行ったのか。津谷ほどの容姿があれば働くところはいくらもある。仕事の帰りに居酒屋に寄って酒をのむ。いつもはこの店で飯を食うだけだったのだが、今日は酒が欲しかった。

二合入りの銚子が運ばれて来た。酒を盃に注いで呑む。酒はそれほど強くはなかった。酔いが回ってくると、しきりに津谷が恋しくなる。かつて、仁十郎に津谷のような女はいなかったのだ。

津谷を思うとじっとしていられなくなる。津谷はどこに行ったのか。だが探す方法もない。走り出したい衝動に駆られる。どっちに走っていいのかもわからない。

酔って居酒屋を出た。足がよろめいた。よろめきながら歩く。浪人にぶつかった。

「おのれ、どこを見て歩いておる」

と浪人が叫んだ。三十五、六とみえる。浪人にしてはわりに身形がよかった。

「酔っておる、容赦あれ」

と頭を下げた。

「許さぬ」

と言った。

「ただ、ぶち当っただけではないか。無礼はお互いさまだ」

「何を言うか、刀を抜け、せめて刀を抜くまでは待ってやる」

「斬り合うほどのことか、忘れてくれ」

「そうはいかぬ、抜け」

浪人は刀柄に手をかけた。

八年前と同じである。浪人は刀を抜きかけた。仁十郎は刀を抜いた。抜いたときには浪人は刀を振り上げていた。仁十郎は刀を薙いだ。

浪人の右手首が切断され、ぶら下った。それと同時に仁十郎は流れた刀を引きもどし、上段から右肩を雁金に斬り下げていた。

たしかに八年前と同じだった。もっとも徳兵衛は左肩を斬り下げた。浪人は右肩である。浪人は目を剝いてよろめいた。左手に下げた刀柄に右手首がぶら下っていた。右肩から血が流れ出る。それが次第に体を染め上げていく。浪人は目を剝いたまま動けないでいた。体が動かないのだ。

「なぜ許してくれなかったのだ。わしは頭を下げた。それだけでよかったのではないのか。刀を抜くほどのことではなかった」

浪人は何かを言おうと口をパクパクさせたが声にはならなかった。仁十郎は背を向けて歩きながら、刃を拭った。

八年前の徳兵衛にも詫びた。頭を下げたのだ。それなのに徳兵衛は許してくれなかった。たしかにあのときも酒をのんでいた。

歩きながら振りむいた。浪人はまだ立っていた。

住まいへもどる。もちろん家の中は暗い。家に入っても灯りはつけなかった。敷っ放しの夜具の中に入る。酔いもあってそのまま眠った。

翌朝、起きて顔を洗い、そして髭を剃る。髪はただ撫でつけた。それほど多くは呑んでいないのに頭が重かった。今日も用心棒の仕事があった。冷や飯に冷めたい味噌汁をぶっ掛けて咽に流し込む。

玄関に出て雪駄をはく。その雪駄の下に白いものが見えた。それは書状だった。書状は昨日のうちに投げ込まれたのだろう。昨夜はそれに気付かなかった。

『日下仁十郎様』とある。女文字だった。封を開こうとした。左封じだった。左封じは挑戦状である。封を開いた。

『父立身徳兵衛、兄彦之介、同じく彦次郎の仇討ちたく、十二日午、駒ヶ原でお待ち申しております。津谷』

とあった。仁十郎は思わず、

「津谷！」

と声をあげていた。十二日は今日である。昼までにはまだ充分に時間があった。用心棒を頼まれている店に断りに行かねばならなかった。それでも充分に間に合う。

仁十郎は玄関に坐ったままだった。津谷としては仁十郎を討たなければならないのだ。宿命だった。だが、津谷が小太刀でも使って仁十郎に斬りかかるのではないだろう。助太刀を雇っ

ている。

まさか横須賀藩の侍たちではないだろう。徳兵衛がなぜ斬られたか知っている。目撃者は何人もいたのだ。徳兵衛は愚か者だった。徳兵衛のために仁十郎の前に立とうという者はいないはずだ。すると浪人か。

もしかしたら、昨夜斬った浪人も津谷に頼まれて挑んだのかもしれない。だが、浪人を雇うには金がいる。金がなくては浪人は動かない。その金はどこから出たのか。津谷はいくらかの金は持っていたようだが、浪人を雇うほどの金を持っていたとは思えない。

仁十郎は住まいを出て歩き出した。

津谷は、働き口がみつかったので仁十郎の住まいを出た。働き口とは料理茶屋だろう。容姿さえよければ料理茶屋では金を出す。津谷は料理茶屋で金持ちの旦那をつかまえた。その旦那が金を出して浪人を雇ってくれた。そう考えてみた。あるいはその旦那におのれを売った。その金で浪人を雇った。そんなところだろう。

仁十郎は駒ヶ原に立った。丈の長い草が風に揺れていた。見えるのはただ草原である。左手に富士山が見えた。こんなところに富士山があったのかと思う。前回は富士山など見なかったのに。

ここで斬り合って死んでもいい。前回も同じことを考えていた。それなのに津谷が住まいに来てからは眠れなかった。死ぬ覚悟があれば、津谷など怖ろしくはなかったはずだ。それなの

に、寝る場所を変えた。あれとこれとは別なのか。女に刺されるのはいやだけど、斬り合いには死の覚悟ができるということか。

草原に首を回した。だが人影はない。挑戦状をつきつけておいて遅れて来るとは、と怒ってみても仕方がない。仁十郎はその場に坐り込んだ。草がそよぐ以外は何も聞えて来ない。その場に寝転んでみた。空はぽっかりと抜けていた。何もない空だった。草の臭いだけがあった。

自分の生きざまを思っていた。立身徳兵衛を斬って横須賀を出た。それまで、槍奉行配下だったころも、さしておのれの一生に記憶として残るものは何もなかった。ただ貧乏暮しだった。大きな出来事と言えば、やはり徳兵衛を斬ったくらいのものだろう。おのれの一生とは何だろうと思う。津谷との一カ月ほどの暮しだけがときめいていた。

あたりに人の気配がしはじめた。ようやく敵が出て来たのだ。気配がだんだん近づいてくる。一人や二人ではない。五、六人か、あるいはもっといるのか。

「まだ来ていないということはないな」

「逃げたか」

「わしらの姿を見て、臆病風に吹かれたものとみえる」

浪人たちは勝手なことを言う。金で雇われた浪人たちであろう。大勢で押し包んで斬るつもりらしい。

仁十郎は、ゆっくりと立ち上った。浪人たちは気付かない。彼もまた浪人と同じような身形をしていた。何人かが仁十郎をちらりと見たが、仲間だと思ったらしい。

敵を数えてみると十人いた。十人の中にまぎれ込んでしまったのだ。仁十郎は目で津谷を探した。探すまでもなく津谷は浪人たちの後に立っていた。白い手甲脚絆に白い襷をかけていた。帯には脇差を差している。

浪人の一人がようやく仁十郎をみつけた。

「こやつ、こやつが日下仁十郎だ！」

近くにいた浪人たちが、ギョッ、となりとび退いた。

「いつの間に、まぎれ込んだ」

仁十郎は、刀を抜いた。浪人たちはばらばらと走って仁十郎を囲んだ。

「父立身徳兵衛の仇、日下仁十郎」

と津谷が叫んだ。

浪人たちがいっせいに刀を抜いた。仁十郎は相手が囲むのを待ったのだ。走り回って斬るよりも囲まれて斬るほうが斬りやすかった。

十人が囲んだ。肩を触れ合っている。これではかえって動きにくい。十人で囲んでいるので輪が大きかった。これでは間合に入ることはできない。斬りつけるにしても上段からの一閃でしかない。薙いだりはできないのだ。

十人が一度には斬りかかれない。一歩前に出てそれから間合に入らなければならないのだ。

仁十郎は振り向きざまに後を薙いだ。後を牽制しておいてもとにもどる。中の一人に向って間を縮めた。その浪人は一歩前に出た。前に出なければ肘や肩が隣りの者と触れ合うのだ。その者が剣尖を上げた。仁十郎は一気に間をつめた。思わず刀を振り上げる。彼の剣尖が動き浪人の手首を切断する。

ワッ、と目を剝く。そして右首筋を撫でるように斬った。左へ刀を薙いだ。斬りかかろうとした浪人はさっと下る。仁十郎は振り向いた。

斬りかかろうと刀を振り上げた浪人の腹を薙いだ。

そのときになって、浪人たちが、ワーッ、と騒いだ。はじめに斬った浪人の首筋から血が噴き出し、それを何人かが浴びたのだ。

腹を裂いた浪人に体を寄せた。振り向きざまに刀を薙ぐ。一人が斬り込んで来たが、仁十郎には届かなかった。

ハッ、と立ち直ろうとするところを薙いだ。浪人は目を剝いた。そいつの首が血流に押し上げられ、転がり落ちる。その髷を摑んだ。首を投げる。

浪人の一人がそれを胸で思わず受け取める。首を失った浪人は、首根から血を噴出させる。その血を浴びまいと浪人が逃げる。

仁十郎は、刀を振り上げた浪人の肩に刃を叩き込む。肩のつもりが浅かった。浪人の右腕が体から離れぶら下った。その浪人はおのれの右腕と刀を左手で支えていた。

仁十郎は刃を宙空に舞わせた。浪人が刀を投げ捨て顔をおおった。両眼を裂かれたのだ。瞬時だった。四人が斬られた。残った浪人も何人か仲間の血を浴びていた。血を浴びると戦意を喪失するし、手を血で汚せば刀を握れなくなる。

浪人たちは散った。四つの死体が横たわった。まだ死体になり切れない者もいた。腹を裂かれた浪人は両手でおのれの腹を抱えていた。手は血に汚れていた。それでも腹からにじり出ようとする臓腑をけんめいに押し込んでいる。

仲間の首を抱いた浪人はどうしてよいかわからず、うろうろしていた。斬りかかってくるだけの気力のある浪人はいなかった。

仁十郎は一人の浪人を追った。他の浪人たちも逃げ出した。彼は深追いはしなかった。もどってくると、仁十郎は津谷の前に立った。

四人を斬るには神経を集中させていた。神経を散らすと、疲れが出て来た。ぐったりとなって片膝をついた。

「津谷さん、突け」

「いやです」

と言って津谷は一歩退いた。

「いやですとは何だ。父上と兄二人の仇は討たねばなるまい」

「いやです」

「わしのことが忘れられるのか」
「生きている限り、忘れません」
「ならば、脇差を抜いて突いてこられよ」
津谷は背を向けて走りだした。くりくりと動く丸い尻を見ていた。仁十郎はその場に坐り込んだ。日ごろ体は鍛えていない。それでがっくり疲れが出たのだ。
浪人がよろめきながら立ち上った。腹から白いものが前掛けのように流れ出ていた。臓腑だ。臓腑をぶらぶらさせ血ぬられた刀を手に歩いてくる。死にきれないのだ。腹を裂かれてもまだ一日くらいは生きている。仁十郎に斬られたかったのだ。早く死にたかった。だが、仁十郎は立ち上ると逃げだした。
「おい、待ってくれ」
浪人は声をあげた。

解説

前島不二雄

峰隆一郎と、その作品の周辺について何事かを語りたいのであるが、以下、この稿の筆者の気分次第で、彼とも、峰さんとも書くのを許していただきたい。定年で退社した筆者が、徳間書店に勤めていた編集者時代、徳間文庫編集部では、峰隆一郎氏の担当者だった。長年、峰さんと呼んできた。だから峰隆一郎と改まって書くよりも、彼や、峰さんと記したほうが親しみを感じたり、彼の心情により立ち入れると思えるときが間間（まま）あるからなのである。
その峰さんの作品群が、この平成五年（一九九三）九月で、ついに百三冊に達した。
一冊目が、昭和五十八年（一九八三）に刊行された、書き下ろしの処女長編時代小説、『人斬り弥介』（青樹社）であり、百三冊目が、やはり、書き下ろしの『素浪人宮本武蔵（1）』（光文社文庫）である。
この十年間の死に物狂いの成果だ。平均すれば、一年十作、一作品四百枚とすれば一年に四千枚というペースで書き続けてきた事になる。実は、その上に短編小説も数多く発表しているから、実質の枚数はそれ以上になる。

彼の仕事は、ミステリーと時代小説の二分野に及んでいる。しかも、刊行された、その百三冊が、全て長編小説なのである。驚くべき業績と言えよう。

偶然ながら、この記念すべき二つの長編時代小説（彼自身の用語によればチャンバラ小説）は、峰隆一郎という作家の特長を端的に示していると思える。

彼の本領、仕事の主要部分は、やはり時代小説にあることを暗示している、と見られるのが第一点。

もう一つは、彼の長編時代小説の主人公と登場人物のほとんどが、食い詰め浪人であり、生き伸びるために人斬りを余儀なくされる、と設定されているから、世に入れられることのない素浪人の宮本武蔵の生き様こそが、百三冊目の峰作品に相応しいといえよう。

剣聖でも求道者でもない、人斬りの素浪人として武蔵を描こうとするところに彼の作家としての真面目、独自のスタンスがあるのだと思えるのだが、いかがなものであろうか？

本書を読んでいただければ分かる事だが、彼の小説には、のんびりとこの世を謳歌して過ごしている若殿様や若旦那が重要な役割を担って登場することは、まず、無い。

『柳生十兵衛』シリーズ（徳間文庫）の駿府城主、五十五万石の大大名、徳川忠長だけが例外といえようか。

それとても、小説の結構、構成の必要上、作者によって重要な役割を与えられてはいるが、

所詮、忠長はバカ殿様で、十兵衛の命懸けの目的、——仏徒の将軍家光を廃して、神徒の忠長を将軍に擁立すること、そしてその目的達成のために十兵衛は将軍の近習という将来性に富んだ身分を捨てて、あえて浪人となるのだが、——その悲願を達成するためには、結局は、何の役にも立たなかった人物として忠長は描かれている。その意味では、殿様は、やはり峰作品の主人公とはなり得ないのである。

なぜ、峰隆一郎は浪人にこだわるのか？

その解答は難しい。

ひとくちに浪人といっても、様々である。〈牢人〉とも書くが、意味は同じである。強いて言えば、平安末期・鎌倉時代から戦国時代にかけての失業武士、つまり浪人を、牢人と書いて区別することが多い。例えば、真田幸村や後藤又兵衛は牢人と書かれる。その表記の方が彼等の生きた時代の気分や雰囲気が伝わりやすいからである。

浪人にも、ピンからキリまである。峰さんは、ピンにあたる、八十人もの弟子を供に回国の旅を続けたと伝えられる戦国時代の牢人、塚原卜伝も〈剣鬼〉として描いたが（祥伝社文庫）、筆者には、キリといえる、飯にも女にも飢えている、垢にまみれた無名の浪人の生と死を描くことに、作者はより愛着を抱いているように思えてならない。

それは、作家として不動の地位を築き上げるまでの、彼自身の長い、いわば〈半浪人〉暮ら

しと深い関係があると思える。痩せ浪人の生き様と死に様は、峰隆一郎の生き様を反映しているといっても、読み違いであると非難されることはあるまい。

考えてみると、なぜなのか不思議な気持ちにもなるし、また、それが新人作家の辿る当然の道だ、とも見られるのだが、これまで、峰さんの短編集は、一冊も刊行されたことがない。本書『孤狼の牙』が初の作品集なのである。

しかも、文庫による、いわゆるオリジナル作品集、――過去に単行本として刊行されたことのない作品を編集した本、――それが本文庫なのである。

その事実が意味しているものは何なのかを探るのは、興味深い。

峰隆一郎が作家としてデビューしたのは、今から十五年前の昭和五十四年（一九七九）であった。

「流れ灌頂」という短編時代小説で、彼は、『問題小説』（徳間書店）の第五回小説新人賞を受賞したのである。

読者のために、出版業界の一端を紹介してみたい。

まず第一に、新人がデビューするために開かれている道は、懸賞小説に応募するしかない、と断言しても良かろう。美男美女俳優のように、路上でスカウトされることなどは、無い。逆に言えば、応募さえすれば、当落は別にして、かならず編集者に読んで貰えるのである。

世に、いわゆる〈持ち込み原稿〉といわれている作品がある。読んでほしいと、作者が原稿を出版社に送ってくることが多い。が、編集者は当面の仕事に追われてアップアップしているから、とても読むゆとりがない。山積みになっている持ち込み原稿の中の一つとして、放置される運命を辿るのがほとんどなのである。

雑誌のフリーのライターとして苦労した体験のある峰さんは、その間の事情を熟知していたから、四十五歳にして懸賞小説に挑戦したのだった。

その時の応募作品三百六十二編、関門を次々に潜り抜けて金的を射とめたのは峰隆一郎ただ一人である。三百六十二人のプロ志願のゴルフコンペで優勝した事になるといえば、作家への道がいかに厳しいかをご理解していただけるであろう。さらにいえば、あの雅子さまの外交官試験は、ただの五十倍にしかすぎない。作家になることと比べれば楽なものである。しかも外交官ともなれば暮らしは保証されているが、作家には何の保証もない。読者が支持し、本を買ってくれなければ、作家生命は終りなのである。

受賞作は、博打打ちの用心棒としてしか生きる道のない、それでいて、ごく真面目で、一種の正義感をも持ち合わせている浪人と、したたかな老いた渡世人との関わり、生き様をミステリアスに描いた作品である。

現在の峰作品の特徴は、リアルな剣戟描写、即物的ともいえる強烈な官能シーン、意外なストーリイ展開……といえようが、この「流れ灌頂」も、そのすべての要素を備えている。迫力

満点の娯楽時代小説と言えよう。まぎれもなく、峰作品の原点といえる。

当時、『問題小説』編集部では、一作品を二人の部員が読んで選考を進めていった。二人の間で、作品の評価が著しく異なる場合は編集長が読み直し、結論を下すシステムになっていた。

筆者には、世の中で、懸賞小説の選考過程ほど公平無私なものは存在しないのではないかと思える。縁故入選などは有り得ない。実力と、わずかな運だけが物を言う世界なのである。

といっても、前述のように新人賞を受賞しても、何かの保証がある訳ではない。芥川賞・直木賞を与えられながらも消えていった作家の数は少なくないのである。作家として生き残るのはむずかしい。一作だけで終る人のほうが多いのである。

が、峰さんは生き残った。どころか、大成しつつある。

受賞の言葉で、彼は語っている。

「私は、二十歳の学生（日本大学理工学部、後、芸術学部に転部、結局、中退する）のころ、漠然と三十歳になった時には作家になっているだろう、と考えていました。ところが、三十歳どころか四十歳になっても小説が書けない。四十五歳になって、残り時間が少ないのに気付き、あわてて書きはじめました。そして、応募第一作が受賞と決まり、長年の約束を果たした気分でほっとしています」

大学を中退したあと、四十五歳まで、峰さんは、九カ月出版社に勤めた以外は、なんと二十数年、フリーのアルバイターとして生きてきたのだった。エリート・サラリーマンとは無縁の

暮らしだった。ただ、心中、ひたすら作家たらんと志していた。

峰作品に登場する浪人は、峰さん自身と同様に何等かの志を抱いている。時代の大勢に反抗し、抵抗する魂の持ち主である。そして、その志と生活のために人を斬るのである。

また、エリート・サラリーマンと言える、お城勤めの歴（れつ）とした武士も主人公とはならない（原則として、江戸時代の旗本は、六百石以上の知行〈領地〉を与えられている者が歴々（れきれき）の衆とされ、殿様と家来からも呼ばれ、その妻は奥方と呼ばれる。それ以下の旗本・御家人は旦那さまであり、妻は御新造さまである。大名の家臣もほぼ同じである）。峰作品に時として登場する旗本や御家人は貧乏である。アルバイトをしなければ生きていけない侍が描かれる。

社用で酒を飲める生活とは、まったく縁のない暮らしを峰さんは余儀無くされたのだった。むろん、峰さんは、そんなことは百も承知し、覚悟していた。が、志は捨てなかった。峰作品の浪人は、彼の等身大の人物なのだ、と筆者は考えている。一見、荒唐無稽と見えかねない峰作品にリアリティが生まれる理由の一つは、そこにあると思うのだが、どうであろうか？

繰り返すが、一つの短編が新人賞を受賞したからと言ってバラ色の作家生活が待ち受けているわけではないのである。

受賞後、『問題小説』誌の注文に応じて、この平成五年までの十五年間に、二十編の短編小説を発表していった（一年に一編強であるから、これだけでは暮らしは立たない）。その中から、八編を選んで編集したのが本文庫である。

受賞作が日の目を見るのに十五年かかった事になる。新人作家の辿る道は、長く、険しいのだといわざるを得ない。

そして、それに耐え、彼が爆発するのに、新人賞受賞後、四年間かかったのである。それが『人斬り弥介』であった。

彼の時代小説（チャンバラ）の新しさ、面白さは何か？

それは、彼が刀とは打ち合えば折れるものだ、という前提に立って書いているからである、といいたい。

だから、彼は刀身を打ち合わない剣戟シーンを工夫するのである。さらに、刀が折れたときの闘いを描く。

何だ、それだけか、と思われる方もおられようが、刀は打ちあえば折れるという前提にたって書かれた小説は、峰作品の登場以前には無かったのである。そこに、彼の作品が、従来の剣豪小説を超えた新しさと面白さを持つ所以があるのである。

では、剣に生き、そして死んでいった男たちの、さまざまな運命を描いた本書をお楽しみください。一口にいって、お勧め商品である。変な表現だが、読んで損をした気分になることのない、良質の作品集である、と言っておく。

一九九三年一二月

この作品は徳間文庫オリジナル版です。

徳間文庫

孤狼の牙

© Ryûichirô Mine 1994

1994年1月15日　初刷
1995年4月25日　4刷

著者　峰隆一郎

発行者　徳間康快

東京都港区東新橋一―一〒一〇五

発行所　株式会社徳間書店

電話（〇三）三五七三・〇一一一（大代）

振替　〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷　凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当　本間　肇〉

ISBN4-19-890063-9（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

ガラスの部屋
勝目　梓
絡み合う舌……這い回る指先……。恋愛ゲームを愉しむ男女の風景。

ウィンチェスターM70
大藪春彦
冷徹な狙撃者が信じ、愛したのは、コイツだけだった……。

ヒトラー暗殺計画
檜山良昭
ドイツのイギリス本土上陸作戦が迫るなか、秘かに進められた計画。

情婦の夜
富島健夫
欲望のおもむくまま情事に溺れる、男と女の自由な性愛関係。

お江戸探索御用 上
《迷路の巻》
多岐川恭
旗本の養嗣子が誘拐され、家督を狙う関係者の男児が三人も!?

お江戸探索御用 下
《悪道の巻》
多岐川恭
事の核心に近づけば誰かが死体に。万探索屋も仰天のどんでん続き。

孤狼の牙
峰隆一郎
餓狼と化した浪人と凄じいまでの見切りの博徒との対決……。

忍法系図
早乙女貢
旗本半蔵に忍び寄る復仇の秘技。父娘二代の本懐をとげる日が……。

徳間文庫の最新刊

秘曲
戸部新十郎
嵯峨野を訪れた男の胸に響き渡る、美しくも妖しい秘笛の調べ。

炎の女 日野富子
高野　澄
四代にわたる足利将軍をあやつり、室町幕府を牛耳った富子の生涯。

日本の戦史
関ヶ原の役
旧参謀本部編纂
関ヶ原を解析する！家康VS三成、何が両雄の勝敗を分けたのか!?

騎馬民族の源流
豊田有恒
〝騎馬民族の故郷〟内モンゴルを古代史に造詣の深い作者が訪ねる。

「伊豆の瞳」殺人事件
吉村達也
嵐の夜、湖畔の山荘に殺人者が。意表を衝くラストの大逆転！

谷川岳 霧の殺意
梓林太郎
人の殺意も覆い隠した霧を、人情刑事・道原伝吉がはらいさる！

負のアリバイ
日下圭介
突然かかってきた一本の電話が消し去った筈の過去を蘇らせた……。

小沢一郎の挑戦
大下英治
政界再編は如何にして成ったか!?危機管理で問われた政治家の力量。